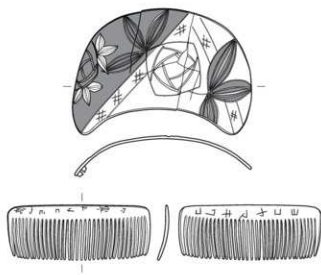


# 新町戸崎遺跡 2

- 新町防災アリーナ建設に伴う旧鐘紡新町工場若草寮跡発掘調査 -



2023

高崎市教育委員会



## 序

高崎市は、古来より関東と信越をつなぐ交通の要衝に位置する人口約36万9千人の中核市です。

平成29年10月末には上野三碑がユネスコ「世界の記憶」に登録され、今年度で5周年を迎えています。また、国重要文化財および史跡である旧新町紡績所や、歴史と景観が調和した国指定史跡保護田古墳群など、古代から近代までの多くの遺跡が存在する文化財の宝庫となっています。

本書で報告する新町戸崎遺跡は新町防災アリーナ建設工事に伴って発見された埋蔵文化財であり、令和2年4月から令和3年3月にかけて発掘調査を実施したものです。このたびの調査では、大正・昭和初期に建設された旧新町紡績所の関連施設とみられる遺構を検出し、本市の近代化遺産の一端を知る成果をあげることができました。本報告書はこの成果について文化財調査報告書第488集としてまとめたものです。今後の研究の参考資料としてご一読いただければ幸いです。

結びに、本遺跡の発掘調査および報告書刊行にあたりご協力いただきました関係機関ならびに関係者の皆様に心から感謝申し上げ、序といたします。

令和5年3月  
高崎市教育委員会  
教育長 飯野眞幸

## 例言

- 1 本書は新町戸崎遺跡第2次調査（高崎市新町2330-40、調査番号801）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、新町防災アリーナ建設（ホスポーツ課所管）に伴う事前調査として令和2年4月20日より3年3月31日まで実施した。
- 3 発掘調査は、矢島浩（市教育委員会文化財保護課再任用職員）と坂井隆（同嘱託職員）が担当した。
- 4 調査は、次の点に留意して行った。
  - ア 単独の構造物跡をそれぞれ一つの遺構として命名した。
  - イ 層序は全て自然礫層の上になされた盛り土であるため、断面観察を行わなかった。
  - ウ 建物の窓ガラスと思われる板ガラス片と瓦当部分を除く瓦片は、遺物としなかった。
  - エ 各レンガ遺構は調査終了時に解体し有刻印赤レンガを遺物としたが、全てのレンガ遺構の確認はできなかった。耐火レンガは、全てを遺物として取り上げた。
- 5 出土資料整理と報告書作成は、令和4年4月1日より5年3月31日まで坂井隆が担当して実施した。第1章第2節は滝沢匡（市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財担当係長）、第4節と第3章第2節Dは矢島浩が執筆した。
- 6 資料整理は、次の点に留意して行った。
  - ア 鐘紡新町工場女工寄宿舎群（若草寮）の理解を、遺構把握と遺物選択の目的とした。
  - イ 多くの遺構は建物の構造物把握を求めてグループ化したしたが、そのためにクラシエフーズ株式会社保管の鐘紡時代の各図面を参考にした。
  - ウ 報告遺物は取り上げ遺物の一部のため、番号は飛んだものがある。特にプラスチック歯ブラシと旋軸土管は報告していない。
  - エ ガラス瓶類は、実測図を作成していない。また形状呼称区分は、次による。  
大型：器高20cm以上 小型：同5-10cm 超小型：同5cm以下 短：器高3cm以下で底径4cm以上  
オ ガラス瓶類の撮影及び整髪具類・洗面具類・大型金属製品等の実測・撮影は株式会社測研に委託した。
  - カ 遺物番号は、次のように種類ごとに略号を付けた。  
CN: 銭貨 CR: 陶磁器類 FL: 製糸器具 HT: 整髪具類 GL: ガラス瓶類 MT: 金属製品  
OT: その他 RB: 赤レンガ ST: 石製品 WB: 耐火レンガ WD: 木製品 WT: 洗面具類
- 7 自然科学分析は、株式会社ナレオ・ラボが行った。
- 8 調査と報告書作成には、次の刊行物などを参考にした。

『漢留安型録』1933、『鐘紡新町工場90年史』1969、『新町町誌』1988  
群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『新町戸崎遺跡』  
サンドラ・シャール2020『『女工哀史』を再考する 失われた女性の声を求めて』京都大学学術出版会  
杉並区立郷土博物館2008『硝子壺の残像』  
高崎市教育委員会1996『東町V遺跡』  
高崎市教育委員会2007『飯塚西金井II遺跡』  
高崎市教育委員会2014『旧新町屑糸紡績所建造物調査概要報告書』  
玉里村立史料館2001『特別展近現代遺跡発掘！』  
畑中英二2015『岡本太郎、信楽へー信楽焼の近代とその遺産-』信楽焼振興協議会  
三木良1999『四季の糸』西毛文学  
瑞浪市陶磁資料館2012『番号の付されたやきもの-戦時下の瑞浪窯業生産-』  
よみがえれ！新町紡績所の会2018『鐘紡新町工場に誇りあり-つむぎ手の記憶』
- 9 調査と報告書作成には、次の個人と組織の方々から助言を得たことを感謝の意を込めて記す。

大西雅弘 長佐古真也 新鐘倫 よみがえれ！新町紡績所の会 富岡市教育委員会 片倉シルク記念館
- 10 発掘調査の記録および報告遺物は、高崎市教育委員会が保管している。

# 目次

## 序文 例言

### 第1章 遺跡と調査の概要 6

- 第1節 遺跡の概要 6 (米軍撮影空中写真7)
- 第2節 調査に至る経過 8
- 第3節 調査経過と方法 8
- 第4節 遺跡の立地と環境 9 (周辺の遺跡図 11・12)

### 第2章 調査の成果 13

- 第1節 概要 17 (折込全体図 13)
- 第2節 建物ごとの主な遺構・遺物 17
  - A 葛籬寮北外側 17 B 萩寮 18 C 隔離室・遺物廃棄場 SU3 21 D 菊寮 26
  - E 董・撫子寮・遺物廃棄場 SU2, 5, 6 28 F 教室 33 G 仏間 35 H 梅寮 37 I 竹寮・松寮他 39
  - J 大廊下他 44 K 排水路3・遺物廃棄場 SU1 46 L 藤寮・百合寮・遺物廃棄場 SU4, SX4 48
- 第3節 遺物実測図 52
  - 陶磁器類 52 製糸器具 66 整髪具類 66 洗面具類 69 銭貨・その他 70 金属製品 71
  - 木・石製品 72 赤・耐火レンガ 72
- 第4節 遺物観察表 74
  - 陶磁器類 74 製糸器具 77 ガラス瓶 78 金属製品 81 整髪具類 82 洗面具類 83 銭貨 83
  - その他 83 石・木製品 83 赤・耐火レンガ 83

### 第3章 調査のまとめ 84

- 第1節 遺構の特徴 84
  - A 各建物の規模 84 B 基礎構造 84 C 排水路 85 D 便所と洗面所 86 E 居室のあり方 87
- 第2節 遺物の特徴 88
  - A 寄宿舍使用遺物とその他 88 B 廃棄場遺物 89 C 製糸器具 89 D ガラス瓶類 90
  - E 近現代陶磁器類 92
- 第3節 女工寄宿舍の生活 93
  - A 部屋の広さと建物の特徴 93 B 遺物から見た女工の生活 94 C 隔離室 95 D 小結 96

### 付章 新町戸崎遺跡 2 出土ガラス瓶内液体の成分分析 97

## 写真

- 1 空中撮影写真 (原色) 101
- 2 遺物写真 104
  - 原色: 陶磁器類 104 製糸器具 112 ガラス瓶類 113 整髪具類 120 その他 122 洗面具類・石製品 123
  - 単色: 金属製品 124 銭貨 125 木製品 125 赤レンガ 125 耐火レンガ 126
- 3 遺構写真 (単色) 127
  - A 萩寮 127 B 隔離室 130 C 菊寮 136 D 董・撫子寮 138 E 教室 141 F 仏間 143 G 梅寮 145
  - H 竹寮・松寮他 147 I 大廊下 152 J 排水路 3 154 K 藤寮・百合寮他 156 L 遺物廃棄場 159

## 抄録 161

# 第1章 遺跡と調査の概要

## 第1節 遺跡の概要

本遺跡は明治10(1877)年創設の官営糸紡績所を出発とする旧鐘紡新町工場跡で、その女工寮群(若草寮)跡が今回調査の対象地である。西に21km離れた世界文化遺産登録の富岡製糸場から5年遅れて操業開始したこの工場では、製糸場で使われなかった屑糸から絹糸を紡績して国内市場へ供給した。明治20(1887)年に三井の三越得右衛門に払い下げられた後、同35(1902)年に他社と合併して絹糸紡績新町工場となり、さらに同44(1911)年に鐘紡へ吸収された。紡績と関連する紬糸業と共に大正10(1921)年には製糸業も開始し、製糸部工場は昭和14(1939)年には片倉富岡製糸場に次ぐ全国2位の規模となった。

輸出が途絶えた第二次大戦を乗り越えて戦後に生産を再開したが、構造的不況により昭和31(1956)年には製糸業を停止した。その後化学繊維を含めた紡績業を続けたものの、屑糸紡績所創業以来98年目の昭和50(1975)年に繊維工場から食品工場へ転換せざるをえなかった。平成5(1992)年にカネボウフーズ新町工場となったが、さらに広大な敷地も次々と手放すような経営不振によって、巨大企業カネボウは最終的に平成18(2005)年には事実上倒産した。

後継企業のクラシエフーズに引き継がれた旧紡績部工場には日本式技術で建てられた操業開始時の建物が残っており、当初これらは富岡製糸場と共に絹産業遺産群の一つとして世界遺産候補に組み込まれた。その後、食品企業クラシエフーズが操業を継続していることもあって候補遺産から除外されたが、平成27(2015)年に工場本館を中心とする範囲が国史跡「旧新町紡績所」、そして残存する明治期建物5棟を一括して国指定重要文化財となった(高崎市教育委員会2017『史跡・重要文化財 旧新町紡績所保存活用計画』)。この部分の北側を画する温井川の改修に関連した平成25(2013)年の発掘調査では、大正13(1924)年に建設されたレンガ造護岸が発見され保存されている(群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『新町戸崎遺跡』)。

史跡指定地の東側は倒産前の平成7(1994)年にカネボウによって売却され、旧製糸部跡は高梨乳業そして旧女工寮宿舍群跡は群馬県が所有することになった。東端の后者は、多目的空間の芝生広場として合併前の新町(現高崎市)によって管理されていたが、平成31(2018)年には北側約2/3を高崎市が防災アリーナ建設用地として県から購入した。

当初工場近くにあった女工寮宿舍が東に移ったのは、絹糸紡績時代初期の明治39(1906)年頃である。この会社への合併の明治35(1902)年から6年間で女工数は2倍以上の320人に増えたが、それを支えたのがここで新設された寮宿舍群だった。寮宿舍建物は増設され続け、昭和13(1938)年頃には11棟と食堂など関連建物数棟で構成される千人近い女工たちが生活する場となった。この地区の北側は旧中山道が温井川を渡る弁天橋に接し、旧新町宿西端に極めて近い。



昭和40-43年の鐘紡新町工場北東からの全景 手前左が若草寮女工寮宿舍群(『鐘紡新町工場90年史』より)

## 米軍空中写真に見る遺跡地

下写真には、昭和13(1938)年頃に完成した寄宿舍群「若草寮」の全容が旧中山道に近い右上に見えている。北から東西方向に長い建物群がほぼ等間隔で6列並び、撮影時点での呼称は北から順に、松寮西・松寮東、竹寮・藤寮、菊寮・萩寮・梅寮、蓮寮・撫子寮・学校・仏間、菖蒲寮・浴場・教室、食堂・桜寮となる。東西方向の道の向い側に、医局建物や社宅があるのが分かる。

寄宿舍群の左に接する上中央の細長い建物6列を中心とする区画が、大正10(1921)年に操業開始した製糸部工場である。昭和14(1939)年には片倉富岡製糸場に次ぐ全国第2位の規模になった姿が、この写真に示されている。だが昭和31(1956)年には閉鎖され、跡地はテニスコートなどの建物のない状態になってしまった。大正から昭和13年までの寄宿舍増設の大きな要因となった製糸部工場の建物群写真は、『鐘紡新町工場90年史』には掲載されていない。

さらに左下に斜めに走る国鉄高崎線線路に接する上左側が、明治10(1878)年建設の官営絹糸紡績所に始まる紡績・繰糸部工場建物群(現クラシエワーズ工場範囲)である。創業当初の建物(現重要文化財指定)を北側の温井川沿いに残すが、大きく増改築されて現在とほぼ変わらない建物群が写っている。右下には、昭和18(1943)年に中島飛行機に売却された昭栄製糸の工場建物群が見える。片倉に次ぐ長野県岡谷の大資本山十組の新町製糸所だった工場で、製糸工場としては鐘紡より早く明治38(1905)年に操業を始めた。中山道宿場から工業都市に変わった新町を、この写真に見ることができる。



1947年10月30日撮影米軍撮影空中写真での鐘紡新町工場(日本地図センター)

## 第2節 調査に至る経過

令和元年8月、事業者である高崎市総務部スポーツ課（以下スポーツ課と略）から、高崎市新町において計画している新町防災体育館（仮称）建設工事に先立つ埋蔵文化財の照会が高崎市教育委員会文化財保護課（以下、文化財保護課と略）にあった。該当地は周知の埋蔵文化財包蔵地には該当していないが、国指定史跡および重要文化財旧新町紡績所の隣接地で、当時働いていた女工の宿舎が存在していたことが明らかであったため、遺構を確認するための試掘調査を行うこととなった。

令和元年9月18日、スポーツ課より文化財保護課に埋蔵文化財試掘調査申込書が提出され、同年10月29日に試掘調査を実施した。その結果、近代レンガ建物の基礎を確認した。この結果をもとにスポーツ課と文化財保護課で協議したが、体育館建物部分および駐車場切土部分について現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。

同年11月29日、体育館建設予定地が文化財保護法第95条第1項の規定による周知の埋蔵文化財包蔵地として決定された。

令和2年4月1日、スポーツ課から文化財保護法第94条第1項の通知があり、同日付で工事着手前に記録保存のための発掘調査をするよう勧告を行った。また、同日付でスポーツ課より文化財保護課へ発掘調査の予算執行委託があり、これを受け同年4月20日より体育館建物部分の発掘調査を開始した。遺跡名については「新町戸崎遺跡第2次調査」とした。

調査中である同年7月2日、発掘調査および建設工事の工程についてスポーツ課、高崎市建設部建築住宅課、文化財保護課の三者で協議を行った。当初、体育館本体部分は令和2年度、外構部分は令和3年度に発掘調査する予定であったが、工事工程の都合で令和2年度中にすべての発掘調査を終了させてほしいとの依頼があった。これを受け、切土を中心とする外構部分について、同年8月17日から19日にかけて追加の確認調査を行った。その結果、女工寮に関連する遺構が確認され、予算措置を講じて外構部分の調査を引き続き実施した。

同年11月16日、上記三者による工程会議で体育館本体部分の余掘りで遺構が破壊されることが判明し、追加調査をすることとなった。

## 第3節 調査経過と方法

### A 調査経過

試掘調査で現地表面から20cmほどでレンガ構造物が発見されたことで、本調査ではまず最上層の芝生化盛土（厚さ10cm）から少し下がった程度までを重機によって掘削した。しかしその面で確認できた遺構はかなり限定されたものであり、確認遺構以外部分も手掘りが難しい極めて硬化した盛土だった。そのためさらに下げた30-40cmほどの深さまで再度の重機掘削を行ったところ、多くの建物基礎遺構を確認することができた。

最終的に建物を取り壊されたことによる擾乱部分があちこちに見られたが、建物建設時も盛土がなされていたため識別が簡単ではなかった。基盤の礎層（現地表下約1m）の状態そして遺構を形成するレンガ列と礎層の見極め（基礎構造として原位置保持の確認）が鍵となることを理解するまで、少なくとも時間が必要だった。そのため当初は遺物の出土量も、要調査判断の条件とせざるをえなかった。

小型ツルハシしか役に立たない硬化状態により、遺構検出の人力掘削は多大な労力を要した。また体育館の建設設計が調査と並行したため、要調査箇所は当初の建物本体部分から広がった。それにも関わらず調査経費が限定されていたことで作業員人数は限られ、また調査終了時の冬季には休息所なしの調査も強いられた。

ただし結果的には旧鐘紡新町工場女工寄宿舎群跡地全体の広い領域で、限定的な範囲ながら発掘調査を実施できた。そのため獲得できた情報量はかなり多く、近代建物群としての遺構のあり方理解が次第に可能になった。同時に西側隣接地にあった製糸部工場から持ち込まれたものを中心とする近代産業遺物を認識できたことは、本遺跡調査のような近代産業遺跡の埋蔵文化財調査に対する新しい視点と方法を模索できたとと言える。



## B 方法

当初調査範囲の南東隅に近い原点（世界測地系 X=31,050, Y=-65,510）をA1グリッドの南西角点として、4×4mのグリッドを時計回りにA-1・A-1・A-1と配した。番号は北方向に+数字、南方向に-数字、東方向に+アルファベット、西方向に-アルファベットの組み合わせで命名した。

全てのレンガ・コンクリート・礎構造物で原位置を保っているものを遺構と認定し、それぞれに遺構番号を付与した。これらの検出に向けた周辺の手掘り掘削作業で出土した遺物を各遺構の遺物とし、また遺構から離れた状態で出土した遺物はグリッド名を付与した。

自然礫層（地表下約1m）の上は全て人為的な盛り土で、全ての遺構と遺物はそこからの検出である。この盛り土は最上層の芝生形成層（約10cm）を除いて分層が不可能だったため、遺構・遺物検出に当たっての層位記録は取らなかった。重機による表土掘削は遺構上面検出を目安としたが、その絶対的な高さは擾乱状況によってかなり異なっていた。

調査中の実測作業は経費理由により行わず、各地点の終了時に撮影した垂直オオルソ写真の図化で平面図を作成した。長く延びる遺構については、同時に撮影した水平オオルソ写真の図化により見通し図とした。G-6グリッドは、調査終了後の工事立会いのみである。

## 第4節 遺跡の立地と環境

本遺跡のある高崎市新町は群馬県中南部に所在し、西と南は藤岡市、北は鳥川を挟んで佐波郡玉村町、東は神流川を挟んで埼玉県児玉郡上里町と接する。本遺跡は新町の北西隅部にあり、高崎市役所東南10km、市役所新町支所西0.9kmに位置している。新町は交通の要所で西に闇越自動車道、南に一般国道17号とJR高崎線、東には県道40号藤岡大胡線が走っている。

本遺跡北625mには高崎市倉沢町の鼻曲山に源を発する鳥川が東流し、いずれも鳥川支流である群馬県下仁田町と長野県佐久市との境にある物見山に源を発する鑛川が本遺跡西3.65km、群馬・埼玉・長野三県が境を接する三国山の北斜面、多野郡上野村檜原元谷地内に源の神流川が東1.95kmで共に北北東方向に流下している。本遺跡に隣接する温井川は藤岡市岡之郷温井地区を流れることに由来する。藤岡市糞塚地内を上流端として藤岡台地の北端崖下の藤岡市中栗須堀向より湧水を集め、中村堰の用水を流入し、岡之郷・新町地区へ農業用水を分水する。温井集落南から新町北部を北東に流下し、鳥川に合流する長さ約5.4kmの一級河川である。本遺跡は鳥川形成の、完新世末凝固堆積物（礫）による自然堤防堆積物上にある。

新町地区には古代の遺跡は発見されたことはなく、藤岡市の温井遺跡(6)・岡之台遺跡(7)・下川前遺跡(8)が近隣となる。温井遺跡は古墳時代後期から奈良時代・平安時代の集落跡。岡之台遺跡は古墳時代の集落跡。下川前遺跡は奈良時代・平安時代の集落跡。他には森遺跡(9)は古墳時代から平安時代までの集落跡。中I遺跡(10)は奈良時代・平安時代の集落跡。中II遺跡(11)は奈良時代・平安時代の溝・土壇が検出されている。鳥川左岸では高崎市八幡原遺跡(12)、八幡原若宮遺跡(13)、八幡原灰原遺跡(14)、玉村町下郷遺跡(15)がある。八幡原遺跡は古墳時代前期から平安時代の集落跡。八幡原若宮遺跡は古墳時代前期から平安時代の集落跡。八幡原灰原遺跡は古墳時代前期から平安時代の集落跡。玉村町下郷遺跡では4世紀末から5世紀初頭の方形周溝墓群と古墳が数基検出されている。

中世は、昭和15年に現自衛隊新町基地(5)内から4面の板碑が発見された。うち2面は無銘であるが、在銘2面は応永2(1395)年と8(1401)年の銘文があり、仏像のかわりにキリク(阿弥陀)、サク(観音)、サ(勢至)の種子で阿弥陀三尊を表現し、種子の下には三尊とも蓮華座を刻んでいる。ともに室町時代初期の作である。戦国時代には、天正10(1582)年6月16日に織田信長の配下である滝川一益と北条氏直が神流川で合戦に及んだ。その後、従来玉村経由であった馬次を天正13(1585)年に笛木に変更することにより笛木伝馬宿として成立していく。

近世は承応年間(1650)に玉村廻りの中山道が、新町宿設置により正式に移動した。新町宿は本庄宿と會賀野宿の距離が3里20町を隔て交通運輸上多大な不便であったことから、承応3(1654)年に笛木新宿と落合新宿を合併して新町宿が成立したと『上野國志』に記載されている。弘化3(1846)年に神流川の洪水により全村が大被害を被った武蔵国賀美郡忍保莊毘沙吐村が新町地内の下川原に移転を余儀なくされ、笛木村・落合村・毘沙吐村3村をもって編成された。

近代は、温井川の護岸工事に伴う新町戸崎遺跡（2）で大正13（1924）年に鐘淵紡績株式会社が施工したレンガ積護岸工事が検出されている。明治5（1872）年に我が国最初の官営器械製糸場として開設された富岡製糸場が、本遺跡の西21 kmにある。この富岡製糸場から出た屑糸を利用した新町屑糸紡績所が明治10（1877）年7月1日に開業した。同年10月20日の開業式は内務卿の大久保利通以下、大隈重信・松方正義・伊藤博文等政府高官を迎えて執行され、明治政府の期待を受けて開業した官営模範工場であった。翌11（1878）年9月3日に明治天皇が行幸し、作業を検分して所員達を激励した。

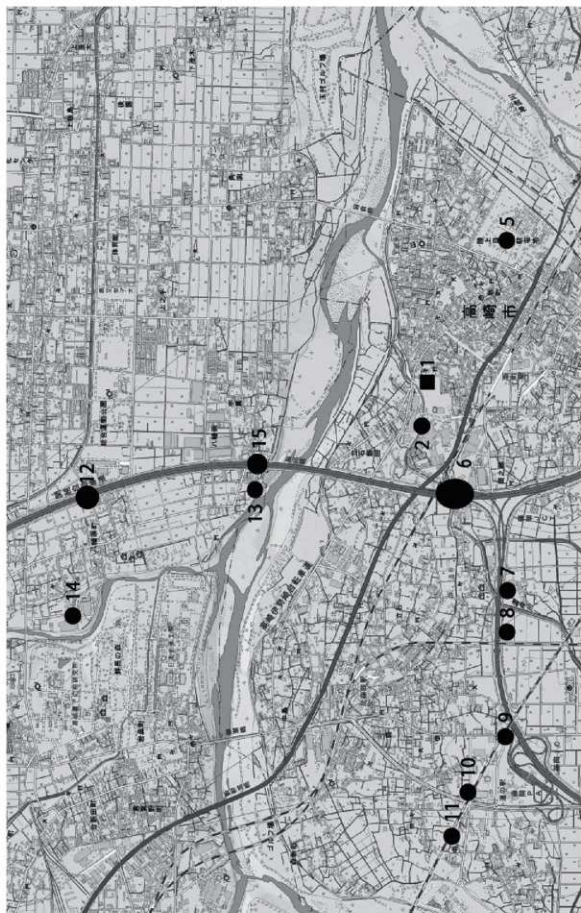
官営模範工場として建設された新町屑糸紡績所は、明治13（1880）年11月26日に内務省から富岡製糸場とともに民間への払い下げの広告が出された。このことにより、明治20（1887）年6月2日に三越呉服店に払い下げられ、新町三越紡績所と改称した。明治26（1893）年9月に三越呉服店が合名会社三井呉服店に改組したのに伴い、紡績所名も三井新町紡績所と改称した。明治32（1899）年以後の不景気により全国絹糸紡績連合会が明治35（1902）年3月15日に開かれ、三井新町紡績所・京都第一絹糸紡績会社（京都下京）・日本絹糸紡績会社（京都上京）・岡山共立絹糸紡績会社（岡山）・南海絹糸紡績会社（和歌山）・郡山絹糸紡績会社（郡山）が不況を乗り切るため合併することになり、同年5月に絹糸株式会社を経て絹糸紡績株式会社となった。同年8月17日に新会社名を絹糸紡績会社とし、同社の新町工場となった。明治44（1911）年3月1日に絹糸紡績会社は鐘淵紡績株式会社と合併し、新町工場は鐘淵紡績株式会社新町支店工場と改称した。平成19（2006）年にカネボウは営業権をクラシエに譲渡した。

本遺跡調査地点（1）は新町戸崎遺跡（2）から400m程東にあり、同様にレンガ積の遺構が検出されている。このレンガを供給した日本煉瓦製造上敷免工場（本遺跡の東19 km）は、洪沢栄一らによって埼玉県深谷市上敷免に明治20（1887）年10月に開設された我が国初の機械式レンガ工場で、ドイツ製のレンガ型抜き機械、コール式室内乾燥室、ホフマン式輪窯などが残り、その製品は東京駅等数多くのレンガ建物に用いられている。また同工場のレンガは当初利根川を利用した船運で運ばれたが、明治28（1895）年に深谷駅から同工場まで専用の鉄道線路が敷設された。

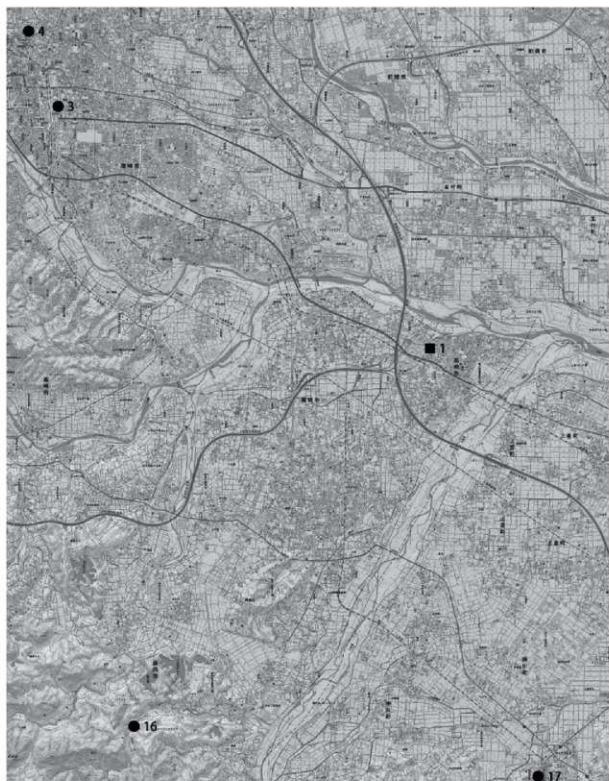
なお高崎駅北東の東町V遺跡（3）は大正5（1916）年に操業開始した龍栄社製糸工場跡で、同13（1924）年には岡谷の巨大資本小口組の高崎工場となり昭和6（1931）年頃まで生産を続けていた。また高崎旧市街地の北に接する飯塚西金井II遺跡（4）は、著名な製糸組合の確水社が同年から操業した高崎直営工場跡で昭和17（1942）年まで生糸生産を行っていた。共に発掘調査された製糸工場跡である。さらに富岡製糸場と共に世界遺産登録された高山社（16、藤岡市高山）は本遺跡の11.5 km南西、その関連施設の競進社模範居室（埼玉県本庄市児玉町）は10 km南南東に位置する。

## 参考文献

- 『新町戸崎遺跡』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 2013
- 『温井遺跡』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 1981
- 『八幡原遺跡』高崎市教育委員会 1974
- 『高崎市文化財調査報告書 132』高崎市教育委員会 1994
- 『東町V遺跡』高崎市教育委員会 1996
- 『飯塚西金井II』高崎市教育委員会 2007
- 『新町町誌』新町教育委員会 1988

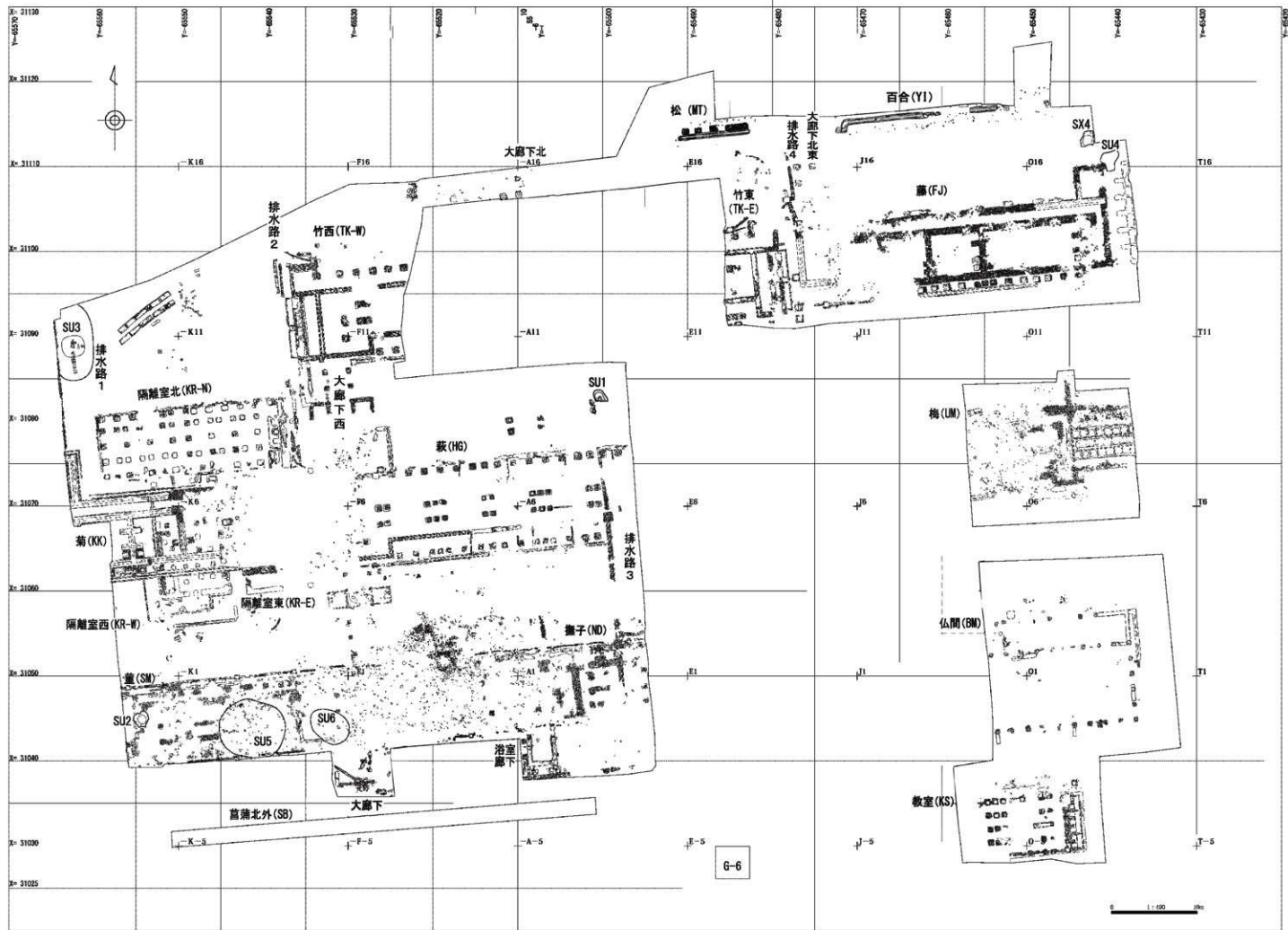


周辺の道路地図A(日本地図センターデジタル2.5万分1) 1新町戸崎 2新町戸崎 5新町自衛隊基地 6湯井 7雁之台 8下川筋 9森 10中I 11中II 12八幡原  
13八幡原若宮 14八幡原区原 15下郷



周辺の遺跡地図 B(日本地図センターデジタル 2.5 万分 1)

1 新町戸崎 2 3 東町 V 4 飯塚西金井 II 16 高山社 17 競進社模範寮室



## 第2章 調査の成果

### 第1節 概要と全体図 (p.13・14 折込)

今回の調査は旧鐘紡新町工場の女工寄宿舎群(総称「若草寮」)だった芝生広場での、新町防災アリーナ建設に伴うものである。しかし調査開始時に設計が完成していたのは建物本体だけで、その後駐車場建設での掘削に関係して要調査地が何回か増えた。そのため全体図に示したように、発掘調査地は事業対象地である芝生広場北半分(約130×100m)に点在する状態となった。

昭和31(1956)年時点での主要建物と調査の関係は、次のとおりである(北からの列)。

松寮・百合寮:共に南端部のみ

竹寮・藤寮:竹寮は西端と東端、藤寮は全城

菊寮・萩寮・梅寮:菊寮は西半分、萩寮は西半分、梅寮は東端のみ

菫寮・撫子寮・裁縫室(仏間):菫寮は西半分、撫子寮は東半分、裁縫室(仏間)は東半分

菖蒲寮・浴室・教室:菖蒲寮は北外側空地のみ、教室は東端のみ

若草ホール・桜寮・売店・社宅:非対象

また竹寮西端から若草ホール東端に達する南北の大廊下は、北半分が対象となった。

昭和50(1975)年の紡績業停止、平成7(1994)年の群馬県への売却そして平成31(2018)年の高崎市の購入と、この土地の所有が変わった。残されていた建物の解体と整地は、土地売却直前になされた可能性が高い。その後の果有地を利用した旧新町による芝生広場造成の詳細と時期は不明だが、建物部材を残さない状態で基盤の礫が表土近くまで上がっていた擾乱は決して狭い範囲ではなかった。重機による掘削で広場造成のローム客土(厚さ10cm)下の擾乱の間から、基盤礫層上に全面的になされた石炭ガラ等による極めて硬く締められた盛り土面が現れた。そこで残存遺構の確認とそれをあらかず発掘は、当初極めて困難な作業だった。

さらに部分的に検出したレンガやコンクリートの基礎が、どの建物なのかの同定も簡単ではなかった。しかしクラシエフーズに保管されていた各時代の建物配置図を検討する中で、最終的な認定が可能になった。ここでは各建物に関わる検出遺構と出土遺物を概ね調査順に報告するが、遺物は7箇所確認した廃棄場を除いて、個々の遺構周辺に存在していただけに過ぎない。なお建物名称の変更が頻繁になされたものもあり、記録とは異なる名称を物語る遺物出土もあった。

### 第2節 建物ごとの成果

#### A 菖蒲寮北外側(SB) (図 p.55・56、写真 p.106・115)

菖蒲寮北側の空地に相当する細長い部分では工事中立会いのG-6地点も含め遺構は全く見られないが、遺物は次のように検出した。

陶磁器は瀬戸美濃産の型紙刷が多く、山水詩歌文小皿(CR081)・財神依文皿(CR091)などがあり、また肥前の可能性ある紅葉文蓋物蓋(CR082)そして手描蓋芝文小皿(CR084)も見られた。銅版転写では肥前の可能性ある唐獅子牡丹文蓋物蓋(CR080)及び瀬戸美濃のバルメット菊文白磁緑彩茶碗(CR090)があり、美濃多治見産「鐘紡新町」銘色絵皿(CR087)も検出した。ガラス瓶では、「TANCHO VANISHING CREAM」小型卵型瓶(GL101)と「レートフード」偏平瓶(GL102)・「鵜田」超小型片口瓶(GL103)があった。

## B 萩寮 (HG)

位置：調査範囲中央より撫子寮の北 12m、西側で大廊下を隔てて隔離室・菊寮に接する。

変遷：大正 14 年頃建設（平面 7 室）。当初中央北側に長方形突出部があるものの、昭和 10 年代以降不明。

### 検出遺構と重複遺構（図 p.20、写真 p.127-129）

東西に長い建物（南北 9.5m、東西 31m 以上）を検出した。東側で排水路 3（SD37）と無軸土管（SD06-07）を壊す。西端は大廊下に接するが、特に北西部分は大きな攪乱があったため不明瞭だった。

**柱基礎：**北辺に正方形大型レンガ基礎列（5 段、下面レンガ 12.5 個一辺 0.6m、SB45-298 全 17 基、間隔 1.8m、ただし SB50 のみ小型）、3.8m 南側に小型基礎列（4 段、下面レンガ 8 個一辺 0.5m、SB34-300 全 12 基、間隔 0.9m・4.8m・0.9m・0.9m）、さらに 1.8m 南側にほぼ同様の小型基礎列（SB24-302 全 12 基）、そして 3.8m 離れた南辺に大型基礎列（SB10-311 全 16 基、間隔 1.9m・0.9m・1.9m・1.4m を 2 回ずつ繰り返す）が東西方向に並ぶ。

小型基礎列は桁方向の構造基礎柱だろう。そこには 4 本の南北通し梁ライン（SB49・36・26・12、SB50・38・28・14、SB56・41・31・20、SB57・43・33・22）と 2 本の北側桁までの南から 5.6m ライン（SB37・27・13、SB42・32・21）が認められ、南北通し梁ラインを軸に桁だけが一對の柱で区切られる同じ広さの空間を最低 4 箇所確認できる。

また北辺中央から 2.5m 北側に離れた位置で 4 個のコンクリート柱基礎（SB288-291、間隔南北 1.8m 東西 3.6m）を検出した。

これらの柱基礎はグリ石を敷いた上に粗い礫を多く含んだコンクリートを厚く貼り、その上にレンガを数段正方形に積んだものである。ただしコンクリートとレンガの中心位置の揃わない例が、少なからなかった。

**壁基礎：**レンガを 4 段以上積んで、南辺柱基礎列に平行に走る SB08 である。南辺柱基礎西端の SB10 から西に 0.9m 離れた地点より北に 1.8m 向かい、さらに東方向に 15.7m 以上直線で延びている。一方、同地点から西方向には 3m 残っていた。この L 字形構造（幅 0.4m）最下段のレンガは場所によって積み方が側面積みを取っており、上面の高さを揃えるための地業的役割を果たしたと思われる。最上面には、根太材を敷いたようなモルタルが一部見られた。同様の長い東西走向の壁基礎は北辺にも存在していた可能性があり、土管列 SD14 の南端に東西走向の痕跡が少し残っていた。

**排水溝など：**両側にレンガを積み内側にモルタルを塗った雨落ち水の排水溝が、南面（SD02）と北面（SD05・13）に見られた。それぞれ集水マスが 1 箇所ずつ残り、また南北辺の同じ位置に鉄軸土管列（SD11・SB11 南側の未命名土管、SD12・10、SD14・09、SD15・08、SB298 西側の未命名土管）が合流していた。SD10 は上記壁基礎 SB08 の最下段部分を抜けており、それぞれ内部から両辺排水溝への通水システムと考えられる。

また北側排水溝 SD13 の北東外側 1m 弱には、スレート製埋甕 SJ1 があった。

**全体構造：**全体に極めて規則的に柱基礎が並んでおり、また壁基礎 SB08 の屈曲してからの東側位置は南側小型柱基礎列と南辺大型柱基礎列の中間にあたる。上記のように北辺大型柱基礎列と北側小型柱基礎列部分の間に同時に建設された竹寮と同様の壁基礎があった可能性があり、調査時には確認できなかったものの痕跡が写真には写っていた（p.127 下写真）。そのため小型柱基礎と壁基礎で形成される空間はほぼ正方形の同じ広さ（主空間 5.6 × 4.7m、2 副空間 1.8/0.9 × 5.6m）が横に連なった状態になる。壁基礎 SB08 が西端で L 字形になる理由は、階段構造があったためかもしれない。

### 出土遺物（図 p.52・66・68・69・72・73、写真 p.104・112・113・120・122・123・125・126）

まとまった面積が調査できたことにより、比較的多くの遺物を検出した。まず銅版転写の食堂食器としては、鐘紡マークの美濃窯業製小皿（CR012）と飯碗（CR018）、さらに大量に搬入された雪の下文飯碗（CR019）がある。また手描で大きく「越」字が描かれた茶碗（CR013）は、三越時代かもしれない。「帝國生命保険岩鼻代理店」と書かれた銅版転写色絵茶碗（CR016）と手描松葉文染付方形皿（CR010）は、建物南西外側で検出した。

南東端柱基礎 SB310 近くから「二ノ宮キヨ」（HT04）と「ナミセ」（HT05）線刻のセルロイド・櫛 5 点の骨製歯ブラシ（WT01、04、05 と非報告 2 点）とセルロイド製髻（HT45）、またその北側の柱基礎 SB299 周辺から「三番 小川みつ」線刻の

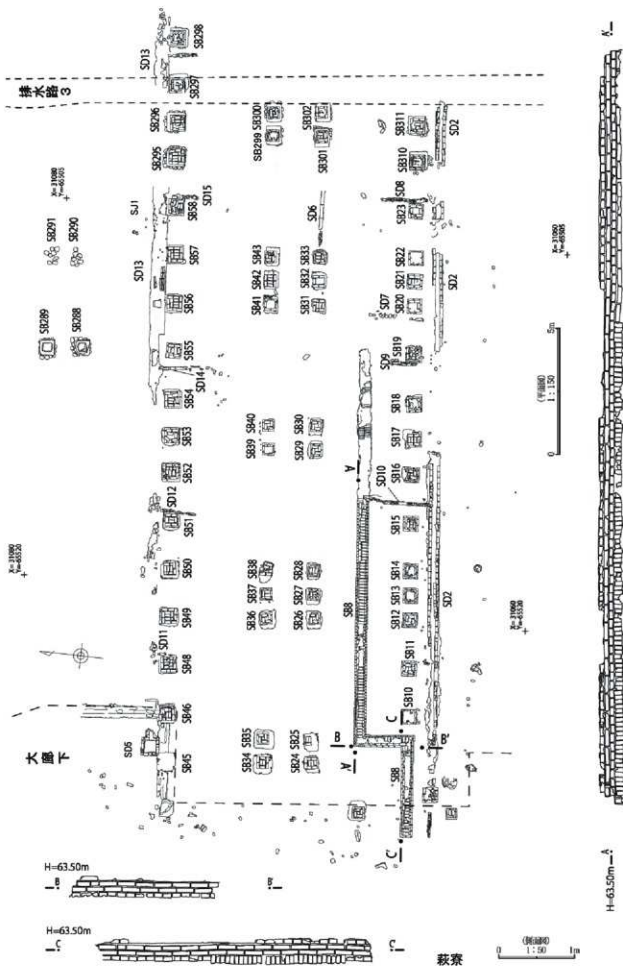
セルロイド櫛 (HT03) とセルロイド製ピン (HT44) が出土した。南辺柱基礎の SB19 からは一円硬貨 (非報告) を検出し、そこから西の SB12 周辺では白磁集結器 (FL01) を確認した。南東部分では、踏み石と思われる加工石片 (ST1) を発見した。また本建物より古い土管列 SD06 は、無軸硬質 (CR015) である。

ガラス瓶の出土も多く、化粧品関係では「月美人」小型扁平四角形瓶 (GL007)・「美顔水」小型円筒形瓶 (GL009)・「148」小型四角形瓶 (GL017)・「HIRAO LAIT」扁平四角形瓶 (GL020)・「KIN TSURU OSG」超小型四角形瓶 (GL024) がある。薬品関係では、「改」円筒形短頸瓶 (GL010)・「神薬資生堂製 TOKYOSHISEIDO DISPENSARY」小型八角形瓶 (GL014) が出ている。他に「TARADE MARK METORO」小型円筒形瓶 (GL013)、「明治 200」紙栓撫で肩広口瓶 (GL022)、金平糖容器小型小銃型瓶 (GL012) も検出した。

さらに南辺中央の排水溝 SD02 の外側近くでコバルト色大型円筒形短頸瓶 (GL008) が出土し (p.129 最下段右写真)、ガラス栓が装着された状態で内部に液体が残っていた。同種のガラス瓶は遺物廃棄場 SU5 で大量に発見されたため、この液体についての成分化学分析を行った (p.97)。

ここでは計 235 点の「上敷免製」刻印レンガを発見したが、そこには左行刻印 (RB044)・狭い刻印 (RB186)・長い刻印 (RB134・189)・長方形刻印 (RB167・196) が含まれていた。左行刻印は 403 点の刻印例の中で、他には教室発見の RB267 しかない。柱基礎には刻印レンガがかなり多く、総数 52 個程度の大型柱基礎に 10 個の刻印レンガがあった SB18 のような例も珍しくなかった。また残存個数が多くない南北排水溝でも、刻印レンガは少なくなかった。





## C 隔離室 (KR)・遺物廃棄場 SU3・排水路 1(HS-1)

位置：調査範囲北西側で、東側で大廊下と竹寮・萩寮西端に接し、西側で菊寮と重複する。

変遷：大正9年建設（3棟）、昭和12・13年頃に壊されて菊寮が建設される。

### 検出遺構と重複遺構（図 p.24・25、写真 p.130-135）

東西方向建物（北棟、南北6.8m、東西21.6m）・南北方向建物（西棟、南北約12m、東西7.5m）そして東西方向建物（東棟、南北3m以上、東西約7m）の3棟を検出した。北棟は東端が排水路2で一部壊された以外はほぼ全容を確認した建物だが、北外側と東棟の大部分は広く攪乱されていた。

### 東棟 KR-E

**柱基礎**：グリ石を敷いて粗製コンクリートを貼った SB81 のみを検出した。これは壁基礎 SB80 の東延長方向で約 3m 離れた位置になる。

**壁基礎**：東西方向に延びる深い基礎（SB03、幅 0.8m・残存長 4.0m・レンガ積み高 0.6m）とそれに L 字形で接続する浅い基礎（SB80、幅 0.6m・長 4.3m）を確認した。ともにグリ石を敷いた上に縦を多く含むコンクリート地業を貼り、上にレンガを積んでいる。前者は確認面まで 8 段が残り、西端で終わっていた。また他に大きくグリ石を緻密に入れている。後者はコンクリート地業が確認面のため全くレンガ自体は残っていなかったものの、検出東端が末端である。

**その他**：SB80 の 3m ほど南に、緩く弧状を描く性格不明のレンガ列 SW1 がある。

**全体構造**：北と東側が大きく攪乱され、形状は全く不明である。ただ上部の重量を意識した深い壁基礎が本体部分で、浅い壁基礎と柱基礎の間はそれに接する入り口の部分と推定できる。

### 出土遺物（図 p.54、写真 p.105）

二つの基礎の間から相馬駒焼茶碗（CR044）が出土した。SB03 のレンガには、右行「上敷免製」刻印レンガが 3 個含まれていた。

### 西棟 KR-W

**柱基礎**：菊寮建設と攪乱でかなり破壊されていたが、グリ石を敷いた上に粗製コンクリートを貼り、その上の最下段にレンガ 8 個を並べた正方形基礎（約 0.5m 四方）を 15 箇所確認した。他に西側中央の小型柱基礎 SB90 は、レンガ 6 個を並べている。

**壁基礎**：グリ石を敷いた上に粗製コンクリートを貼り、上にレンガを積んだ壁基礎を 5 箇所確認した。西辺を走り南西隅から南辺中央近くまで延びる SB02 には 3 段のレンガが残り、中央に正方形小区画（一辺約 0.9m）と南西隅に長方形区画（1.4 × 5.4m 以上）を設けている。南東隅にも同様のコンクリート基礎 SB91 があつた。それぞれの南辺から 1.8m 離れて二つの壁基礎礎（SB75・76）があり、長方形空間（3.0 × 1.8m）を南側へ突出させている。また最南部の SB01 は薄いコンクリート基礎の上にレンガ 1 枚を直交して 2 段積んだもので、南東隅から西へ 7.4m、北へ 1.6m 残っていた。

**排水溝など**：グリ石上にモルタルを貼り両側にレンガ横積みした SD16 は SB02 外側に沿い SB90 西側で土管に変わった後、上記構造に戻り南辺でまた南に曲がる。東側の対称的位置の SD17 も同様で、両者は突出部の両側に沿っている。またすぐ南には人頭大の自然石による石列 SS1 が、SB01 と重複するように見られた。

**全体構造**：南北方向に長い長方形平面で、東半分には直接外に接する部屋（2.7 × 3.2m）が南北に並んでいる。南側突出部は入り口で、SB02 と 91 の間 1.4m の中央位置 SB72 は扉の基礎だろう。西辺は幅狭い細長い空間で、排水溝が土管に変わった部分に何らかの出入口があつた可能性がある。

### 出土遺物（図 p.54・67・69・70・71 写真 p.105・114・121・122・125）

SS1 で、「高山ヨコヤマキワコ」線刻のセルロイド製櫛（HT15）とビニール製？装飾紐（HT63）が出土した。SB02

南辺近くに明治 15 年製の二銭銅貨 (CN04) と三彩陶器小鉢 (CR054) があつた。SD16 からは「ピヤン」小型広口瓶? (GL069) が出土した。また切り状文様の合子蓋 (GL062A) を検出したが、同身 (GL062B) は北棟の SB226 北便槽にあつた。SD17 のレンガには、右行「上敷免製」刻印レンガが 3 個含まれていた。南東外側で「ペブシローラ」撫で肩瓶 (GL071) が出たが、寛永時代のものである。

## 北棟 KR-N

**柱基礎:** グリ石を敷き粗製コンクリートを貼った正方形 (一辺約 0.8m) 地業の上にレンガ 8 個を積んだ基礎を、規則的に 61 基検出した。レンガが残っていたのは北西側だけで、また北辺中央の SB246・250 は、4.5 個を積んだ小型である。すでに完全に壊されていた 4 箇所を加えると、これらは西棟入り口の SB72 から北へ延びる直線を軸として左右対称に並んでいる。なお南西側排水溝 SD35 の外側に、同様の基礎 SB71B が単独で残っていた。

**壁基礎:** 建物東端に東側が開いた状態で 4 区画に仕切られた南北に長い壁基礎 (3.7 以上×1.4m) SB226 があり、中央 2 区画の東側は東側に突出してモルタルが貼られ土製大甕 (CR047) が残っていた。埋葬による便所と考えられる。この SB226 北端と建物北東隅に残る壁基礎 SB259 (約 0.9×0.5m) は、繋がっていた可能性がある。SB226 の南側にはし字形の細い SB277 が、次項の東端排水溝 SD33 に壊された形で残る。SD33 から 0.9m 東には、グリ石の上に粗製コンクリートを貼った細長い基礎 SB278 (0.4×8m 以上) が南北に走っていた。

**排水溝など:** 建物各辺外側にはグリ石基礎上の両側にレンガを横積みし内側にモルタルを塗った排水溝が見られる。北辺の SD32 は SB246 と 250 の間の中央部分が土管になっており、また外側レンガにほぼ接して半裁レンガを 2 段積んだ部分が 5 箇所残っていた。一方西辺の SD31 は、北東隅部分のみが土管で、半裁レンガの残存は 2 箇所だった。残りが良くない南辺の SD35 と SD34 は中央部分で南に直角に曲がって 1m ほど伸び、中央が南に向かう空間 (幅約 1.8m) を示した。東辺の SD33 も SB226 中央の突出部に沿って中央部分が 0.6m ほど東へ張り出し、さらに南側は SB226 に沿ってさらさらにもう一度南へ曲がって 1.8m ほど延びる。

**全体構造:** 中央に南北通路 (幅 1.8m) が走り、両側に南北にやや長い部屋 (2.6×3.8m) が 3 室ずつ並ぶ構造が明瞭である。これら部屋全体の南側 (幅 1.8m) と北側 (幅 1.2m) には廊下状空間が延びる。また東端は 1.2m 挟んで便所になっている。便所南側の南東隅は壊れた状態だが、北側の北東隅はそれがなく洗面所空間が想定できる。

## 出土遺物 (図 p.54・66・68・70・71 写真 p.105・112・114・122・125)

SB226 と SD32 からセルロイド製髪留め (HT39・40) が出土した。SB226 の北便槽ではガラス瓶の出土も多く、「ヘチマコロン」扁平四角形瓶 (GL047・048)・「日本麥酒醸造株式会社」撫で肩長頸瓶 (GL049) などが含まれていた。上記のように切り状合子身 (GL062B) も出土した。また「會 天榮同業組合」銘瀬戸美濃産透明釉卍 (CR045)・瀬戸美濃産ゴム印成型形色絵鉢 (CR046)・リング文プリント色絵軟質陶器湯呑 (CR049) もあつた。SD32 では数カ所、軟質無軸土管 (CR048) が見られた。

## 北外側 KR-NN・遺物廃棄場 SU3・排水路 1(HS-1)

**重複遺構:** 調査範囲北西隅には遺物廃棄場 SU3 があり、その中に排水路 1 の SD51 が南北に走る。いずれも隔離室建物より後出と考えられる。調査範囲北外側は、すぐ温井川護岸になる。

**壁基礎など:** 調査範囲西端で南北に延びるレンガ積壁基礎 SB283 を 23m 確認した。境界にあたるため十分には確認できなかったが、6 段以上のレンガ積で形成されている。ただし下位 3 段相当は南側が側面積みで統一されているのに対し、北側は場所によって積み方が異なっていた。

そこから東に 7m 離れた場所に北東方向に 2 列で緩く弧状に延びる不明遺構 SX1・2 がある。これは長軸方向に幅約 0.5m でレンガを敷き並べて、モルタルを塗って上面を平滑にした構造である。両者の間には 0.6m ほどの空間があく。モルタル上には何の痕跡も残らずレンガの下にはグリ石などは見られないため、重い構造物の基礎とは考えにくい。南側の SX1 から 3.5m 南東に、頂部に方形孔 (一辺約 0.15m、深 0.55m) が空き下位はレンガで築かれたコンクリート直方体 SX3 (0.4×0.4×0.63m) があつた。

**全体構造**：SB283 は明らかに境界線の基礎である。しかし SX1・2 については、レンガ使用方法が北棟などと共通するが走向は全く異なりむしろ温井川に沿うようなため、性格は不明である。SU3 の遺物廃棄は境界である SB283 の上からも見られた。

**出土遺物** (図 p.54・66-71 写真 p.105・112・121-124・126)

SX1・2 の際で「佐藤」(HT12)・「梅田ツヤ」(HT13)・「熊谷スラ」(HT14) 等セルロイド製桶 4 点とビン (HT48・HT49)、骨製歯ブラシ 2 本 (WT11・12) と編み棒 (OT02) があつた。東側で繰糸鍋目皿 (FL10)、「SHINAGAWA」銘耐火レンガ (WB07) を検出した。SX3 傍で、信楽産煮鍋鍋 (FL14) を確認した。

**遺物廃棄場・排水路 1** (写真 p.159・160)

**検出状況** SU3 は広い範囲で (約南北 8m 東西 4m) 遺物が分布していた。最終的に南西側に不定形の浅い土坑 (深さ約 0.3m) を確認したが、そこに入れたのではなく敷地隅に広く捨てた状態である。遺物下で南北走向の排水用無釉土管列 SD51 (土管長 0.61m、径 0.34m) を検出した。

**重複**：上記のように遺物廃棄は境界である SB283 の上からも見られたため、隔離室廃絶後になされている。排水路設置時期は遺物廃棄以前である。

**出土遺物** (図 p.60・61・66-72 写真 p.109・112・117・121-125)

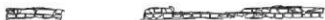
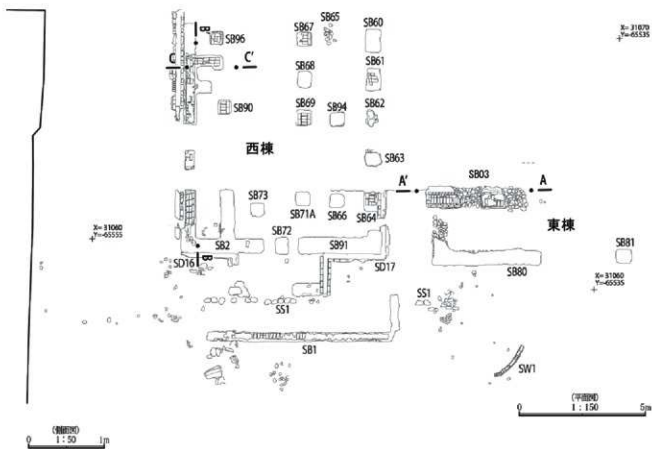
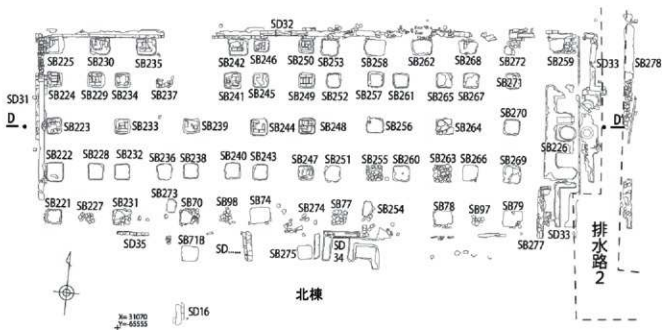
SU3 では確認面で、大量の遺物が足の踏み場がないほど散乱していた。

陶磁器類は、瀬戸美濃銅版染付菖蒲文皿 (CR162・163) 94 点、同色絵雪の下文飯碗 (CR177) 63 点、それらの破片の飯碗 (CR184) 45 点、同国民食器飯碗 (CR189) 40 点の数量が多かった。他に瀬戸美濃吹絵飯碗 (CR179・180) とゴム印の色絵湯呑 (CR174)・桜文染付飯碗 (CR176) や軟質陶器蓋付平碗 (CR182)・同湯呑 (CR183)・同平碗蓋 (CR170・171)・同「木庄？」上絵湯呑 (CR191) があつた。

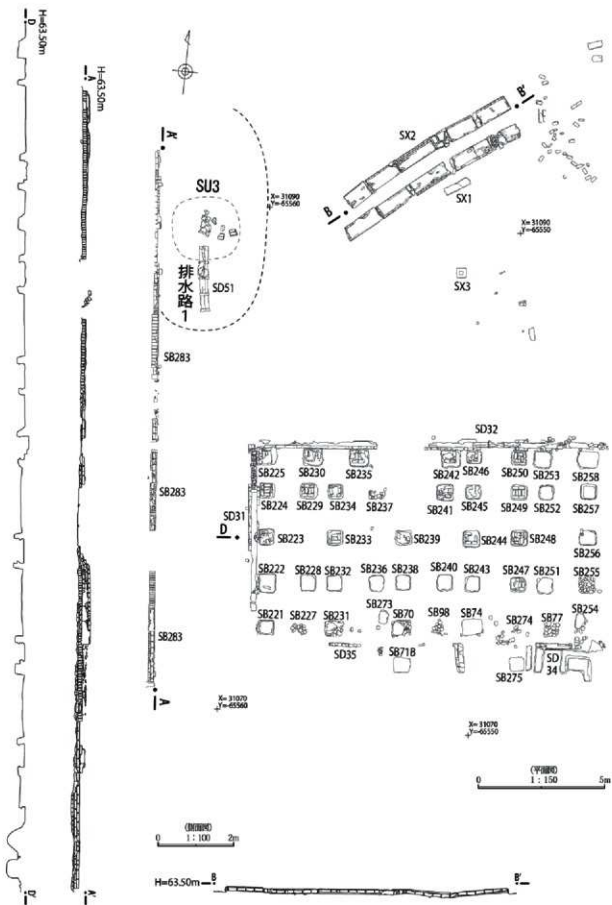
ガラス瓶も多く、化粧品瓶は「TM ヘチマコロン」扁平四角形瓶 (GL172)・「東京安藤井筒堂 PEACHFLOWER もどの花」蓋付短広口瓶 (GL180)・「トクヨ」小型広口瓶 (GL178)・ウテナロゴ小型卵形瓶 (GL183)、薬瓶は「神樂養生堂製 TOKYOSHISEIDO DISPENSARY」小型八角形瓶 (GL171)、飲料では「日本麥酒醸造株式会社」撫で肩長頸瓶 (GL175A)・「大日本麥酒株式会社製造」大型撫で肩長頸瓶 (GL173)・ネジ栓の大型撫で肩瓶 (GL174A)・「部葉井牛乳」瓶機械栓 (GL174B) などを確認した。

また下層を中心に、セルロイド製桶 (HT31・32)・同ビン (HT54-57)・大量の骨製歯ブラシ (WT21-25・27-31・37・39-41・45・49・52-56、柄部 16 点) が含まれていた。下層では製糸器具も信楽繰糸鍋目皿 (FL11AB)・同煮鍋鍋 (FL13AB)・瀬戸美濃白磁集結器 (FL08) 9 点・同染付切断計数器 (FL09)・ガラス製フリカギ (FL17-20) を確認した。何らかの機械部品である鉄製品 (MT32・33)・銅線鉛部品接合品 (MT34) や青銅小型製品 (MT12-14) もあつた。

廃棄元は昭和 12・13 年頃の寄宿舎内食堂からが中心で、隣接の製糸部工場も加わったと考えられる。なお昭和初年頃にセルロイド製に変わる骨製歯ブラシが、ここに集中した理由は分からない。



隔離室東・西・北棟



兩離室北外側・遺物廃棄場SU3

## D 菊寮 (KK)

**位置：**調査範囲西端で、隔離室西棟・東棟と重複。東端は大きく掘乱される。

**変遷：**昭和12・13年頃に隔離室を壊して建設される(5室平面)。

### 検出遺構と重複遺構 (図 p.27, 写真 p.136-137)

東西方向建物(南北8.5m,東西19.5m以上)を検出した。北西隅に張り出し部(南北5.5m)を持つ。この建物は西端で、隔離室用地西側境界壁基礎 SB283 を壊す。

**柱基礎：**グリ石上に築かれたコンクリート製で、下部(厚さ0.2m)の上に上部(約0.3×0.3×0.4m)を接合している。南西側の長方形基礎2基(0.7×0.5m) SB304・305と南辺に並ぶ正方形基礎9基(0.4×0.4m) SB85・88・95・306-309がある。

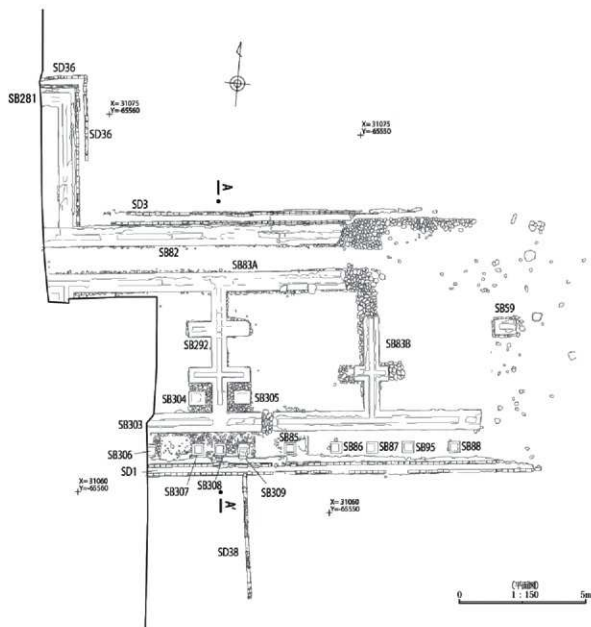
**壁基礎：**グリ石上に断面台形のコンクリート構造(幅0.7m,高0.3m以上)を築き、頂部に根木材受け部(幅0.2m)が突出している。東西に延びる幅広基礎を3列(SB82・83A・303,幅0.7m強)と南北走向基本のやや狭い4列(幅0.6m強,SB59・83B・292,長5.7m,SB281長5.4m)がある。西側のSB292は南北2箇所(東西に各0.9m)延びる張り出しを持ち、東側のSB59は同様の張り出し部分のみが残ったものである。中央のSB83Bは南1箇所(0.45m)の張り出しがある。同様の南北走向基礎はSB83Aの西端にも一部確認でき、北西隅のSB281は北に伸びてから西に向かっている。

**排水溝：**SB82の北側に沿ってSD03が東西に走り、SB281の外側のSD36に繋がる。また南辺に沿ってSD01が東西に延びる。これらはグリ石の上にモルタルを貼り、両側にレンガを積んだ構造(内幅約0.2m強)である。またSD01には直交方向に無軸土管列SD38が5m南に伸びている。

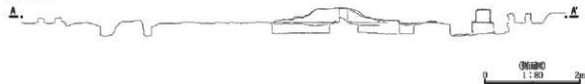
**全体構造：**南北走向壁基礎の張り出し部分間は、ほぼ同じ広さの縦長長方形(5.6×4.4m)で、張り出しにより東西に奥行き0.9mと0.45mの長方形が接続している。広い部分が居室で、両側に奥行き異なる押し入れが付くと考えられる。北側には幅広い(1.8m)廊下が続き、居室南側1.0mの位置に並ぶ柱は各部屋のテラス状部分だろう。北西隅の張り出しSB281は便所・洗面所の一部と考えられる。

### 出土遺物 (図 p.53・67・73 写真 p.105・114・120・126)

調査面積が狭いため、あまり多くはない。食器では、美濃窯業製鐘紡マーク銅版転写飯碗(CR035)と鐘紡マーク及び「万年」陽刻ベークライト製飯碗(CR042)があった。SB281からは、「みや古染」ガラス小型円筒形短頸瓶(GL045)・「一沢キヨ子」(HT09)「美原村金沢サト用」(HT10)線刻セルロイド櫛が出土した。またSD03内の遺物には、「SHINAGAWA」陽刻の耐火レンガ(WB005)が3個含まれていた。SD01のレンガには、6点の右行「上敷免製」刻印レンガが混っていた。



H=63.50m



菊寮



## E 葦寮 (SM)・撫子寮 (ND)・遺物廃棄場 SU2, 5, 6

位置：調査範囲南西隅に位置し、中央で大廊下、東端で排水路3と重なる。

葦寮：撫子寮（9室平面）は大正2年以前に建設され、葦寮は大正8年にそこから同列で大廊下西側に増設（5室平面、大正11年380坪本造瓦葺2階建）。葦寮階下は昭和27年まで女工の演芸空間「若草クラブ」として使用。二寮共に昭和40年に撤去後、全面改築（15畳×10室平面411坪）された。

### 葦寮

#### 検出遺構と重複遺構（図 p.31 写真 p.138・139）

隔離室西棟から6.2mあるいは藪寮から14m南に位置する東西走向建物（南北約8.0m、東西25m以上）で、東側の撫子寮とは同列になる。二つの寮の間に大廊下があったはずだが、遺構的には攪乱が多いため不明瞭。基礎のグリ石群にレンガ片が混じるものが見られ、改築以前の部材片が混入したことになる。また内部の3遺物廃棄場の設置は大正8年以前だが、改築時に大きく攪乱された。

グリ石基礎：グリ石を敷き詰めた基礎最下層を多く検出した。北辺土管列SD18から約1.3mの位置で正方形に近い状態で並ぶSB312・99-101・110-112AB、そして似た形状の西側内部のSB105-107・114・314・315・317と東側内側のSB119-121は柱基礎の可能性が高い。

壁基礎：北辺土管に沿って撫子寮までグリ石上コンクリート基礎SB109（平面断面、幅約1m）が続く。中央に凸状の根太材部分（幅約0.1m、高0.4m以上）が一部残る。南側では細長い基礎SB103と108・314、104と315・105（約各長2.0m幅0.6m）が対状態で東西方向の同じ位置にある。東側のL字形にグリ石上へモルタルを貼った遺構SB116（各長3m以上、幅約20cm）は、柱基礎SB121を壊す。

排水溝：北辺と南辺で、それぞれ軸土管列SD18（長0.68m径0.19m）とSD20を、撫子寮まで連続して検出した。共にほぼ同じ位置に、集水マスをつけていた（間隔約6.8m）。

全体構造：南辺の外側と内側の壁基礎の間（SB114-104幅約1.8m）は廊下空間の可能性もある。また北辺の柱基礎群と壁基礎SB109の間狭い空間（0.7m）は、テラスだろうか。やや細長いSB102-313が壁基礎なら、北辺までは1.8mとなる。南側に廊下で設置されていた改築以前と、北側に移った改築後の遺構が混在している可能性がある。

#### 出土遺物（図 p.56・66-69・71-73 写真 p.106・112・115・121-123・125・126）

陶磁器では北西隅で、瀬戸美濃産白磁梅皿（CR095）・同銅版転写縮紡マーク染付飯碗（CR096）・同桔梗文染付飯碗（CR098）・同プリント牡丹文染付飯碗（CR099）を検出した。また西側のSB103周辺で「小菅」墨書の二彩陶器甕（CR097）が出ている。南西隅のSB318周辺で、「ホーカ液燻越」小型四角形瓶（GL107）・「ビノール香油」小型卵型瓶（GL108）のガラス瓶があった。中央の遺物廃棄場SU5近くでセルロイド櫛片の「中井・セレ」線刻（HT25）・「山？ハイノミヤイメ？」線刻（HT26）・同葉文毛彫（HT24）が見られた。SB103と104の間で、骨製歯ブラシ（WT18-19）を確認した。後者からは、右行「上敷免製」細字刻印レンガ（非報告）を検出した。

### 撫子寮（含む浴室廊下 YR）

#### 検出遺構と重複遺構（図 p.32 写真 p.138・140）

西側葦寮から続く東西方向建物だが、東端で排水路3を壊している。

柱基礎：正方形に敷いたグリ石を東側で検出したが、南北方向に並ぶSB326-328とSB332・330・333を除き規則的な配列は確認できない。ただSB129・128・333・335・328は同一線上の位置にある。

壁基礎：葦寮からの北辺基礎SB109が続くが、北東では1.4m離れて同様の上面にモルタルを貼ったグリ石の東西走向壁基礎SB117・325（幅約1m）が一部残っていた。それに接続して南北走向のSB127（長約5.4m）があり、南側で東西走向のSB132Bと接していた。北側に4mほど張り出す形での基礎SB125を検出し、その西1.5mにはセメントの上に組まれた単一レンガ基礎SB123があった。

一方そのほとんど反対の南外側で、断面台形コンクリート製 U 字形基礎 SB118（東西 3.3m 南北 4.3m）を土管列 SD20 に壊された状態で確認した。その西辺外側と南辺外側には正方形の柱基礎 SB320-323 が 2 箇所ずつ接している。また南辺の両端には集水マスから延びる施軸土管列 SD40・41（内径約 0.1m）が接していた。

**排水溝：**西側葦寮から土管列が北辺 SD18 と南辺 SD20 に続くが、特に南辺の集水マスはレンガにモルタルを塗ったものだった。改築前のマスをそのまま使っていた可能性がある。東端で SD18 は北側に約 1m 曲がり集水マスを通じて同様の土管列 SD45 として東へ向かっている。

**全体構造：**攪乱が多く、基礎の上部構造は残らないため不明瞭だが、南側にテラス状部分（幅 0.9m）、また北側に廊下状空間（幅 1.8m 強）があった可能性は高い。そのため 1 部屋の実行きは約 5.8m になる。北側張り出し部は遺物の出土状況から洗面所と思われる。東端での幅拡張は階段構造のためか。検出したのは、基本的に全面改築後の遺構と考えられる。なお『90 年史』掲載写真（p.96）には、両辺排水溝の集水マスに繋がる樋間（6.4-6.8m）に 2 居室の意が写っている。

また本体の基礎列とは僅かに軸が異なる南側張り出し部（浴室廊下 YR）は、基礎の状態から菊寮と近い頃に建てられた単独部分で、後にさらに南側に拡張されたことが土管列より分かる。大正 2 年図以降、浴室へ向かう廊下があった位置で、それが部分的に改築された状態と推定される。

## 出土遺物（図 p.55・57・67-71・73 写真 p.105・107・114・115・121-124・126）

陶磁器では、SB124 周辺から「志田山友製」肥前型紙刷染付小型湯呑（CR068）と型紙刷染付飯碗（CR070）が出土した。北側張り出し部周辺では、統制番号入り美濃プリント色絵湯呑（CR066）とロバ車図プリント瀬戸美濃色絵掛け花瓶（CR067）が見られた。南側張り出し（YR）の SB322 周辺から、肥前青磁染付段重（CR117）が出ている。

またガラス瓶の出土は比較的多く、北側張り出し部周辺から「鐘紡新町工場醫局」扁平瓶（GL089）・「純植物性ボマー」短広口瓶（GL086）・「皮膚メンソー保健康」超小型円筒形瓶（GL083）、SB125 から「神薬 保壽堂製」小型扁平瓶（GL078）、そして線刻セルロイド櫛も「□ヤメ」（HT19）・「ヨイ」（HT20）・「ナデシコ七」（HT21、SB125 の東約 5m 地点）・「ヤザワヤス」（HT22）などとピン（HT50）があり、骨製歯ブラシ（WT14・15）も出土した。また南側張り出し部（YR）SD40 集水マスでは「みや古染」小型円筒形瓶（GL118）と骨製歯ブラシ柄部を確認した。北西側から大型耐火レンガ（WB08）が出ている。

## 遺物廃棄場 SU2

### 検出状況と重複遺構（図 p.31 写真 p.159）

葦寮西端の基礎 SB313・316 の間で検出した略楕円形土坑（1.8×1.8×0.4m）である。

### 出土遺物（図 p.59・60・66・68・69・71 写真 p.108・109・112・116・117・121-125）

陶磁器は瀬戸美濃産の手描・型紙刷・銅板転写の各染付があるが、鐘紡マークの銅板転写染付茶碗（CR153）も含め型成形品はない。一方紅彩染付合子蓋（CR152）が含まれていた。ガラス瓶は、化粧品関係で「平尾分店」小型広口三角形瓶（GL148）・「櫻香本舗守田謹製」扁平瓶（GL161）・香水瓶の可能性ある小型脚付瓶（GL163）、飲料で「特別上等 全乳 搾取所愛光舎 販賣所門奈」本紙栓の大型無て肩長頸瓶（GL162）等があった。

他に製糸器具の白磁集緒器（FL16）、装身具でセルロイド櫛「十一パン中村ミツコ」線刻（HT27）・「○○スラ」線刻（HT28）・「ト子」線刻（HT30A）等 5 点、毛彫り髪留め（HT41・42）、金属製ヘアピン 2 点（非報告）、短い骨製歯ブラシ（WT20）があった。銅製指輪（MT07）と土坑底を中心に 10 点近い鉄製ロストル？（MT31）の敷かれた状態が目される。

以上により土坑への廃棄は大正 8 年の葦寮建設直前頃と考えられるもの、集緒器のように製糸工場操業（大正 10 年）以降のものも混じっている。そのため昭和 40 年改築時に攪乱された遺物も含むことになる。出所は、寄宿舍内そして寮建設以前にあった社宅等の施設からのものが混在している。

## 遺物廃棄場 SU5

### 検出状況と重複構造 (図 p.31 写真 p.160)

葦寮の中央部の楕円形状(約東西8m南北4m)に遺物散布域が広がるが、大規模攪乱と重なり特定の掘り込みは確認していない。大量に遺物を含む攪乱とも考えられる。

### 出土遺物 (図 p.62・63・66・70・73 写真 p.110-112・118・123・126)

染付磁器は肥前意絵蛇の目軸刺ぎ飯碗 (CR212) を含む型紙刷の絶対量が多いが、手描・銅版転写・プリントも含まれる。他に、万古鶴文色絵急須 (CR220) や「□□名産□□会社□□之章」押印箱型土製品 (CR229) があつた。

最も特徴あるのはガラス瓶で、48点確認した同型コバルト色大型円筒形短頸瓶は平底 (GL198)・凹み底 (GL199: 中型)・五稜星陽刻 (GL200A) に分かれる。それらと組み合わせるガラス円筒形栓 (GL200B1-5) も5種21点確認した。薬品瓶と思われる「BAU DEN PIPLRICE DU DOCTEUR PIERRE A.C.777.B」中型円筒形短頸瓶? (GL211)、「市川」小型円筒形瓶 (GL215: アンブル?) などがあつた。ここでの報告ガラス瓶の2/3は薬品関係だった。

他に白磁集結器 (FL22)・骨製歯ブラシ (WT57)・「前」押印耐火レンガ (WB010) も検出した。

## 遺物廃棄場 SU6

### 検出状況と重複構造 (図 p.31・72 写真 p.160)

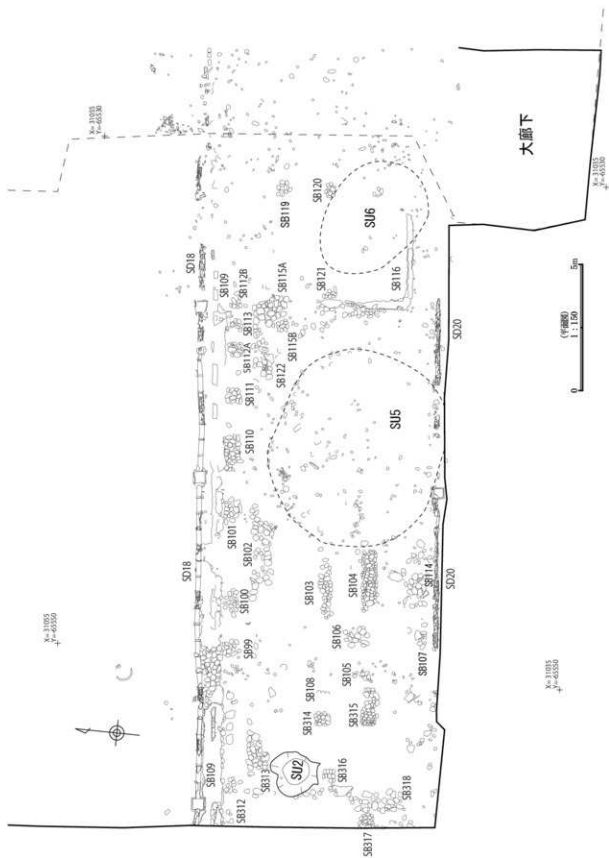
葦寮東側の基礎 SB116 の東に広がる楕円形状(約4×4m)で、SU5と同様に攪乱と重なる。特定の掘り込みは、同じく確認していない。SU5と似た大量に遺物を含む攪乱とも考えられる。

### 出土遺物 (図 p.63・64・写真 p.111・118)

陶磁器は型紙刷染付が目立ち、産地不明紅葉文飯碗 (CR234) 等碗類が多い。また肥前ゴム印? 松童子文合子蓋 (CR241) や瀬戸美濃亀甲鶴文銅版転写合子蓋 (CR243) もあつた。ガラス瓶は化粧品用の「平尾分店」小型広口十角形瓶 (GL221)、そして大型撫で肩瓶 (GL219: ワイン瓶?) があつた程度である。

## SU5・6 遺物出所・時期

2遺物廃棄場は、SU2同様大正8年以前と集結器など大正10年以降の遺物が混じり、全てが同一時期の廃棄ではない。古い廃棄場が昭和40年改築時に大きく攪乱され、型紙刷染付は両者に共通するが円筒形短頸瓶はSU5に集中している。SU2のように、出所は寄宿舍建物と共に工場内各施設からのものが混じったと考えられる。



董奈



蒲子寮

## F 教室 (KS)

**位置：**調査範囲南東隅にあたり、建物東端から10mで「芝生広場」の東境界になる。

**変遷：**大正8年食堂として建設、同9年寄宿舎に改築（大正10年現在435坪木造スレート葺平屋4室）、昭和14年頃再改築、20年代前半市内学校の教室として利用、昭和27年内部再々改築。

### 検出遺構と重複（図 p.34 写真 p.141・142）

東西に長い建物（南北7.8m、東西12m以上）の東端を検出した。重複遺構はない。

**柱基礎：**正方形（1辺約0.7m）状に敷き詰められたグリ石を最下層とするもので、21基の単独基礎を確認した。その上の正方形構造（1辺約0.4m）は、粗いコンクリートと2段4.5枚のレンガを組んだものに分かれる。北側の6基は全て前者で上部構造を伴わないグリ石列が一部残り（SB160とSB170の西側）、レンガのものはさらに上段に2枚を残す例があった（SB153・157）。また南側の壁基礎SB152の中に4基のコンクリート正方形基礎が見られた。重要な例は東西に延びる長方形のコンクリート基礎（SB155、残存長さ2.2m幅0.5m厚さ0.15m）で、その下には南北の基礎と一致する位置で2箇所のグリ石があり、しかも東側は他と全く同じレンガ積みが残っていた。またコンクリート上面中央には、根太材を載せたと思われる突帯跡（幅0.1m）も見られた。そのため、少なくともレンガ基礎からコンクリート根太基礎への改築が認められる。

**壁基礎：**南側で東西方向に延びる（6.7m）レンガ基礎である（SB152）。グリ石を敷いた上に2段以上のレンガを積み、東側の便所の南西隅に一致している。また少し深く掘ってグリ石を敷き、上にコンクリート正方形基礎の載せ、さらにレンガを積んだ部分が3箇所ある。そのうち中央と東側のものは、北側の基礎列走行と同じ位置である。

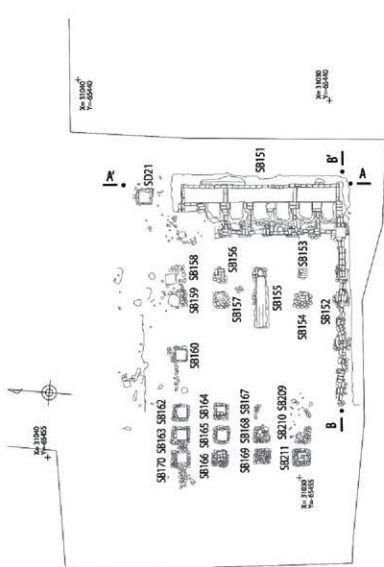
**便所：**建物の東端で、西側に並ぶ7個室（1.2×0.8m）とその東に接する3基の便槽で構成されるレンガ構造である（SB151、6.3×0.7m）。内側はレンガ上面にモルタルが塗られ、個室側から傾斜を持って便槽へ下がっている。便槽はモルタル基礎の上に11段以上レンガが積み重ね（残存高0.75m）、東側外面には補強のためのモルタル壁（厚さ約0.1m）が2箇所残っていた。

**排水溝：**北東隅に正方形のレンガ側面積み3段以上の、集水マス部分（SD21、1辺0.6m）のみが残っていた。内外面にモルタルが塗られており、西に4m強離れた位置に溝部分と考えられる長い「攪乱」があった。

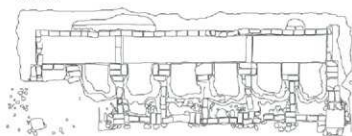
**全体構造：**東西両側と南壁の基礎の間（基礎間南北1.6m）は、長方形（南北6.4m東西4.6m）の空間となり、その東西両側に長方形部分（幅0.9m）が設置されている。また北側の排水溝までの間に東西に長い空間（幅約1.6m）があり、また便所までも同じ幅の南北走行の空間が認められる。SB155の状態は、略正方形空間のコンクリート根太基礎による改築を示している。

### 出土遺物（図 p.54・67・69 写真 p.105・114・121・122）

便所からは「TRADE MARK K.S.」鶴丸文が銅版転写された充存の貼り合わせ白磁便器（CR060）、南側部分で「十五ば」線刻の櫛（HT16）が出土した。また便所のレンガには、403点の刻印確認では蕨寮のRB044と共に2例しかない左から右に書かれた「上敷免製」刻印レンガ（RB267）が1点含まれていた。四角白色絵灰皿（CR059）と「TOYOTOKI」マーク銅版転写の白磁便器片（CR061）は、排水溝攪乱周辺で検出した。



SB151



教室

(写真) 1:150  
0 5m



H=63.00m



H=63.00m

(写真) 1:50  
0

## G 仏間 (BM)

**位置：**調査範囲東側中央で教室の北7m、建物東端から4mで「芝生広場」の東境界になる。

**変遷：**昭和2年娯楽室（47坪木造スレート葺平屋）として建設。昭和15年までに仏間兼読書室となり集会場としても使われた。昭和27年増築され、最後に昭和35年物干場となった。

### 検出遺構と重複遺構（図 p.36 写真 p.143・144）

東西に長い建物（南北12.6m、東西18m以上）の東端を検出した。重複はない。

**柱基礎：**正方形（1辺約0.5m）状に敷き詰められたグリ石を最下層とし、その上に正方形の砂礫を多く含む粗いコンクリート（厚さ約0.1m）を載せたものを規則的並んだ状態で29基礎認した。これらはグリ石なしで同じコンクリートにより薄く敷かれていた（SB182・188）が、大きめの石を中央に配したものが多いため、柱基礎と推定される。北辺から少し離れた位置のSB204は、略正方形（1辺約0.8m）に均質コンクリートで平坦に作られ中央に小正方形（1辺約0.2m）の痕跡が残る。位置と技法が全く異なるので、上記の構造とは無関係と考えられる。

**壁基礎：**柱基礎より新しいものが、グリ石を敷き詰めた上に断面台形状に同様にコンクリート（底幅約0.4m）を長く載せた北東隅のSB186で、頂部には根太基礎跡（幅約0.1m）が残る。東辺に1m突出するSB185も同様の可能性がある。一方、同じ位置で最も新しいSB187は比較的均質な上面が平らなコンクリートで築かれ（断面平形）、中央には凸状に根太基礎が部分的に残る。南辺の柱基礎SB171とSB176から南に約1m延びる基礎も同じ形状と判断できる。また北辺中央のSB195と196の南側に倒壊した状態で残っていたコンクリート構造も、それと同様のものの可能性がある。

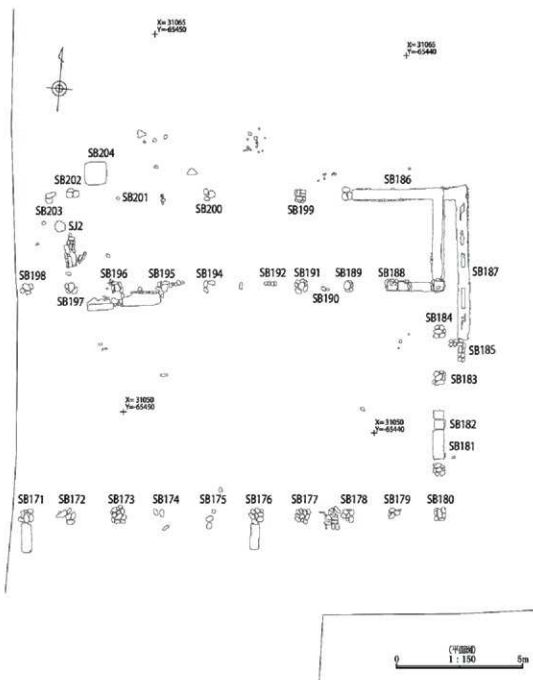
**便所：**北辺中央で、便槽と考えられる埋糞底部（SJ2）を検出した。

**全体構造：**壁と柱の基礎による建物（基礎間1.8m）は、内部に全く柱基礎のない広い主空間（南北幅9m）を中心とし、北側に東端から3.6m地点から始まる細長い副空間（南北幅3.6m）がある。副空間の調査範囲西端は便所として利用されていた。後に北東隅の凹みをなくす状態で改築され（SB186）、また北東隅から6mに小さな突出部が設けられた。その後この突出部を覆う状態で東辺に増築がなされ（SB187）、同時に南辺2箇所に短く南に延びる構造が付加された。度重なる用途の変更から、このような小さな増築がなされたと考えられる。

### 出土遺物（図 p.52・70 写真 p.104・113・125）

埋糞SJ2内からは銭種不明の銅銭（CN01）が出土した。この周辺で統制番号の入った岐阜県瑞浪の曾根磁甎陶製陶所製・ペリオクリーム代用小型角瓶陶器（CR001）と食飲食器と推定される菊文色絵銅版型成形飯碗（CR003）が見られ、また柱基礎SB204の脇には王冠栓「東京第一ミルクプラント和田牛乳店」撫で肩瓶（GL001）が残っていた。他には近世の遺物が少しあったのみで、全体に遺物量は多くない。量の少なさは、この建物が生活空間ではなかったことを示していると思われる。





仏間

## H 梅寮 (UM)

**位置：**調査範囲東側中央で広間の北 15m、建物東端が「芝生広場」の東境界になる。

**変遷：**昭和 12 年頃建設、昭和 20 年代前半梅寮（平面 5 室）。

### 検出遺構と重複遺構（図 p.38 写真 p.145・146）

東西に長い建物本体の東側（南北 8.6m、東西 13m 以上）とその東に接する便所を検出した。当初は全てが攪乱された印象だったが、便所部分はレンガ構造を良好に検出できた。

**柱基礎：**明らかな柱基礎は確認できなかった。

**壁基礎：**グリ石を敷き詰めた基礎構造の最下部を東端部分で確認した。東西走向（SB212・213・215・216）と南北走向（SB207・214）に分かれるが、それぞれを明確に分離することは難しい。標準の幅は 0.5m で、SB212 のみは 1m ほどと広い。また南北走行のものは、便所跡 SB205 の西端と一致する。

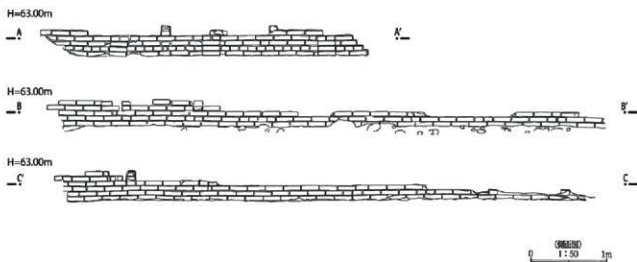
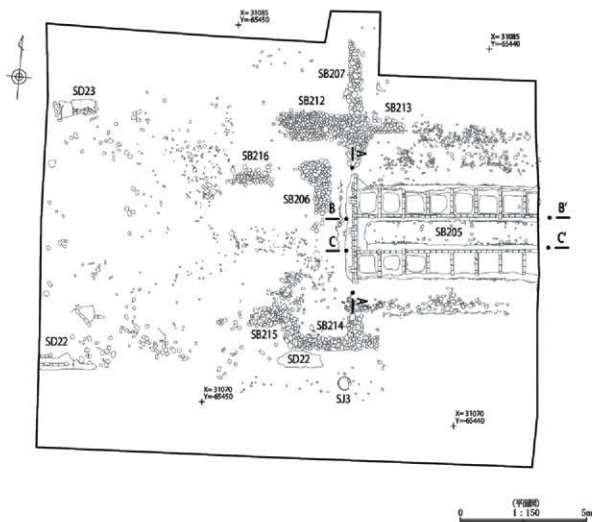
**便所：**便所 SB205 は、レンガを積んで築かれた東西に並ぶ 8 室の便槽跡 2 列で構成される。グリ石基礎の上に礫を多く含むコンクリートを貼って下部構造とし、その上にレンガを積んで内幅 0.9m の便槽を設けている。各便槽底は二重にモルタルを貼って（当初：南北、2 回目：東西）中央が凹む状態を作っているため、便器はそれぞれの直上に設置されていたと考えられる。両列の外側に約 0.8m それぞれ離れて、便槽と平行して走るレンガの攪乱ラインまでが通路ではないか。また便槽列間の細長い空間（幅 1.3m）は糞尿の搬出用部分だろう。一部で 6 段残っていたレンガ積みは、羊糞型をやや多く使っている。

**排水溝など：**調査範囲西端で、建物本体の南北辺に設けられた排水溝の一部が残っていた。グリ石基礎の上にモルタルを貼って底とし、その上に 2 列のレンガを積んだ構造である。北側（SD23）は極めて小範囲のみの残存だが、南側（SD22）は建物南東隅付近にレンガ跡を残すモルタル面を確認した。また南側のさらに外側に鉄薄板で閉めたモルタル製円筒形容器（直径 0.5m、SJ3）の底部を検出した。

**全体構造：**壁基礎と排水溝の位置から、南北両辺に細長い空間が東西方向へ延びていた可能性が推定できる（幅：北約 2.0m、南 0.9m）。それらに挟まれた部分（南北約 5.4m）内には、顕著な基礎跡は見られない。また便所との間には通路空間（幅 1.2m）があり、南端では幅が倍ほどに広がっている（SB214）。北東端の SB207 周辺が洗面所と思われる。

### 出土遺物（図 p.57・71・73 写真 p.107・115・124・126）

便所からは白磁製便器（CR111）以外に、統制番号入り美濃窯業製国民食器皿（CR113）・鉄製機械部品（MT28・29）が出土した。また百円硬貨 3 枚と 10 円硬貨 1 枚も出土した（非報告）。ここで確認したレンガ刻印は全て右行「上敷免製」（RB351・358）で、刻印幅は前者が狭く後者が広い。建物の南外側で産地不明褐釉青磁飯碗（CR110）と瀬戸美濃産手描染付茶碗（CR112）・「ヤマト朝」ガラス超小型広口瓶（GL115）を検出した。攪乱が大きかったため、遺物出土量は少ない。



梅寮

## 1 竹寮(TK)・松寮(MT)・排水路4(HS-4)

**位置**：調査範囲北側で、竹寮は西端と東端、松寮は南辺のみを調査した。

**変遷**：大正14年頃に建設される(竹寮7室平面、松寮5室平面)。

### 竹寮

#### 検出遺構と重複遺構 (図 p.41-43 写真 p.147-151)

竹寮は東西方向建物(南北9.8m、東西57.4m)の両端のみが調査範囲となった。西端は大廊下と合流して排水路2が平行し、東端は排水路4が接する。全体に遺構の残存状況は良好だった。

**柱基礎**：グリ石上に粗いコンクリートを塗ったレンガ積み構造で、大型(12.5枚、 $0.6 \times 0.6\text{m}$ )を西側南辺で2基 SB357-358・北辺で6基 SB349-354、東側南辺で3基 SB383・395・396、北辺で2基 SB371・372を検出した。また中型(10枚、 $0.6 \times 0.4\text{m}$ )を西側で5基 SB341-345、東側で1基 SB373を確認している。SB342は同じ長方形コンクリート基礎の上に南北方向にレンガ積み中型2基を近接して並べ、SB343と344は同じグリ石上に東西方向に並んでいる。SB345も後者と同様に本来2基があった状態である。他に小型(2枚、 $0.2\text{m}$ 強)2基 SB361・362が西側の北外にあった。

**壁基礎**：推定根太材基礎の幅広く(約0.5m)長いレンガ構造を東西走向2列 SB346・378とSB355・375、南北走向を西側で1列 SB359(長7.2m)、東側で2列 SB377(長7.6m)・376(長2.0m) 検出した。SB346は西端から8.6m地点及び東端から3.2m地点でL字形に屈曲して1.9m内側に入って伸びている。東側ではL字形 SB377が先に築かれ、そこに東西走向のSB378が接続されている。

**便所・洗面所**：建物の両端で、2傾斜部と長方形便槽( $3.1 \times 0.7\text{m}$ )のセットが分離した状態で南北に並ぶ同型の便所を確認した。西端 SB347は便槽西端から1.8m離れた個室入り口部の南北に走る壁基礎も良く残っていた他に、傾斜部と便槽を繋ぐ2段レンガ積みアーチ構造2基も残存していた。便槽基礎からアーチ上面までは13段のレンガが積まれ、内側はモルタルが塗られている。東端 SB374も同型だが、アーチ構造は壊れていた。SB347とSB359の北側でSB355を挟んだ建物北西隅にはレンガ1個幅(約0.2m強)で囲われた空間( $5.2 \times 3.3\text{m}$ ) SB348があり、南東側に入り口(幅1.8m)が空いていた。位置と出土遺物より洗面所と考えられる。その西側に塀基礎 SB356を確認し、また北側には長方形( $3.2 \times 1.1\text{m}$ )にレンガで囲い内側にモルタルを水平に貼ったと思われる空間 SB360が見られた。東端の北東隅にも似た広さの空間 SB372・376があったが残りの状態は不良だった。

**排水溝**：南辺ではSB346から0.7m離れた位置で、レンガを積み内面にモルタルを貼った排水溝 SD49(幅0.4m)を検出した。東西両部分で、この排水溝の集水マス(一辺0.7m)各1箇所が残っていた。南辺では他にSB346とSB359の交点付近で単独の小型集水マス( $0.5 \times 0.4\text{m}$ ) SD52があり、また北西隅ではSB360と重複する状態で中型集水マス( $0.6 \times 0.6\text{m}$ )から斜めに走る土管列 SD50を確認した。北東隅近くでは、4方向に土管が延びる中型集水マス SD59があった。西端の西側と東端の東側に沿って施軸土管を繋げた南北走行排水路2と排水路4があり、後者は集水マス4箇所を検出した。

**全体構造**：南辺のL字形壁基礎 SB346と大型柱基礎の関係は、同時期に建設された萩寮のSB08とかなり類似している。そのため萩寮の似た位置にある小型柱基礎 SB343-345の東側は、居室(南北5.7m 東西4.7m)、南側テラス幅1.8m)であった可能性が高い。また北側壁基礎 SB355の北側で東西に延びる空間(幅1.8m)は廊下と考えられる。一方西端便所の東側の壁基礎 SB359と柱基礎 SB341・342の位置は、南から延びる大廊下の柱基礎走行と一致している。この部分の東側にあたるSB346のL字形屈曲は、二階への階段施設部分とするのが妥当である。東端部分では大廊下相当部分がなく、L字形屈曲部が直接便所 SB374に接している。

#### 出土遺物 (図 p.56・57・66・68-73 写真 p.106・107・112・115・122・123・125・126)

東端ではSB374から瀬戸美濃産白磁便器(CR103)、「PILOT MADE IN JAPAN」小型扁平四角形瓶(GL110)もし

て白磁集緒器 (FL07)、SB376 周辺から「500 Gram」色絵片口枡 (CR104) が出土した。SB377 周辺で「入」線刻のセルロイド櫛 (HT35)、SB372 周辺で同ピン (HT59・60)、SB375 周辺で骨製歯ブラシ (WT64) を確認した。他に骨製歯ブラシ柄部 3 点 (SB371・375・377、非報告) もあった。

また西端では、北辺で美濃窯業製統制番号入り国民食器井 (CR106) 及び瀬戸美濃産国民食器皿 (CR108) が見られた。SB348 では、「セイレン中村キリ子？」線刻セルロイド櫛 (HT36)、同ピン (HT61・62) そして 2 点の骨製歯ブラシ柄部を検出した。

SB347 では十円硬貨と五円硬貨各 1 枚 (非報告) と木製下駄 (WD1)、SB374 では木製サンダル (WD2AB) を確認した。なお SB377 のレンガには、右行「上敷免製」刻印レンガが 2 個 (RB342・345) あった。他に同種刻印レンガが西端では 6 個 (SB346・347・351)、東端では 32 個 (SB374・376・377・395)、そして SD49 から 2 個検出した。

## 2 寮中間 (大廊下北) (図 p.42、写真 p.151)

**柱基礎:** グリ石上の粗いコンクリート上に、縦長直方体を 2 個接続させた大型 (0.6 × 0.6m) 3 基 SB364-366 を中央部分で確認した。竹寮と松寮を繋ぐ廊下 (大廊下北) の基礎と考えられる。

**その他:** モルタルを塗った長方形 (約 2.0 × 1.5m) の何らかの貯水施設の遺構 SB363 を、上記基礎の 10m 西で検出した。

## 松寮 (図 p.43、写真 p.151)

**柱基礎:** やや横長長方形 (0.8 × 0.6m) のグリ石基礎 4 基 SB367-370 を、次の排水溝に接して東西に並んだ状態で確認した。最東端の SB370 は 2.6m の長さで、2 基の共通グリ石かもしれない。

**排水溝:** モルタルを内側に塗り両側レンガ積みで東西に走る SD54 を、柱基礎に沿い 8m 検出した。

**その他:** SD54 から南に 3m 離れて、弧状にレンガを並べた SW2 (長 3m) を確認した。

## 出土遺物 (図 p.54・66-69 写真 p.105・114・121・123)

SD54 から瀬戸美濃染付銅版転写盃 (CR064)、推定建物範囲東側で産地不明胎釉褐彩湯呑 (CR065) を確認した。後者近くで「□ラロサイロ七セイレン渡辺ハキ用？」線刻セルロイド櫛 (HT18) と骨製歯ブラシ (WT13)、また SD54 から外側に少し離れて不明線刻セルロイド櫛 (HT17) が出土した。

## 排水路 4

### 検出状況 (図 p.43・51 写真 p.150)

藤寮西端の SB379 と竹寮東端の SB374 の間で 15m 以上延びる南北走向施軸土管列 SD58 のマス 4 基を検出した (土管本体全体の発掘は調査期間の関係で行えなかった)。その最北端の A マスには北から逆 L 字形走向の SD56、そして南より藤寮北辺排水溝 SD60 西端のマスからの SD57、さらに南西側竹寮北辺方向からの 3 本の施軸土管列が合流していた。南側の B マスは竹寮東端便所 SB374 中央部からの土管、C マスには藤寮南辺の排水路 SD41、最南端のマス D には竹寮南辺の排水路 SD49 が入っていた。

### 出土遺物 (図 p.53・66-68・70 写真 p.104・105・113・120・122・123)

SD56 からは瀬戸美濃産青磁小鉢 (CR033)・「□ツネノ」線刻櫛 (HT07)・花形髪留め (HT38)・「クリヤー・インキ」小型四角錐瓶 (GL039)、SD58 からは「明治スカット」大型襪で屑瓶 (GL040)・グラス (GL043)・取手付きカップ (GL044)・「梅之口山之ミヤ？」線刻櫛 (HT08)・「ヤマダシメコ」線刻石鹸箱 (WT73)・「テツコ」ペン書き石鹸箱 (WT74) などが出土した。

以上により、竹・藤・百合寮の建設後に設けられた最終排水路で、寄宿舍群生活の最後まで機能していたものと考えられる。

24-31120  
25-65130

24-31120  
25-65130



大廊下(北)

松

竹(西)

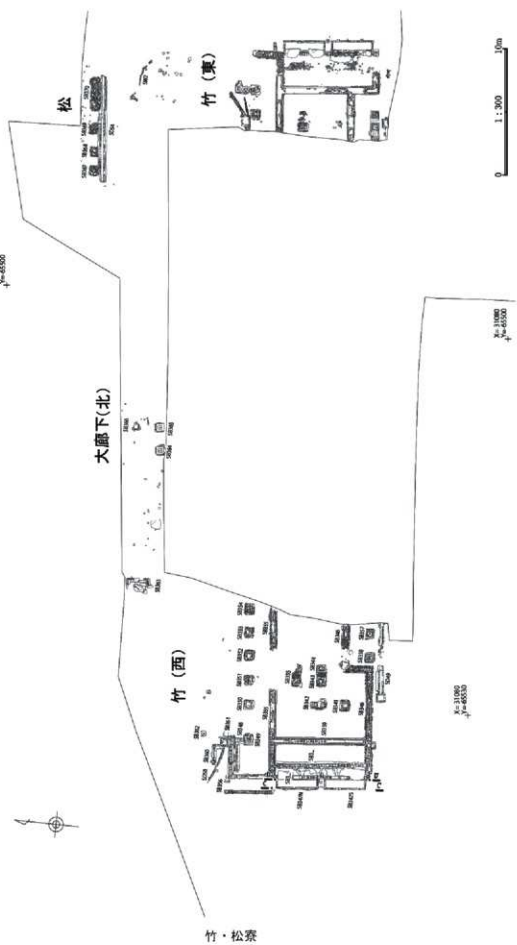
竹・松寮

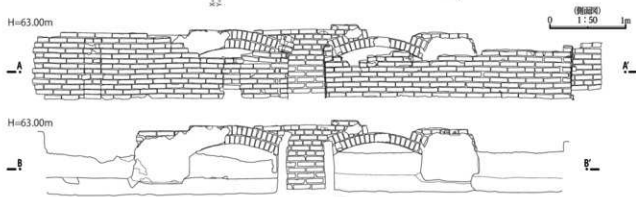
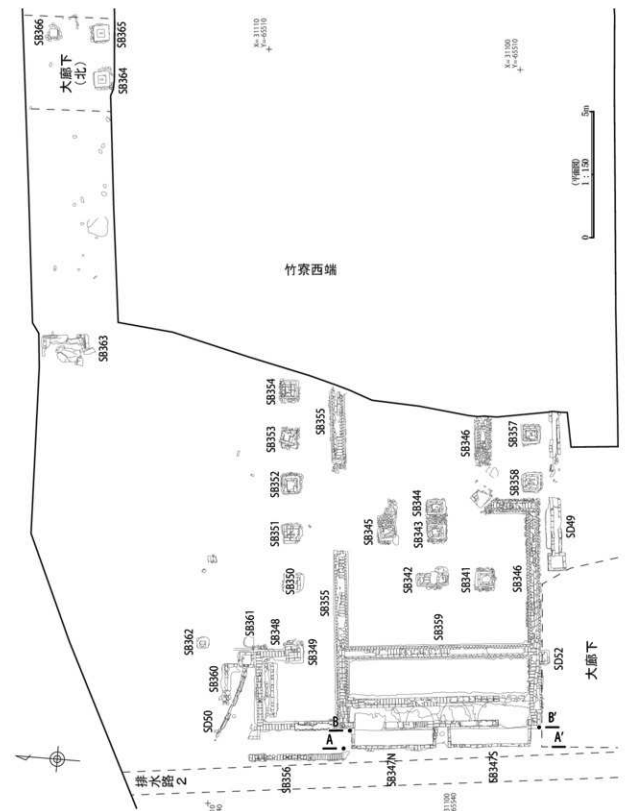
竹(東)

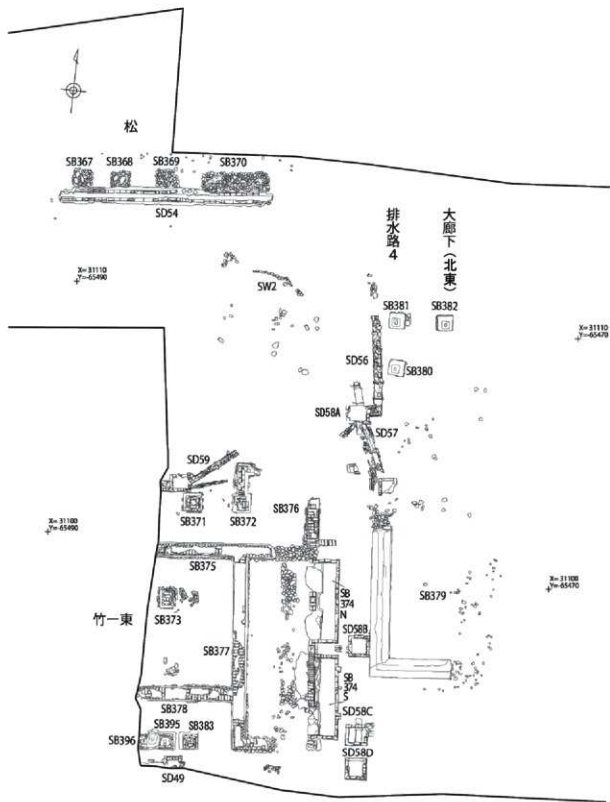
24-31120  
25-65130

24-31120  
25-65130

0 1:300 10m







竹寮東端・松寮・排水路 4



## J 大廊下 (OR)・排水路 2(HS-2)

**位置：**寄宿舎群を南北に結ぶ屋根付き廊下で、調査範囲中央西側に位置する。

**変遷：**大廊下の前身は大正2年には存在していた葛蒲寮中央と撫子寮西端を繋ぐ廊下で、大正14年頃に建設された萩寮と竹寮の各西端まで延長された(大廊下西)。竹寮内北側の廊下を経て松・百合寮まで繋がる(大廊下北-北東)。排水路2は大廊下の西側に南北に伸びる太い施軸土管列である。

### 大廊下

#### 検出遺構と重複遺構 (図 p.45 写真 p.152・153)

等間隔幅(約2.7m)で南北に伸びる柱基礎群の走向(大廊下西)は、竹寮西端の壁基礎 SB359と柱基礎 341・342などと一致する。しかし撫子寮南側に当たる南端部では西列の位置に柱基礎 SB324を確認したが、より古いモルタル塗り水路 SD42 とレンガ蓋水路 SD46などが重複していた(大廊下南)。

**柱基礎：**上記コンクリート製 SB324を除けば、全てグリ石の上に粗いコンクリートを敷いてレンガを4個半積んだ小さなもの10基(間隔1.8m) SB339・340・286・287・44・09・84・89・92・93を同一線上に検出した。

**壁基礎：**竹寮から5m南の位置の両側に柱基礎を隔としてグリ石上にコンクリートを載せた二つの正方形空間 SB284・285(北側突出部、1辺約2m)を確認した。西側のSB284の北西側にはさらに長方形(約5×1m)の同様の基礎 SB279・294が後補されている。また萩寮の北西部分に接して鉄筋コンクリート長方形基礎(5.6×3.6m) SB47があった。南端部では南北走向のコンクリート基礎 SB319と334を確認したが、残存状況は不良である。

**その他：**萩寮から3m南の位置に1枚のレンガを並べた2基の正方形空間(1辺1.8m) SB04・05による南側突出部がある。内側はモルタルを貼った痕跡があり、また両者の中間部分 SB06もモルタル塗布面をなしていた。両者の内側側は柱基礎があり廊下の一部となっている。

**全体構造：**全体残存は不良だが、50m近く直線で伸びる企画性は顕著である。竹寮内北辺の廊下を経て北側(SB364-366)と北東部分(SB380-382)の柱基礎も松・百合寮への通路として繋がる。両突出部の性格の特定は難しいが、モルタル塗りの南側は外へ降りる出入口が想定できる。また南端部は大正5年頃便所があった場所で、斜行のSD46等の水路はそれとの関係が推定される。

#### 出土遺物 (図 p.55・66・69-73 写真 p.106・112・114・115・123-126)

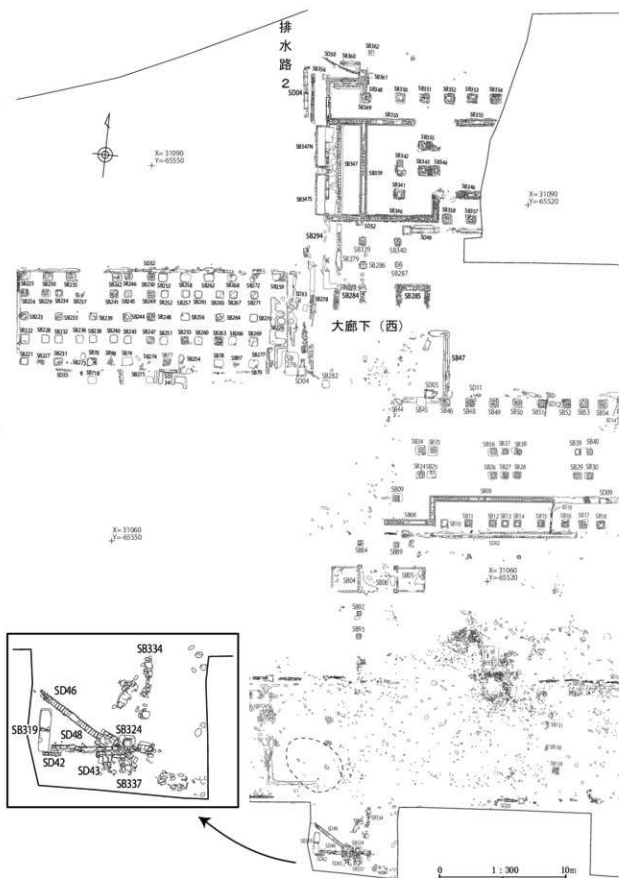
陶磁器では「越」字手描染付の飯碗(CR074)と型紙刷鶴松文窓絵皿(CR075)が、南端部で出土した。ガラス瓶では化粧品瓶推定「ヤマ マツ」十角形瓶(GL096)と「櫻屋製」小型円筒形瓶(GL100)が出た。セルロイド製耳挿き(WT75)・小型合金支え具(MT22)・同「MADE IN GERMANY」陰刻機械部品(MT23)、さらに白磁製集緒器(FL04)とガラス製フリカガ(FL15)も検出した。また右行「上敷免製」刻印レンガ(RB295 [細字]・296・304 [小型印])を確認した。

### 排水路 2

南北走向施軸土管列 SD04 は約25mを検出したが、調査の手順により検出部分は両端のみである。南端部分はレンガ製の集水マスで、南東方向から径の小さな施軸土管列が合流している。

**全体構造：**集水マスは隔離室北棟の南東隅に接するが、確認した流路は萩寮北辺からのみである。位置から萩寮・竹寮の建設時の設置で、当初から施軸土管だったかは不明である。

**出土遺物：**顕著な遺物は出土しなかった。



菖蒲寮北外側

大廊下・排水路 2

## K 排水路 3(HS-3)・遺物廃棄場 SU1

位置：調査範囲中央に位置する。

変遷：大正2年建設の撫子寮の東と南側、大正14年頃建設の萩寮東側に、それら以前に存在していた排水路網。

### 排水路 3

#### 検出遺構と重複遺構 (図 p.47 写真 p.154・155)

南北走向のSD37(幅0.5m、長44m以上)と東西走向SD39(幅0.4m、長13m以上)で構成される。それぞれ萩寮・撫子寮より古く、また前者は北端でSU1に壊される。

**排水溝**：両溝は内面がモルタル塗布されないレンガ造で、前者は15mの間隔で2基の大型集水マス(1×1m以上)を備える。北側マスから先は無軸土管列(内径約0.3m)に変わっている。南側マスに後補の軸土管敷設跡が東側に残っていた。後者は西端で細いレンガ排水路SD44(長2m)を壊し、東側一部は撫子寮軸土管列SD47に壊されている。SD37と39の交差部分は攪乱されていた。

**全体構造**：SD37北側土管部分は南北方向に長い建物があった可能性が高いが、その痕跡は確認できなかった。位置からは、大正6・7年頃に建設された便所と洗濯場があった場所に近い。南側マス東側の土管も建物を想定でき、撫子寮位置設定に関係したと思われる。

#### 出土遺物 (図 p.53・66-70 写真 p.104・112・113・120・122・123)

SD37周辺で「MENUA POMADE 岐 723」代用小型広口瓶(CR022、溝外)・紙刷菊文飯碗(CR024)・同鶴松文皿(CR025)・同桐文飯碗(CR030)を検出した。ガラスは「脇田」小型広口瓶(GL032)・「MENTUM HANKYU KYOYEI」小型円筒形瓶(GL033)・「IZUTSU」扁平短頸瓶(GL027)等で、他に「青木愛子」線刻セルロイド製飾(HT06)・同ヘアピン(HT46・47)・手鏡(HT64)・「丸山」プラスチック石鹸箱(WT72)・骨製歯ブラシ(WT06)と白磁集結器(FL02)が出土。

### 遺物廃棄場 SU1

#### 検出状況と重複遺構 (図 p.47 写真 p.159)

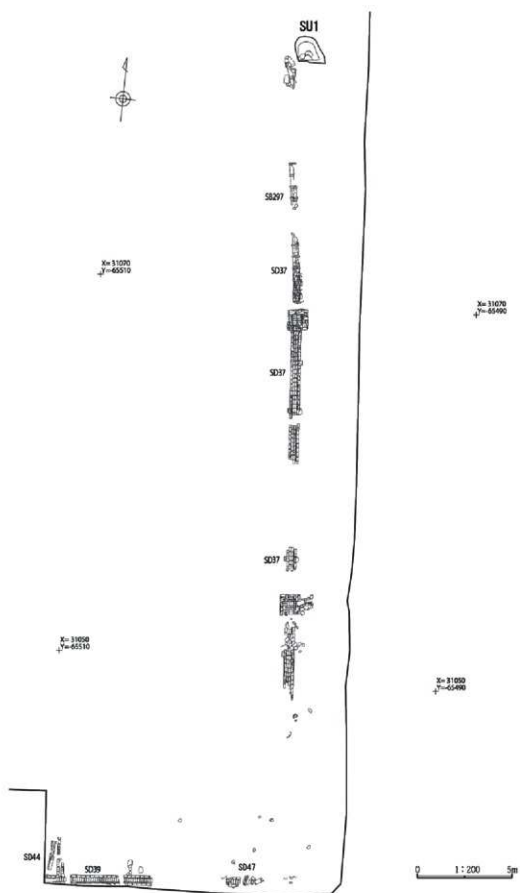
SD37北端の土管部分を壊した状態での、楕円形土坑(2.2×1.2m)である。

#### 出土遺物 (図 p.57-59・66・71 写真 p.107・108・112・115・116・124)

陶磁器は、各種プリントと手描洋皿が瀬戸美濃産(CR133・136・138・139)と「富士山印硬質」陶器(CR140)があった。統制番号磁器では美濃窯業製皿(CR135)・美濃多治見産「鐘紡新町 岐 19」石版色絵湯呑(CR141B)・瀬戸産「瀬383」手描褐釉染付小鉢(CR144)があり、国民食器では美濃窯業製鉢(CR147)・瀬戸美濃鐘紡マーク皿(CR134)・同井蓋(CR137)を含んでいる。また瀬戸美濃産？青磁饅子(CR145)・瀬戸美濃染付手描開基絵皿(CR131)・手描プリント山水文染付長方形皿(CR124)・大塚相馬産白磁灰皿(CR122)・笠間系？刷毛目土瓶(CR148)もあった。信楽産長石軸分業式煮瀾鍋(FL12A)は、排水制御木棒(FL12B)が残る完存状態だった。

ガラス瓶は超大型短頸瓶(GL138)があり、また「キリンビール」大型撫で肩瓶(GL125)・キックアップの大型撫で肩瓶(GL129)・大型撫で肩瓶(GL130)・一升瓶)などのアルコール容器の他に、「全乳」紙栓撫で肩広口瓶(GL135)、「養命酒」扁平瓶(GL131)・「EYE LOTION ROHTO」小型扁平点眼容器(GL132)などの薬瓶、「ELINA」小型広口十角形瓶(GL139)・「Poppy」小型広口六弁形瓶(GL140)のような化粧品瓶があった。

**全体状況**：昭和16(1941)年の製糸部縮小との関係が想定できる煮瀾鍋など、廃棄遺物は寄宿舍で使われていたとは考えられない。統制記号磁器とキリンビールより、同年頃から昭和21(1946)年までの廃棄と推定できる。



排水路3・遺物廃棄場 SU1

## L 藤寮 (FJ)・百合寮 (YL)・遺物廃棄場 SU4, SX4

位置：調査範囲北東隅で、西端で竹寮・松寮と接する。

遺産：百合寮は大正 14 年頃、藤寮は昭和 10 年頃に建設される（各 5 室平面）。

### 藤寮

#### 検出遺構と重複遺構（図 p.51 写真 p.156-158）

南側で東西方向建物（南北 8.4m、東西 36.0m）と東端の便所（南北 12.2m）を検出した。北東隅張り出し部（4.6 × 2.5m）の外側に、2 箇所の遺物廃棄場（北東 1.5m で SU4、北 3m で SX4）があった。また西側 3 分の 1 ほどは大きく掘乱されていた。

**柱基礎**：グリ石上の正方形コンクリート製（一辺 0.6m、厚 0.3m）で上面に方形突出部を持つ。南辺 13 基（SB384-390・403-407・416）並び、内側で 5 基（SB391・392・412・414・421）を確認した。

**壁基礎**：グリ石上に断面台形のコンクリート構造を築き、頂部に根太材受け部（幅 0.2m）が突出する構造である。東西に延びる幅広基礎を 3 列（SB393・402・409、幅 0.7m 強）と南北走向基本のやや狭い 5 列（幅 0.6m 強、SB401 長 7.2m、SB379 長 6.5m 以上、SB413・417 長 5.4m、SB418 残存 2m）がある。SB413 から西に張り出す SB398・415 は明らかに壁基礎で、同じ位置の SB410・411・419・420 もその可能性がある。西端の SB379 は南端で東方向に直交して 2.8m 残っていた。また東端の SB401 は北辺からさらに伸びて上記長方形張り出し部を形成する（SB394・399・400）。

**便所・洗面所**：北東隅張り出しは洗面所だろう。建物本体東端から約 1.8m 離れてコンクリート壁基礎（約 1m）と内部がモルタルで塗られた長方形空間（1.4 × 0.6m）が 6 個南北に並ぶ SB408 があった。2 個室用便槽列と考えられる。

**排水溝**：グリ石上にモルタルを貼り、両側レンガ積構造（内幅約 0.2m 強）の排水溝を南北辺で部分的に検出した（南辺 SD61 残存長 25.4m、北辺 SD60 残存長 31m）。SD61 は西端集水マスから排水路 4 の SD58C マスへ土管で繋がり、SD60 西端マスは土管 SD57 を通じて SD58A マスと結んでいる。

**全体構造**：北辺の SB393 と 402 の間（幅 1.8m）は仕切りが全く見えず、長大な廊下空間と推定される。また SB409 と柱基礎の間（幅 0.9m）は萩寮などと同様のテラス部分だろう。SB413・417 及び南北の壁基礎で囲まれた部分が 1 室空間（南北 5.6m、東西 4.4m）で、そこには南北に並ぶ柱基礎により東側に押し入れ空間（幅 1.2m）が想定できる。西端の壁基礎 SD379 が東へ曲がる部分と排水溝の土管部分は、萩寮や竹寮と同様に張り出した階段部分と思われる。同じ昭和 2 年平面図初出の萩・竹寮とは、基礎構造が全く異なっている。

#### 出土遺物（図 p.52・66・68-70・71 写真 p.104・112・113・120・122-125）

陶磁器の出土量は少なく、近世のものを除けば顕著なものは SB401 から瀬戸美濃黒釉染付湯呑（CR005）、便所 SB408 から同青磁便器（CR006）が出土した程度である。便所からは他に角製裁縫用ヘラ（OT03）・不明銅貨（CN02）・鉄製長金具（MT26）が出土した。ガラス瓶は洗面所 SB400 付近から「白元」超小型円筒形瓶（GL002）、そして SD61 集水マスから「神薬資生堂製 SHISEIDOTOKIO DISPENSARY」小型扁平八角形瓶（GL003）が見られた。SB404 付近から「四武井しづ」線刻セルロイド櫛（HT02）、SD60 中央北外側で「引口？」線刻セルロイド櫛（HT01）を検出した。また SB399 付近で「武寮の五号室 清水」線刻大型差し櫛（HT37）を確認した。SD60 と 61 に、右行「上敷免製」刻印レンガ 3 点が含まれていた。

### 百合寮

#### 検出遺構（図 p.51、写真 p.156・158）

藤寮から北に 12m 離れて東西方向建物（東西 25.5m 以上）南辺を検出した。

**柱基礎**：次の排水溝に沿って、グリ石に貼られたコンクリート基礎 SB397 を検出しただけである。

**排水溝**：東西方向に延びるグリ石上両側にレンガを立て、内面モルタル塗布の SD55（長 24.5m）を部分的に検出した。西端で逆 L 字形に 0.9m 屈曲するが、その後の延長方向は西側の松寮 SD54 に一致している。

#### 出土遺物 (図 p.57 写真 p.107・115)

調査範囲僅少のため、絶対量は少ない。陶磁器は、SD55 内から「幹山」銘瀬戸美濃産手描黒軸染付盃 (CR114)、西端付近で同銅版転写型成形染付茶碗 (CR115) が出土程度である。排水溝東外側では、三日月ロコが陽刻された小型卵型ガラス瓶 (GL116) があった。

#### 中間地点 (大廊下北東) (図 p.51、写真 p.156)

柱基礎：グリ石の上に貼られた厚い正方形コンクリート基礎 3 基 SB380-382 が、SD60 西端マスカから北に 4.4m で検出した。南北 2.4m 東西 1.8m の間隔で並び、西側の南北走向は SB379 の延長線上にあたる。いずれも頂部に長方形の窪みがあり、藤寮と百合寮を繋ぐ廊下の基礎と考えられる。

#### 遺物廃棄場 SU4

##### 検出状況 (図 p.51 写真 p.160)

藤寮北東隅の洗面所と便所北端の近くで、集中した大量の磁器碗を確認した。それらの磁器を除去すると、不定形皿状 (直径 1m、深 0.3m 程度) の掘り込みになった。

##### 出土遺物 (図 p.61・62・66・68・69 写真 p.110・112・122)

瀬戸美濃銅版転写型成形色絵雪の下文飯碗 (CR197) 76 点、同菊文飯碗 (CR196) 45 点、それらの破片の可能性ある色絵・飯碗片 (CR202) 72 点が量的に多い種類で、他にも 22 点の各種銅版転写碗があった。皿は肥前銅版転写牡丹恋絵山水文揚軸染付大皿 (CR200) を含め 7 点しかなかった。

これらの種類は、食堂からの同種磁器碗に集中した廃棄状況を示している。ただ SB399 東端とほぼ接するため、昭和 10 年頃の藤寮建設直前と考えるのが妥当である。

#### 遺物廃棄場 SX4

##### 検出状況 (図 p.51 写真 p.159)

SU4 の北西側に比較的広い範囲 (約直径 3m) で、ガラス瓶を含む各種遺物が確認面で散乱していた。ほぼ遺物を取り上げると隅丸方形の土坑状掘り込み (一辺約 2.5m、深約 0.4m 以上) になったが、調査時間制限のため完全には遺物を取り上げできなかった。

##### 出土遺物 (図 p.64・66・68・70 写真 p.111・112・118-120・122・123)

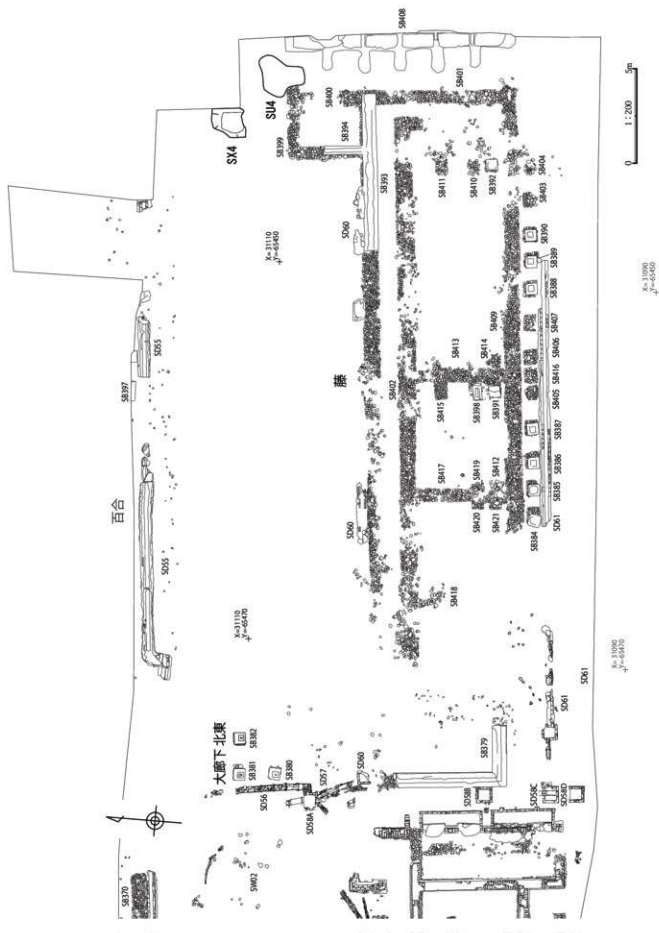
陶磁器は 27 種を報告するが、複数点数出土の同一種類はない。興味深いものとして、「マスター」化粧品代用白磁扁平小瓶 (CR244)・「Monoco」化粧品代用透明軸陶器小瓶 (CR264)・瀬戸美濃吹絵染付富士茄子文飯碗 (CR245)・「昭和十三年上半年新町工場紡績部第一位獲得記念・人一倍の事を為すに非ざれば一倍の人となること能わず」上絵瀬戸美濃青磁湯呑 (CR254)・「東海硬質磁器 MARUKO」プリント白磁金赤彩アルデコ様式湯呑 (CR255)・「親と歯は大切に」新町桜井歯科医院 硬質磁器型成形ゴム印?色絵湯呑 (CR256)・美濃窯業製国民食器片 (CR258)・「岐 258」銘透明軸陶器代用小瓶 (CR263)・横浜産巴雷文貼付黒軸陶器花瓶 (CR265)・産地不明「MARY HAD A LITTLE LAMB」プリント色絵陶器コーヒークップ (CR270) があった。

ガラス瓶類も大量に出土したが、ここでは 72 点を報告する。化粧品関係では、「TSUKIBIJIN 月美人」小型扁平四角形瓶 (GL230・231・241)・「ANDO」小型扁平卵型瓶 (GL232)・「Juji」小型逆四角錐瓶 (GL240)・「ヘチマコロン」扁平撫で肩瓶 (GL250)・「MASTER SHOBIDO」小型扁平卵型瓶 (GL272)・「お染ポマード」短広口瓶 (GL276)・「共榮會特製ボンネットクレ」小型広口十二角形瓶 (GL277)・「尚美堂」小型卵型瓶 (GL280)・「千代花」小型円筒形瓶 (GL293) 等があった。

薬瓶は、「良薬□□苦し」中型円筒形短頸瓶 (GL246)・「WAKAMOTO」円筒形瓶 (GL247)・「EYE LOTION ROHTO 40」小型扁平点眼容器 (GL264)・「植原醫院」中型円筒形短頸瓶 (GL281) など多彩である。他に飲料容器として、「AKADAMA PORT WINE KOTOBUKIYA」大型撫で肩長頸瓶 (GL236)・「180cc 乳」王冠撫で肩瓶 (GL259)

があり、またインク瓶も「大國文具」小型扁平八角形瓶 (GL253)・「RIGHT INK 2OZ MADE IN JAPAN」小型円筒形瓶 (GL290) など複数見られた。化粧品と考えられる瓶は、この遺構からの報告ガラス瓶総数の半数に近い35点を数えた。

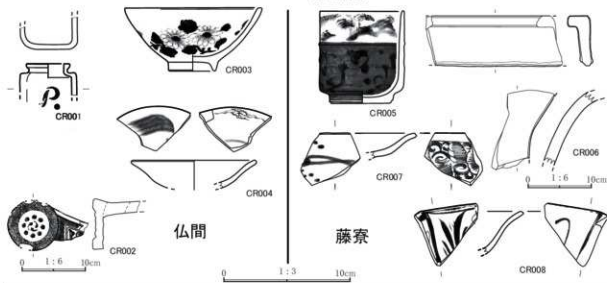
これらの遺物で最新のものは、昭和15-21 (1941-46) 年の統制記号入り代用陶器小瓶 (CR263) と1946年のジュジュ化粧品洗顔クリーム (GL240) である。そのため女工たちが使用していた生活用品を中心に、寄宿舎からの廃棄物として第二次大戦直後に廃棄がなされたと考えられる。戦争中には製糸部が大幅に縮小され、また勤労動員女学生の宿泊などもあり、そのような普通とは異なる寄宿舎生活の変化によって廃棄がなされた可能性が想定できる。



藤・百合祭



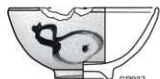
第3節 遺物実測図



陶磁器類



CR024



CR027



CR029



CR030



CR028



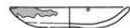
刻印 1/1 CR022



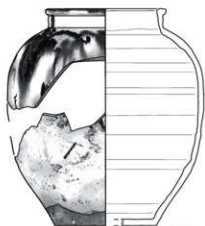
CR025



CR026



CR031



CR023

0 1:6 10cm

0 1:3 10cm

排水路 3



CR032

0 1:4 10cm



CR033

排水路 4

0 1:3 10cm



CR034



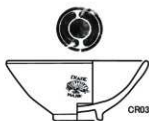
CR043



CR037



CR038



CR035

菊奈

0 1:3 10cm



1/2

2.6

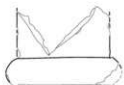


CR036



CR042

CR040



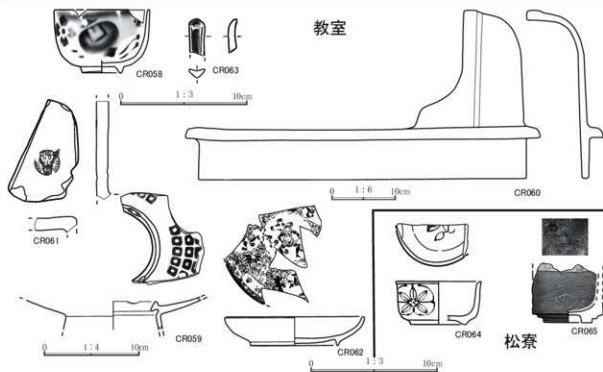
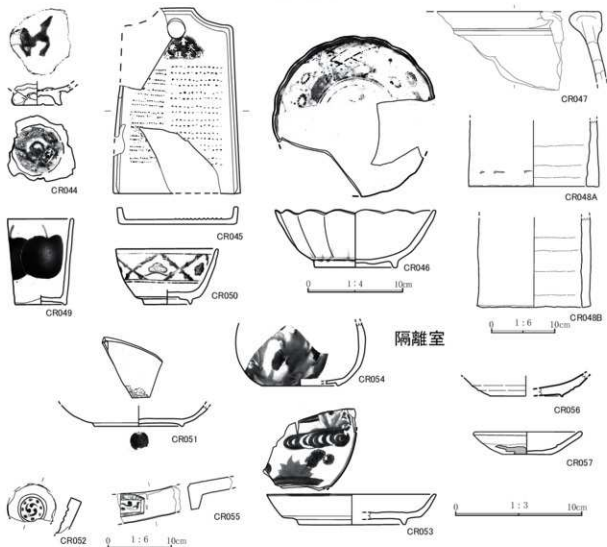
CR039

0 1:6 10cm

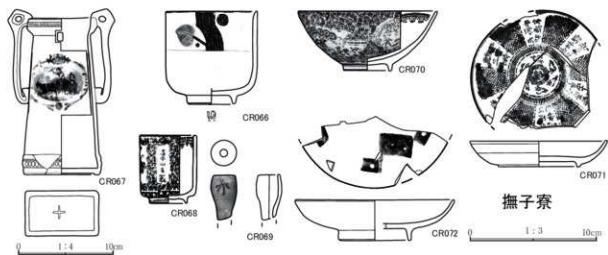


CR041

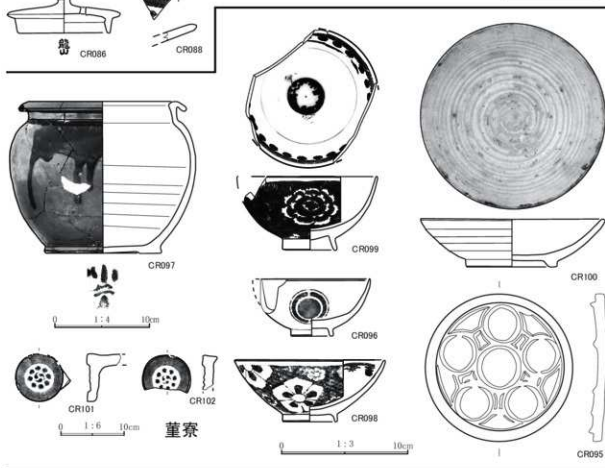
陶磁器類



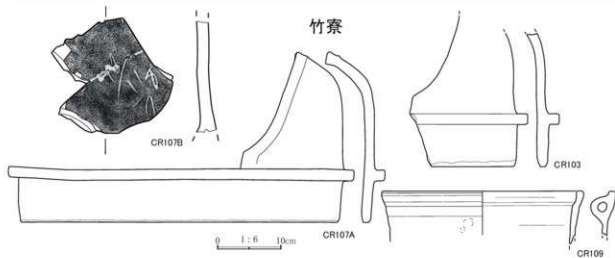
陶磁器類



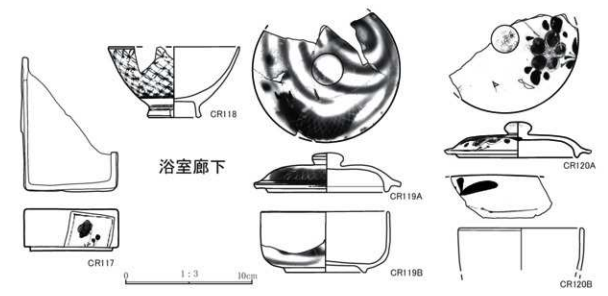
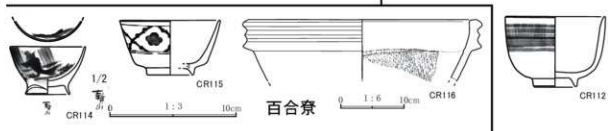
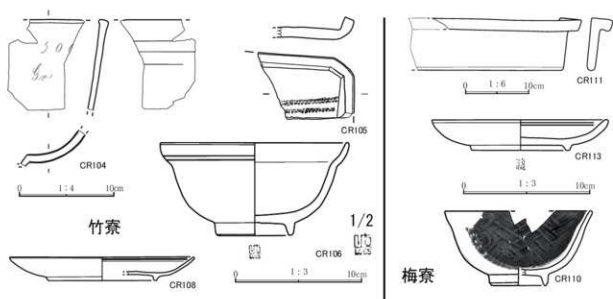
陶磁器類



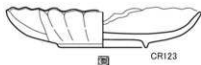
竹奈



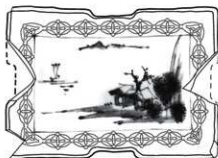
陶磁器類



陶磁器類



CR123

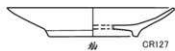


CR124

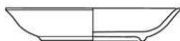


CR121

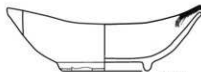
遺物廃棄場 SU1



CR127



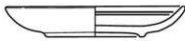
CR134



CR129



CR130



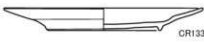
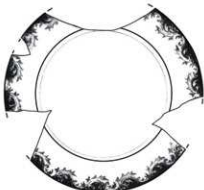
CR135



CR131



CR139



CR133



CR136



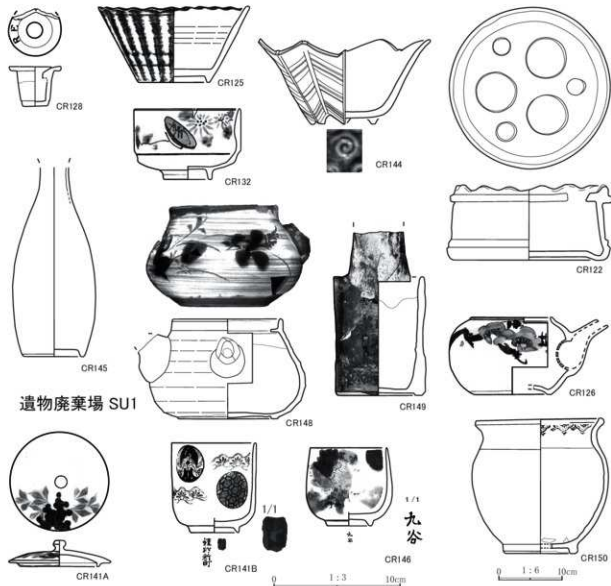
CR138



CR140



陶磁器類



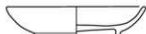
遺物廃棄場 SU1



遺物廃棄場 SU2



陶磁器類



CR154



CR156

遺物廃棄場 SU2

0 1:3 10cm

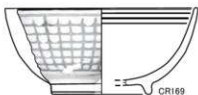


CR170

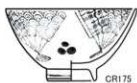


CR171

遺物廃棄場 SU3



CR169



CR175



CR176



CR177



CR178



CR179



CR180



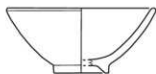
CR181



1/1



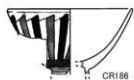
CR182



CR184



CR185



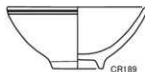
CR186



CR187



CR188



CR189



CR174



CR183



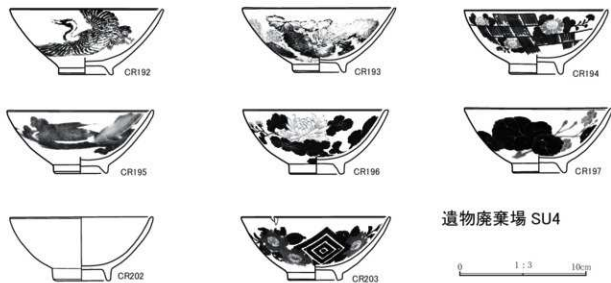
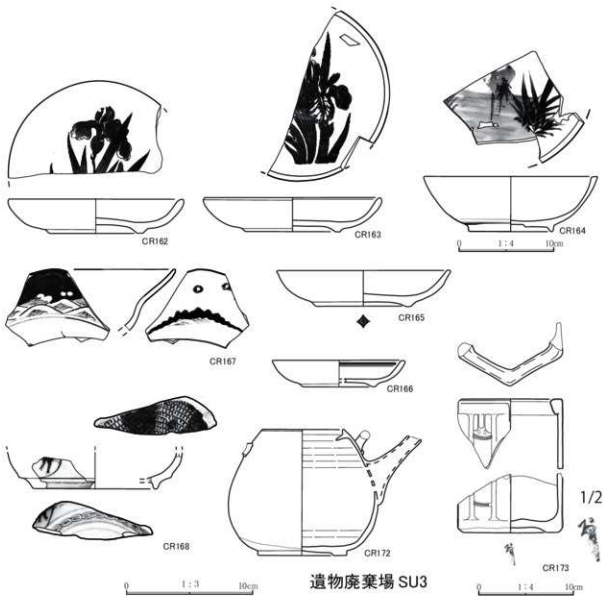
CR190



CR191

0 1:3 10cm

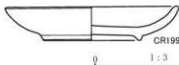
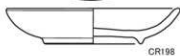
陶磁器類



陶磁器類



遺物廃棄場 SU4

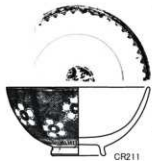


0 1:4 10cm

0 1:3 10cm

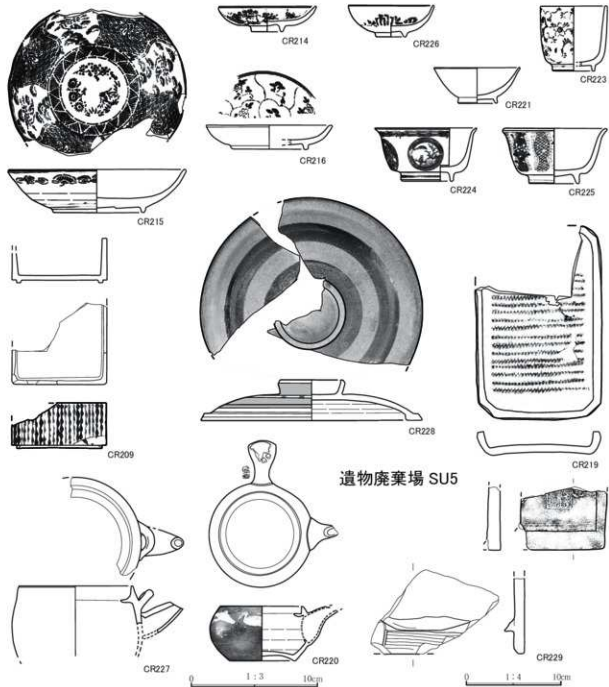


遺物廃棄場 SU5

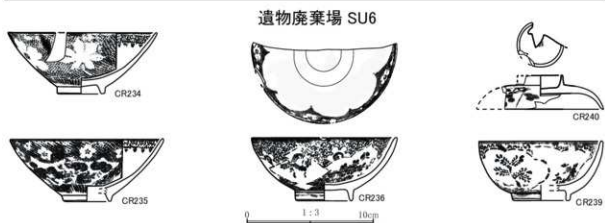


0 1:3 10cm

陶磁器類

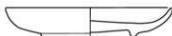
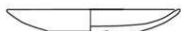


遺物廃棄場 SU5

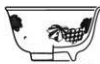


遺物廃棄場 SU6

陶磁器類



CR231



CR233



CR241



CR237

遺物廃棄場 SU6



CR238



CR242



CR243

遺物廃棄場 SX4



CR245



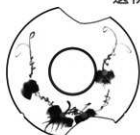
CR246



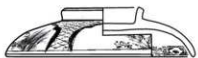
CR248



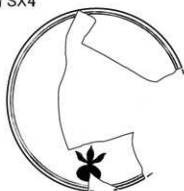
CR252



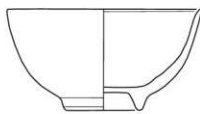
CR249



CR261



CR259

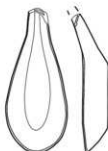
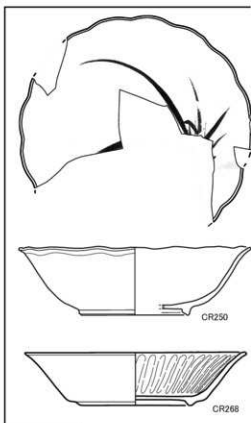
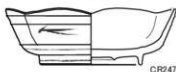
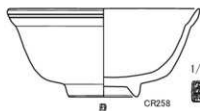


CR251



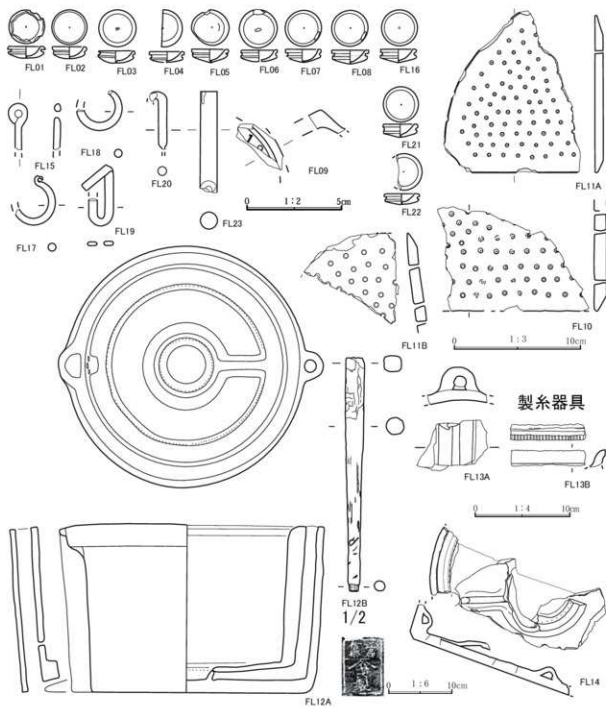
陶磁器類

遺物廃棄場 SX4



0 1:3 10cm

0 1:4 10cm



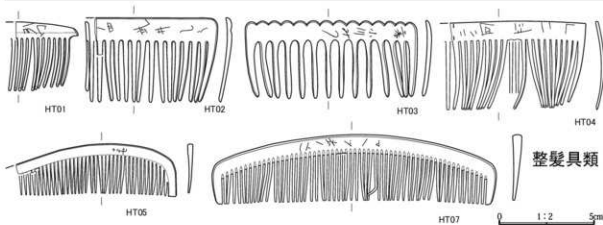
製糸器具

FL13A

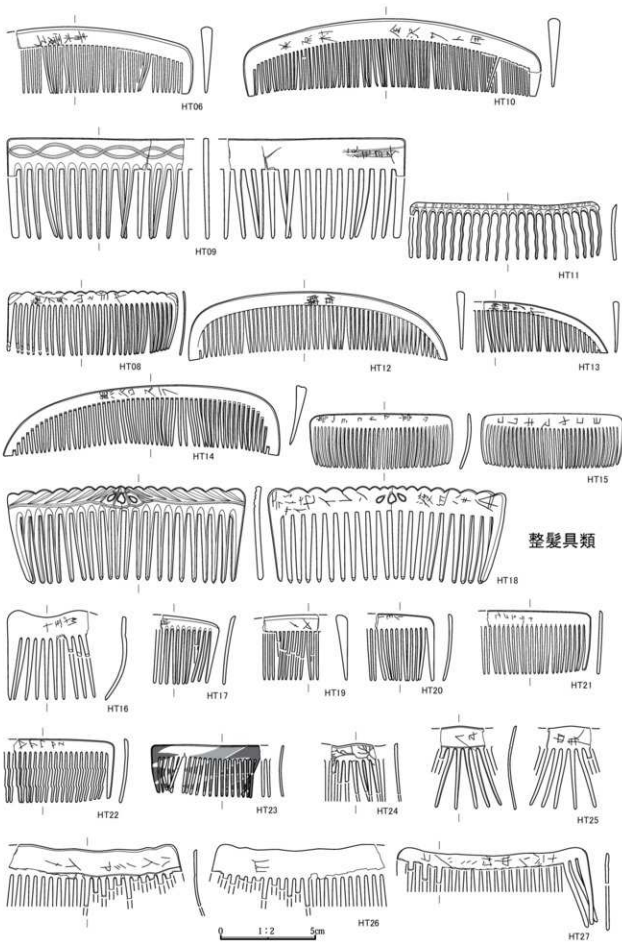
FL13B

FL12B  
1/2

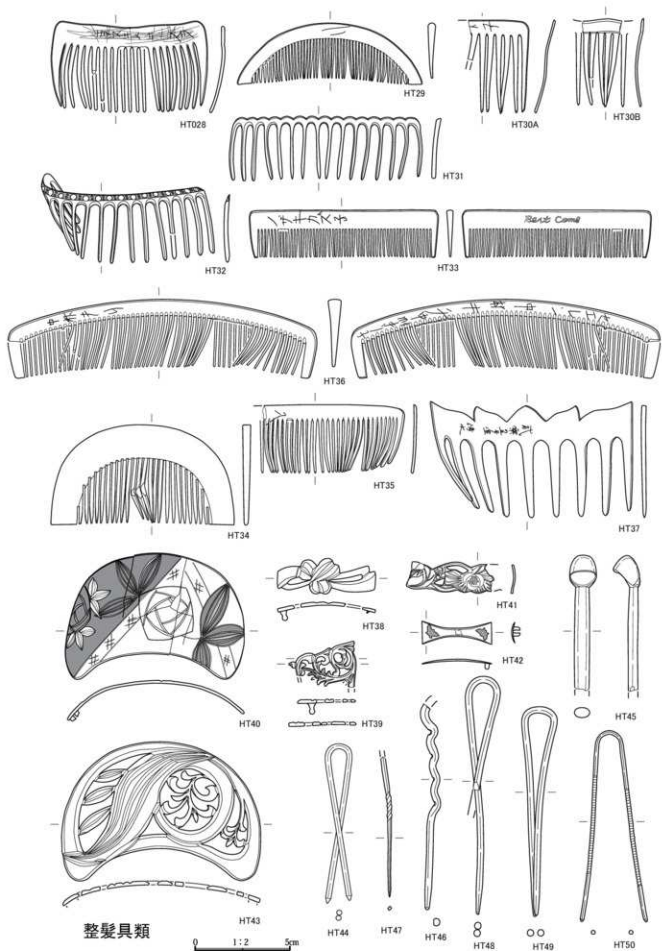
FL12A

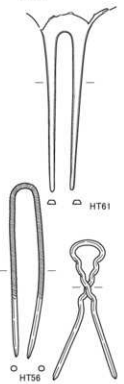
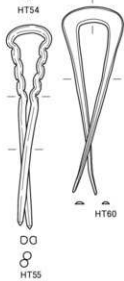
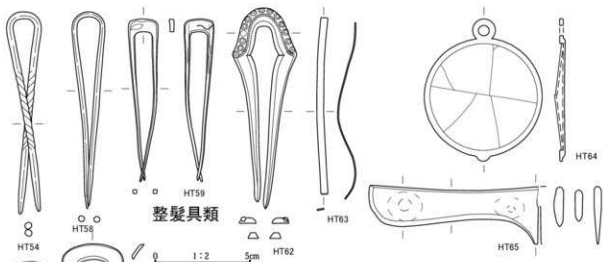


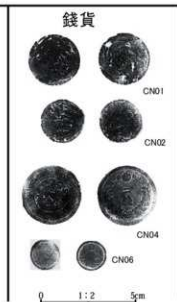
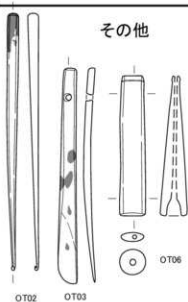
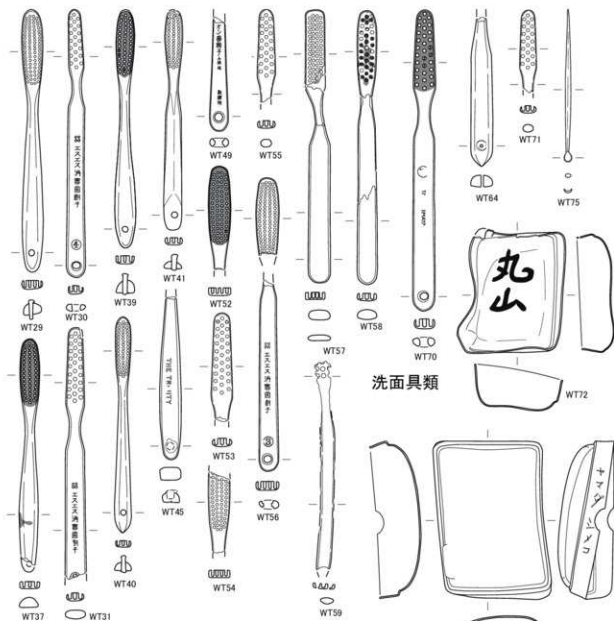
整髮具類

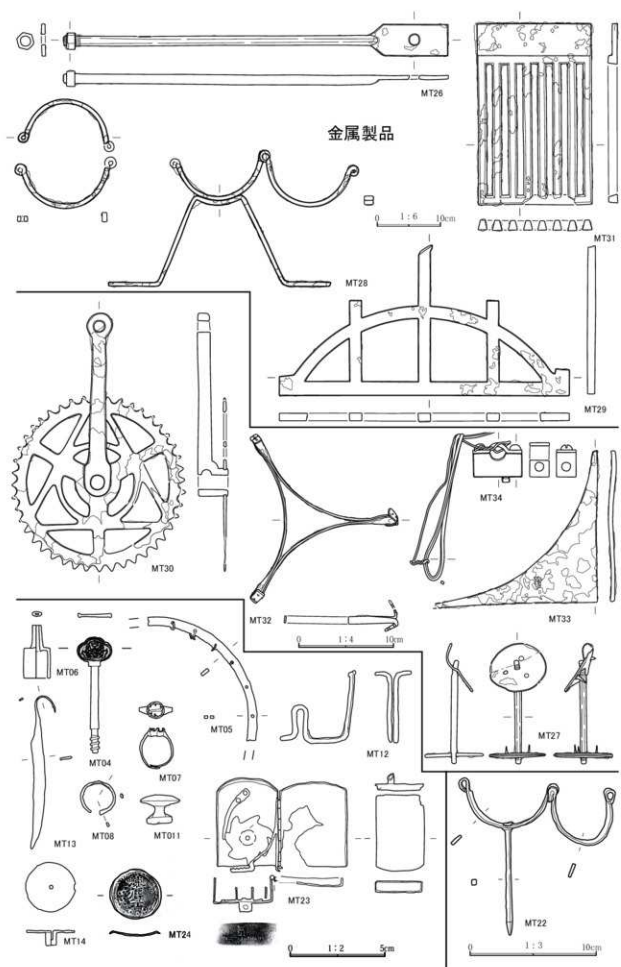


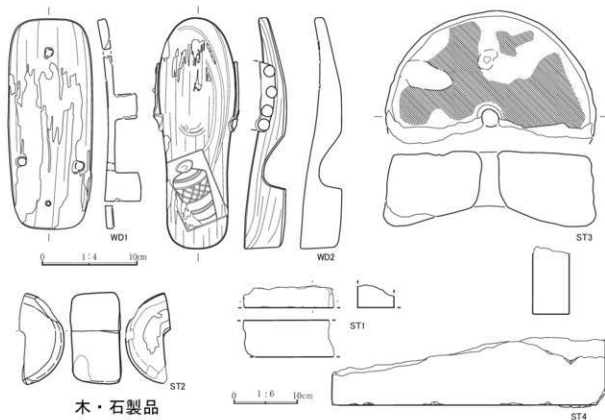




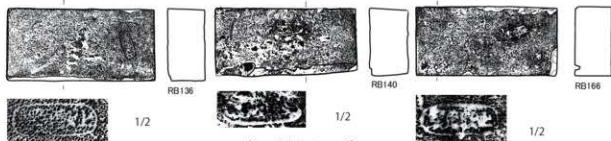
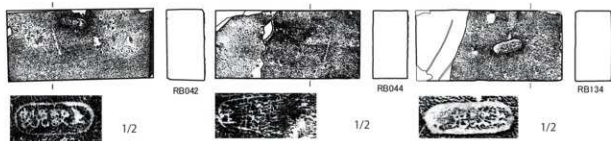




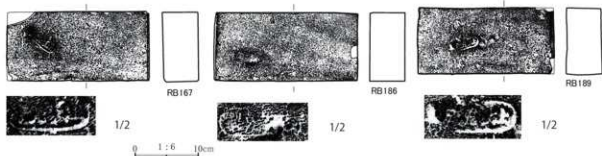




木・石製品



赤・耐火レンガ





RB196

RB198

RB267



1/2



1/2



1/2



RB270



RB293



RB295



1/2



1/2



1/2



RB296



RB304



RB342



1/2



1/2



1/2



RB345



RB351



RB358



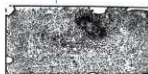
1/2



1/2



1/2



RB387



RB390

赤・耐火レンガ



1/2



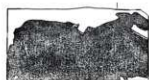
1/2



WB05



WB07



WB08



WB10

0 1:6 10cm















ガラス瓶観察表

番号	写真	種類	建物	清浄	色	形状	種	製造	工房/名	容量	内容	所有者・年代等	
GL157	写真	化粧品	SM	5/25	透明	扁平四角瓶	横城	無印	11.0	4.7	4.4		
GL158	写真	化粧品	SM	5/25	透明	扁平四角瓶	横城	無印 (方塊突起)	11.0	3.8	1.8		
GL159	写真	化粧品	SM	5/25	透明	小笠長瓶	横城	BY ロゴ 無印	9.0	4.0	-		
GL160	写真	薬品	SM	5/25	透明	中笠四角短瓶	横城	百練り	12.3	4.8	-		
GL161	写真	化粧品	SM	5/25	透明	扁平六角瓶	横城	樽本守御田屋	10.6	3.8	2.7	香水瓶	
GL162	写真	飲料	SM	5/25	透明	大型扁平長瓶	木城綾	特級上等全乳 搾取所	21.1	5.7	-	日光香露用角用蓋 大正	
GL163	写真	化粧品	SM	5/25	透明	小笠四角瓶	ガラス	(スボイト付付き)	6.8	2.9	-	香水瓶?	
GL164	写真	薬品	SM	5/25	透明	小笠四角瓶	横城	?	5.3	2.1	-	アンブル?	
GL165	写真	薬品	SM	5/25	透明	超小笠四角瓶	横城	?	4.0	2.5	-	アンブル?	
GL166	写真	薬品	SM	5/25	透明	小笠四角広口瓶	横城	33	7.8	5.1	-		
GL167	写真	薬品	SM	5/25	透明	小笠広口十二角瓶	横城	H	6.9	4.5	-		
GL168	写真	化粧品	SM	5/25	透明	小笠広口瓶	ガラス	(種付付き)	6.3	4.2	-		
GL169	写真	薬品	KR-NN	5/25	コバルト	小笠扁平四角瓶	横城	神流 (蓋)	6.2	3.0	1.8		
GL170	写真	薬品	KR-NN	5/25	コバルト	小笠四角瓶	横城	百練り	6.0	2.7	-	アンブル	
GL171	写真	薬品	KR-NN	5/25	コバルト	小笠八角瓶	横城	神流 養生堂製	8.2	2.3	-	OSPENSARY	
GL172	写真	化粧品	KR-NN	5/25	赤	扁平四角瓶	横城	TM ヘルマコロン	11.1	3.9	2.3	矢野商店	
GL173	写真	アルコール	KR-NN	5/25	淡青	大型扁平長瓶	横城	大日本酒造株式会社製造 xC8	22.4	5.8	-	S1-10年代	
GL174A	写真	飲料	KR-NN	5/25	淡青	大型扁平長瓶	本社綾	B	25.2	5.4	-		
GL174B	写真	飲料	KR-NN	5/25	染付・緑線	細頸瓶	横城	部屋平斗丸	2.2	2.2	-		
GL175A	写真	飲料	KR-NN	5/25	淡青	扁平長瓶	横城	日本茶漬醸造株式会社	619.5	6.3	-	1921-33	
GL175B	写真	化粧品	KR-NN	5/25	白磁・緑線	細頸瓶	横城	?	3.0	2.5	-		
GL176	写真	薬品	KR-NN	5/25	青	小笠扁平八角瓶	横城	神流	6.3	2.5	1.5		
GL177	写真	化粧品?	KR-NN	5/25	淡青	短広口瓶	池	?	2.9	6.6	-		
GL178	写真	化粧品?	KR-NN	5/25	淡青	短広口瓶	池	トウゴ	4.2	4.8	-		
GL179	写真	食器	KR-NN	5/25	淡青	広口四角瓶	横城	TABLE SALT	9.6	4.0	-		
GL180	写真	化粧品	KR-NN	5/25	乳白	扁平短広口瓶	横城	PEACHFLOW ものの花	2.5	5.2	-	東京堂洋装堂 1912-50	
GL181	写真	化粧品	KR-NN	5/25	乳白	短小笠広口瓶	横城	?	2.2	2.6	-		
GL182	写真	化粧品	KR-NN	5/25	乳白	小笠四角瓶	アルミ	?	3.0	2.7	-		
GL183	写真	化粧品	KR-NN	5/25	乳白	小笠四角瓶	アルミ	ウチナゴロ	5.3	3.6	-	ウチナゴロ産工業	
GL184	写真	化粧品?	KR-NN	5/25	乳白	内筒瓶	横城	六角形細み	2.0	2.2	-		
GL185	写真	医薬	KR-NN	5/25	乳白・青	コマ	?	?	1.2	2.2	-		
GL186	写真	化粧品	KR-NN	5/25	透明	小笠四角瓶	横城	?	5.1	2.2	-	アンブル?	
GL187	写真	化粧品?	KR-NN	5/25	透明	長頸瓶	横城	?	17.9	5.7	-		
GL188	写真	化粧品?	KR-NN	5/25	透明	扁平六角瓶	横城	?	12.4	4.9	2.8		
GL189	写真	文具	KR-NN	5/25	透明	小笠四角瓶	横城	?	5.4	4.8	-	インク瓶?	
GL190A	写真	化粧品?	KR-NN	5/25	透明	小笠八角瓶	横城	?	7.8	3.4	-	香水瓶?	
GL190B	写真	化粧品?	KR-NN	5/25	黄緑・コルク	注口栓?	透明	注口開閉	c.30	2.0	-		
GL191	写真	化粧品?	KR-NN	5/25	透明	小笠四角瓶	横城	?	9.3	4.1	-		
GL192	写真	化粧品	KR-NN	5/25	透明	小笠四角瓶	ガラス	(ネジ式)	5.6	1.4	-	香水瓶?	
GL193	写真	化粧品	KR-NN	5/25	透明	小笠四角瓶	横城	?	6.6	1.5	-		
GL194	写真	食器	KR-NN	5/25	緑線	角身	横城	花文・縁飾	5.0	6.0	-		
GL195	写真	薬品	SM	5/25	赤	内筒瓶	ガラス	?	18.5	7.3	-		
GL196	写真	薬品	SM	5/25	赤	内筒瓶短瓶	池	?	5.3	3.3	-		
GL197	写真	アルコール	SM	5/25	赤	大型扁平長瓶	キックアップ	?	25.7	7.6	-	ワイン瓶?	
GL198	写真	薬品	SM	5/25	コバルト	大型内筒短瓶	ガラス	(平垣造)	20.0	6.8	-		
GL199	写真	薬品	SM	5/25	コバルト	内筒瓶短瓶	ガラス	(底ノ差)	19.7	6.3	-		
GL200A	写真	薬品	SM	5/25	コバルト	大型内筒短瓶	ガラス	玉縁差	20.1	6.7	-		
GL200B1	写真	薬品	SM	5/25	コバルト	内筒短瓶	?	?	3.9	1.5	-		
GL200B2	写真	薬品	SM	5/25	淡青	内筒短瓶	小	?	3.7	1.4	-		
GL200B3	写真	薬品	SM	5/25	淡青	内筒短瓶	大	?	4.7	1.3	-		
GL200B4	写真	薬品	SM	5/25	淡緑	内筒短瓶	?	?	4.0	1.2	-		
GL200B5	写真	薬品	SM	5/25	透明	内筒短瓶	?	?	c.35	1.5	-		
GL201	写真	薬品?	SM	5/25	淡青	内筒短瓶	ガラス	玉縁差	-	8.9	-		
GL202	写真	薬品?	SM	5/25	淡緑	小笠広口瓶	横城	S	8.1	4.6	-		
GL203	写真	薬品	SM	5/25	乳白	小笠内筒短瓶	横城	?	5.9	3.2	-		
GL204	写真	化粧品?	SM	5/25	乳白	小笠内筒短瓶	横城	?	c.57	2.2	-		
GL205	写真	化粧品?	SM	5/25	乳白	小笠四角瓶	横城	西	5.2	3.1	-		
GL206	写真	化粧品	SM	5/25	乳白	小笠広口瓶	横城	?	4.0	5.1	-		
GL207	写真	化粧品	SM	5/25	乳白	小笠広口瓶	横城	?	6.1	5.1	-		
GL208	写真	薬品	SM	5/25	透明	小笠内筒短瓶	横城	(内筒物一部残存)	7.2	3.4	-		
GL209	写真	化粧品?	SM	5/25	透明	小笠内筒短瓶	横城	百練り	9.9	3.4	-		
GL210	写真	薬品	SM	5/25	透明	内筒瓶短瓶	横城	百練り	11.9	4.9	-		
GL211	写真	薬品?	SM	5/25	透明	中笠内筒短瓶?	横城	BAU DEN PRINCE DU DOCTEUR PIERRE A.C.177.B	c.68	4.7	-		
GL212	写真	化粧品?	SM	5/25	透明	長頸瓶	横城	?	10.8	3.3	-		
GL213	写真	文具	SM	5/25	透明	小笠内筒短瓶	横城	?	7.3	5.9	-	インク瓶?	
GL214	写真	薬品	SM	5/25	透明	小笠内筒短瓶	横城	百練り	5.8	2.7	-	アンブル	
GL215	写真	薬品	SM	5/25	透明	小笠内筒短瓶	横城	市川	5.5	2.1	-	アンブル?	
GL216	写真	化粧品	SM	5/25	透明	超小笠長瓶	ガラス	(スボイト付付き)	5.0	2.7	-	香水瓶?	
GL217	写真	薬品?	SM	5/25	透明	小笠長瓶	横城	?	6.2	2.6	-		
GL218	写真	化粧品?	SM	5/25	透明	小笠広口瓶	横城	?	7.5	3.8	-		
GL219	写真	アルコール	SM	5/25	赤	大型扁平長瓶	横城綾	キックアップ	26.9	7.3	-	ワイン瓶?	
GL220	写真	薬品?	SM	5/25	淡緑	内筒短瓶	横城	赤み	18.0	5.8	-		
GL221	写真	化粧品	SM	5/25	乳白	小笠四角十角瓶	横城	平塚分店	6.7	4.1	-	平塚買手商店	
GL222	写真	化粧品	SM	5/25	乳白	小笠広口瓶	横城	?	6.2	3.3	-		
GL223	写真	化粧品	F.J	5/24	黒	小笠四角瓶	横城	J字形ロゴ	5.5	3.8	-		
GL224	写真	化粧品	F.J	5/24	黒	小笠四角瓶	横城	AMURUPAYA りんご	5.3	3.7	-		
GL225	写真	化粧品	F.J	5/24	黒	小笠広口瓶	横城	縦線	3.5	4.8	-		
GL226	写真	化粧品	F.J	5/24	黒	小笠広口瓶	横城	?	3.3	4.9	-		
GL227	写真	化粧品	F.J	5/24	黒	小笠内筒短瓶	横城	ベークライト	三門隆	5.2	3.7	-	
GL228	写真	化粧品	F.J	5/24	黒	小笠内筒短瓶	横城	十字形 KSK TOKYO	6.0	4.0	-		
GL229	写真	化粧品	F.J	5/24	黒	小笠内筒短瓶	横城	月友	5.0	3.6	-		









## 第3章 調査のまとめ

### 第1節 遺構の特徴

#### A 各建物の規模

今回の調査で判明した建物跡は、女工寄宿舎8棟とその他建物6棟である。その中で建物本体の全体規模が確定できたのは、竹寮（東西59.4m 南北10.2m）・藤寮（東西37.5m 南北9.3m）・隔離室北棟（東西22.5m 南北7.4m）だった。また一部が判明したのは、萩寮（南北9.5m）・蕨撫子寮（南北8.7m）・菊寮（南北8.5m）・梅寮（南北9.5m）・仏間（南北12.6m）・教室（南北約8m）・隔離室西棟（東西7.4m）となる。

寮の南北幅は約10.3mと約9.4mが多い。また南北の間隔は、撫子・萩寮間11.8m、萩・竹寮間13.2m、竹・松寮間11.8m、教室・仏間間7.0m、仏間・梅寮間14.8m、梅・藤寮間14.2m、藤・百合寮間11.7mそして葛蒲・蕨撫子寮間は10m以上で、間隔は約11.8mがやや目立つ。

東西方向に整然と並んでいるように最終的には見えた建物群だが、微妙な規模差が存在したことになる。また性格の異なる隔離室北・西棟、仏間そして教室は、かなり異なった規模になっている。



完成した寄宿舎群（昭和13年頃）



蕨・撫子寮改築後（昭和45-48年、『紡績新町工場90年史』）

#### B 基礎構造

これらの建物は、基礎構造に大きな違いがあった。

レンガ積み基礎：壁基礎（レンガ8段以上、隔離室東棟のみ）と根太・柱基礎（レンガ5段程度、萩寮・竹寮・教室と隔離室西・北棟）に別れる。ほぼ全てのレンガ刻印は埼玉県深谷市の日本煉瓦製造で生産された右から左の「上敷免製」である（403点中401点）。前者に似た状態が、大正8（1919）年建築の『女工手寄宿舎浴室・結髪室設計図』（クラシエ3-10）に見える（レンガ積総段数20段）。白色耐火レンガは、基礎構造に使用されていない。

コンクリート基礎（断面台形根太・断面方形根太・角形柱・円形柱）：レンガが使われていないもので、菊寮・蕨撫子寮・藤寮・仏間で残っていた。教室の改築もこの方法でなされた。根太基礎は断面台形（菊・藤寮・仏間旧）から断面方形（蕨・撫子・仏間新）へ変わっている。前者は昭和10年頃建設の藤寮に始まり、後者は仏間増築の昭和27年以後の技法になる。

鉄筋コンクリート基礎：明瞭な例は大廊下の北東側で接する小建物だけである。

レンガ積みは大正14年頃の大増築時まで続き、昭和12年頃の菊寮建設時にはコンクリートに変わった。なお藤寮は竹寮などと同じ昭和2年頃の建物に見えるが、基礎構造は全く異なり菊寮と同じである。竹・萩寮のようなレンガは全く出土していないため、実際の施工は菊寮に近い昭和10年頃と考えられる。



隔離室東様のレンガ積み壁基礎



萩寮のレンガ基礎



菊寮のコンクリート基礎（台形断面）



改築重葺寮のコンクリート基礎（平形断面）

## C 排水路

断面 U 字形レンガ積みと土管列があるが、前者でも何らかの上部構造があった部分は土管列に換わっている。レンガ水路は、単純にレンガのみで構成されたものと内側三面をモルタル塗りしたものに別れる。大正 5 年頃に使用されていた可能性のある大廊下南端の SD46 は、レンガで蓋をされた最古の形態である。また撫子寮（大正 2 年以前建設）より古く作られていた排水路 3（SD37）も、レンガのみの U 字形である。モルタル塗りレンガ水路は、大正 9 年建設の隔離室北・西棟に見られる。また萩寮・竹寮など大正 14 年頃建設の寮群も、同様のモルタル塗りレンガ水路を伴っている。

無軸土管の古い例は排水路 1・3 の大口径や、隔離室北・西棟の小口径のものである。また萩寮や菊寮のモルタル塗りレンガ排水路と繋がった小口径の無軸土管列も見られた。一方明らかな施軸土管列は、昭和 40 年全面改築の葦・撫子寮の南北辺に沿った例である。排水路 2・4 も同様の施軸土管列である。



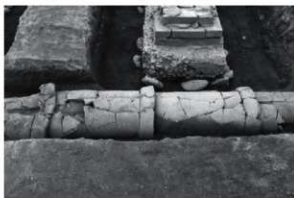
レンガ蓋レンガ積排水路（大廊下南端）



レンガ積 U 字形排水路（排水路 3）



レンガ積三面モルタル排水路（隔離室北棟）



無釉大型土管列（排水路3）



無釉小型土管列（萩寮）



施釉大型土管列（排水路2）

## D 便所と洗面所

寮建物と隔離室北棟・教室・仏間で各種便所を検出した。隣接する洗面所を確認した例も併せて見てみよう。便所の下部構造（便槽）は、基本的に次の3形態に分かれる。

埋壺式便槽：土製大甕を埋めたもので、隔離室北棟東端と仏間北辺中央で検出した。前者は4区画の中で外側に突出する中央2区画にのみ大甕が納入されていた。

集合便槽式：竹寮の東西端と教室東端で検出した。共に複数の区画の内側個室に接してモルタル塗りの深い長方形箱形便槽を設けている。竹寮のアーチ構造の両便所は北側に排水溝を伴う長方形空間が近接し、洗面所と考えられる。このレンガアーチは、工場の原料倉庫跡（大正7年頃）のものとかかなり類似している。



埋壺式便槽（隔離室北棟）



集合便槽（竹寮）

個別便槽式：藤寮と梅寮の各東端で検出した。前者は南北方向に並ぶ2個室ごと6区画の外側に、各モルタル塗り便槽が設けられていた集合方式からの過渡的形態である。後者はモルタル塗りの正方形完全個別8便槽が、中央の空間を挟んで南北方向に2列並ぶ。これらの便所に接して洗面所と推定される空間が北側に突出する。

明治40年代初め頃に最初の菰蒲寮が建てられた時、便所は恐らく埋糞を使った独立した建物だった。大正9年建設の隔離室北棟以降、便所は寮建物に付随することになった。これらの便所の形態変遷は、排泄物販売の効率化と関係した可能性がある。



過渡的個別便槽（藤寮）



完全個別便槽（梅寮）

## E 居室のあり方

建物の大半を占める寮は女工たちの居住の場で、その中心は集団生活を行なった居室である。その広さを畳枚数の近似値を探ると次のようになる。

教室（大正9年）：南北6.4m × 東西4.6m（9.0坪、18畳） 東西に押入れ部分（幅0.9m）

萩・竹寮（大正14年頃）：南北5.6m × 東西4.7m（8.0坪、16畳） 東西に押入れ部分（幅0.9m） 南側にテラス状部分（幅1.8m）

藤寮（昭和10年?）：南北5.6m × 東西4.4m（7.5坪、15畳） 東西に押入れ部分（幅0.9m）

梅寮（昭和12年頃）：南北約5.4m

菊寮（昭和12年頃）：南北5.6m × 東西4.4m（7.5坪、15畳） 東西に押入れ部分（幅0.9mと0.45m） 南にテラス状部分（幅1.0m）

撫子寮（昭和40年）：南北5.8mか（記録では10室） 南側にテラス状部分（幅0.9m）か

葦寮（昭和40年）：改築後の特定が難しい



萩寮居室（廊下側から）



菊寮居室押入れ（廊下側から）

レンガ柱基礎での柱設置位置のずれを考えれば、不鮮明な葦・撫子寮と梅寮も含めて、当初娯楽室だった教室を除き全居室は基準広さ15畳（葦・撫子の改築時広さ）の可能性が高い。これは、明治40（1907）年頃の女工募集要項『女工員の募りに応せらる人のしほり』（『錦紡新町工場90年史』）にも「二階建てで室々は皆同じ15畳敷であつて錠前附の押入を備へ」と明記されている。その両側に奥行き半間の押入れがあり、南側は葦・撫子寮以外幅1間程度のテラス状部分があった。また北側に幅1間の廊下があることも共通する。葦・撫子寮は、改築後に北側に廊下が移った可能性が考えられる。なお性格の異なる隔離室北棟（大正9年）の1部屋は、南北3.8m×東西2.6m（3坪、6畳）という狭い空間だった。



葦寮居室（テラス側から）



隔離室北棟居室群

## 第2節 遺物の特徴

### A 寄宿舎使用遺物とその他

検出遺構の大部分は掘削中に残った建物基礎等のため、廃棄場遺物を除き付記遺構名は出土位置を示すだけで遺構との直接関係は限られている。そのため検出遺構のほとんど全ては寄宿舎建物群の痕跡であるものの、出土遺物は必ずしも寄宿舎群で使用されたものであるとは断定できない。

調査範囲内で建てられた最古建物は撫子寮（明治40年代頃～大正2年建設）で、それより古い遺物は寄宿舎生活とは無関係になる。それらは官営屑糸紡績所創業（明治10年）以降の工場関連遺物（ア）と中山道新町宿関連の近世遺物（イ）に大別できる。撫子寮建設以降の遺物も、建物が昭和12年頃まで増築され続けた経緯を考えると同時代工場内の寄宿舎以外で使用された遺物（ウ）も当然含まれている。つまり寄宿舎での生活に関連した遺物以外に、3種類の遺物が混在している。

- (ア) 撫子寮以前の工場遺物：SU2の木紙栓牛乳瓶（GL162）が該当する。主にSU5・6と葛蒲寮北外側で出土した型紙刷染付磁器の多くも含まれるが、旧撫子寮建設時にも流通していたため全てではない。「越」字が見込に手描染付された飯碗（CR074）と茶碗（CR013）は、三越時代（明治20～35年）の食器の可能性が有る。ガラス瓶の一部も含まれると思われる。
- (イ) 近世遺物：近世陶磁は比較的多く発見されたが、明確な遺構は確認されない。ただ中山道新町宿の西端から僅か百mの距離のため、出土自体は理解しやすい。巴文枝瓦瓦当は現存する屑糸紡績所創業時建物に見られ、明治8年建設の富岡市葦塚製糸工場でも検出されているが、相当する初期建物跡は調査範囲で確認していないので近世遺物の流入として理解する。
- (ウ) 同時代の工場遺物：典型的なものは製糸器具関係で、それ以外は用途不明金属製品の多くと区局関係のガラス瓶が該当する。昭和34年に大食堂が旧製糸部工場跡に建てられ、寄宿舎用地で食事を取ることが原則的には無くなった。工場遺物とすべき、それ以後の食器の出土はない。

以上の3種類を除いたものが寄宿舎の生活遺物となるが、当然のように量的に多い陶磁器とガラス瓶を見るとほとんどが大正から昭和20年代までのものとなり女工数が多かった時期と重なる。

## B 廃棄場遺物

7ヶ所の遺物廃棄場（SU1・6・SX4）に廃棄された遺物の出所と廃棄年代を推定すると、次のようになる。

SU4（蕨寮便所より旧）：寄宿舎内食堂から昭和10年頃に廃棄

SU3（隔障室境界側より新）：寄宿舎内食堂と製糸部工場から昭和12・13年から16年頃までに廃棄

SU1（排水路3より新）：寄宿舎以外から昭和16年から21年頃までに廃棄

SX4（重複なし）：寄宿舎から第二次大戦後（昭和20年代）に廃棄

SU2・5・6（蕨寮改築以前）：寄宿舎及び工場内施設からが混じり昭和40年以前に廃棄

寄宿舎内からの廃棄物は、最も古い蕨寮・撫子寮関係がSU2にある程度見られる。SU5・6も含めて製糸部工場関係（大正10年操業開始）遺物も含むが、それらは昭和40年の蕨寮改築時に混入したと考えられる。SU5で大量出土のコバルト色円筒形短頸瓶は、旧蕨寮西側階下の部屋が「若草クラブ」として使われた頃に貯蔵されていたが、改築時に古い遺物と混じったと思われる。寄宿舎内の食堂は大正8年頃に蕨寮の南西から南に移転後移築されていないが、何らかの事情でのそこからの食器大量廃棄がSU3・4である。大多数は雪の下文など瀬戸美濃産銅版転写型成形皿と皿だった。一括廃棄で最も新しいSX4は、女工数減少に伴う可能性がある。工場内施設は、西側隣接地にあった社宅群を壊しての隔障室や製糸部工場建設、また同工場での頻繁な製糸機械改変に伴うと考えられる。顕著な例のSU1には、推定寄宿舎関係遺物はほとんど含まれていない。食堂で使用された食器は美濃窯業（岐阜県瑞浪市）製の飯碗が第二次大戦前後の統制時代まで続いたと思われるが、大量出土はなかった。なお美濃窯業製品は飯塚西金井西II遺跡の確水社本社直営工場跡（操業期間1931-42年）でも出土し、当時の普遍的工場用食器だったようだ。

## C 製糸器具

大正10年から昭和31年まで、西側隣接地に製糸部工場が操業していた。特に昭和10年代前半まで木製座繰機から増沢式多条機まで繰糸機の交換が頻繁に行われたため、寄宿舎の生活とは無関係な製糸器具遺物が次のように比較的多く発見された（東町Vや飯塚西金井II出土例と同種）。

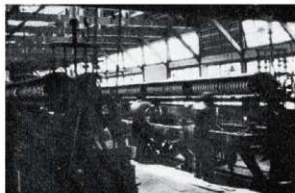
繰糸機関係（集緒器・目皿・フリカギ）、煮繭機関係（煮繭鍋）、揚げ返し機関係（切断計数器）

他に金属製品中にも含まれている可能性があるが、数が最も多いのはほとんどが瀬戸美濃産白磁の集緒器で合計20点を確認した。また信楽製煮繭鍋は兼業式を含む4個体を検出し、遺物廃棄場SU1で出土した例（FL12）はほぼ完形で木製制御棒まで残っていた。SU1への廃棄時期は上記のように第二次大戦中と考えられるため、この分業式煮繭鍋はその頃まで使用されていた可能性が高い。他に大量出土の円筒形短頸瓶は、後述のように繰糸作業での皮膚病治療用の木酢液容器になり製糸遺物にも該当する。

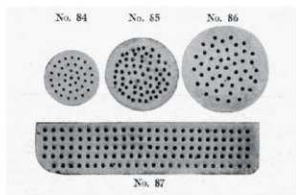
今回の調査地は製糸工場跡自体ではなく、隣接した寄宿舎用地だった。しかし製糸関係遺物がこのように出土したことは、今後の製糸業の物的要素を考える上で、少なくとも製糸器物の広域的流通検討の必要性を明確に示している。



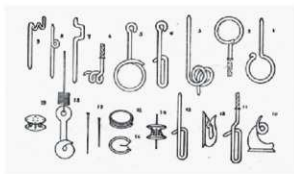
木製5条兼業式繰糸機（『満洲安昭和8年型録』）



昭和9年設置増沢式多条繰糸機（『縫紡新町工場90年史』）



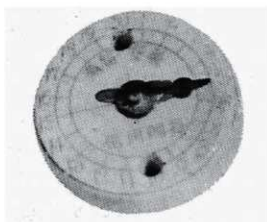
練糸鍋目皿 (満留安昭和8年型録)



練糸機フリカギ・集練器など小物部品 (同前)



分業式煮騰鍋 (同前)



揃げ返し切断計数器 (同前)

また製糸部の活動と寄宿舎の増築を見ると、新町工場製糸部は昭和7年には全国の鐘紡工場中で最大規模となり、昭和14年に当時最新鋭の増沢式多糸練糸機360台を備え、片倉富岡製糸場に次ぐ全国2位の量となった。この間に寄宿舎は8棟増築されて、最終的な姿を完成させた。紡績部の女工増加が400人ほどに対して製糸部はゼロから600人以上増えたので、新設寮の多くは製糸部女工のためだった『四季の糸』によれば、第二次大戦前後は松・竹・梅寮が製糸部女工用と言える。

## D ガラス瓶類

遺跡内全体から大量のガラス瓶が出土したが、種類は次のように区分できる。

アルコール瓶 12点 (SU1で4点) : ビール瓶 3、ワインボトル 5、一升瓶 1、撫で肩瓶 3

飲料瓶 20点 (SU3で4点) : 牛乳瓶及び機械栓 10、サイダー瓶 2、円筒形瓶 3、撫で肩瓶 5

薬品瓶 89点 (SX4で各種23点 : SU5で円筒形短頸瓶5種48点) : エンボス病院名 2、薬品名 17、目盛り線のエンボス 11、ロゴ製薬会社 12

化粧品瓶 151点 (SX4で各種36点 : SU3で各種14点) : エンボス会社名 44、商品名 14

食器 10点 : 輝青・輝緑色切子状合子 4

文具 16点 (SX4で各種6点) : インク瓶 14、エンボス商品会社名 5

家具 1点 (GL291掛鏡) 玩具 1点 (GL185コマ) 不明 1点 (GL137広口十四角形瓶)

アルコール瓶では赤玉ポットワイン (GL236) は明治40 (1907) 年に壽屋洋酒店 (現サントリーインターナショナル) の鳥居洋治郎氏が発売したもので、現在でも販売されている。本品は大正10年以降のものであろう。GL125はキリンビールで、キリンビール登録KB商標のエンボスが入っている。昭和20年から30年代のものであろう。GL173は大日本麦酒製のもので、大日本麦酒は明治39 (1906) 年に大阪麦酒 (アサヒビール) ・日本麦酒 (恵比寿ビールを製造していた) ・札幌麦酒 (サッポロビール) が合併した会社で、昭和初期から昭和10年代のものであろう。

飲料瓶では牛乳瓶 (GL001・022・098・135・143・162・174B・259) がある。GL001は全乳一合入東京第一ミルクプラント和田牛乳店とエンボスが入っている。和田牛乳店は明治創業の牛乳店で、大正15年にアメリカから低温殺菌機を輸入し、東京市乳業界の中核をなしたが、昭和8年に明治乳業に吸収された。GL022は明治乳業の牛乳瓶で広島硝子工業製で、昭和61年から平成5年頃のものである。GL098とGL135はそれぞれ開口部から、昭和30年代と昭和20年代のものである。GL143は高温殺菌全乳一・八分とエンボスが入っている。GL162は特別上等全乳 搾取所愛光舎販賣所門奈とエンボスが入っている。これは埼玉県大宮にあった門奈商店で販売されたもので、大正時代に使用されたものであろう。GL040は明治スカットと印刷されており、昭和40年代のものである。GL049は日本麦酒釀泉株式会社登録商標6とエンボスが入っているサイダー瓶で、日本麦酒釀泉株式会社は三ツ矢サイダーの前身の企業である。GL071はペプシコーラの瓶で、昭和45年から昭和55年頃のものである。GL063は大正製菓の栄養ドリンクで、TAISHO PHARM, CO150Hのエンボスが入っている。GL095は栄養ドリンク剤の瓶とおもわれる。

薬品瓶は多数出土しており、GL002は白元の蛍光染料である。GL003は神薬資生堂製 SHISEIDO TOKIO DISPENSARYのエンボスが入っている。GL008はコバルト色のガラス栓がついたもので、中に液体が残存している。底部に★のエンボスが入っている。GL014・171は神薬資生堂製 TOKYO SHISEIDO DISPENSARYのエンボスが入っている。GL033はロート製薬製のメンレータム瓶で、METUM HANKYU KYOYEIのエンボスが入っている。GL060・111は星製菓の薬品瓶で、★Hのエンボスが入っている。GL078は保壽堂製の神薬瓶で保壽新薬保壽堂製Mのエンボスが入っている。GL083は皮膚メンスワー保健薬のエンボスが入っている。GL088・089・090・210・238・245・281は目盛りがエンボスされた薬瓶で、GL089には鐘紡新町工場医局のエンボスが入っている。GL281には植原医院のエンボスが入っている。GL121・176は神薬のエンボスが入っている。GL131は養命酒のエンボスが入っている。GL029・035・093・105・149・186・214・215・238・245はアンプルの瓶である。GL149・214・238・245は目盛りがエンボスされ、GL215は市川のエンボスが入っている。GL246は良薬□□苦し▽三式錠のエンボスが入っている。GL247はWAKAMOTOのエンボスが入る整腸剤の瓶である。GL132はロート製薬の目薬で、EYE LOTION ROHTOのエンボスが入っている。

化粧品瓶も多量に出土しており、寄宿舎内の女工の生活が伺える。GL007・230・231・241はTSUKIBIJUN月美人のエンボスが入っている。GL018・020・102・148・221は平尾賛平商店の化粧品で、CREME LAITのエンボスが入っている栓。GL020はSAMPEL.HIRAO"LAIT"TOILET WATERのエンボスが入っている。GL102はレートフード LAIT FOODのエンボスが入っている。GL148・221は平尾分店のエンボスが入っている。GL047・048・172・250はヘチマコロン瓶で、GL009は美顔水、GL047・048・250は天野源七商店のヘチマコロンのエンボスが入っている。GL024・101は現マダムになっている金鶴香水と丹頂クリーム瓶で、GL024はKINTSURU OSG、GL101はTANCHO VANISHING CREAMのエンボスが入っている。GL027・232は安藤井筒堂の香水瓶であらう。IZUTSUとANDOのエンボスが入っている。GL045・118は、みや古染のエンボスが入った髪染め瓶である。GL086はポマード瓶で、○の中に高、純植物性ポマードのエンボスが入っている。GL107は堀越嘉太郎商店のボーカ液堀越60とエンボスが入っている。GL161は櫻香本舗守田謹製のエンボスが入った香水瓶。GL180は桃の花クリームで、安藤井筒堂東京 PEACH FLOWER もゞの花のエンボスが入っている。GL183・273ウテナクリーム瓶でウテナのエンボスが入っている。GL240はジュジュ洗顔クリームで、Jujiのエンボスが入っている。



茨城県石岡市園分遺跡出土の「みや古染」瓶 (玉里村立史料館 2001)



化粧品瓶 (同前)



文具類はインク瓶とペン先や糊瓶が出土している。GL013・039・059・080・092・110・189・213・252・253・268・289・290 がインク瓶である。GL013 は TRADE MARK METORO、GL039 は クリヤー・インキ、GL092 は M、GL110 は PILOT MADE IN JAPAN、GL253 は 東京大國文具、GL290 は RIGHT INK 20Z MADE IN JAPAN のエンボスが入っている。GL115 は糊瓶で、ヤマト糊のエンボスが入っている。GL292 はペン先である。

GL012 は金平糖の入っていたガラス瓶である。

(以上の中で GL014・096・102・107 は高崎市東町V遺跡で、GL118・GL223 は神楽製糸石岡工場跡の茨城県石岡市国分遺跡で類似した同種のものが出土している。)

	円筒形瓶	円筒形短頸瓶	長頸瓶	楕圓瓶	多角形瓶	広口瓶	筒状瓶	扁平瓶	脚型瓶	その他	枚	小計
化粧品	22	0	9	0	15	41	0	33	18	2	11	151
薬品	30	18	9	0	3	4	3	14	0	3	5	89
飲料	3	0	0	27	0	0	0	0	0	0	2	32
文具	7	0	0	0	5	1	0	2	0	1	0	18
食器	0	0	0	0	0	1	0	0	0	9	0	10
その他	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	4
小計	62	18	18	27	23	48	3	49	18	18	18	302

表1 報告ガラス瓶類の種類と形態

## E 近現代陶磁器類

今回報告した陶磁器類の中で近現代のものは、233点となった(他に中世土器1・近世陶磁28・椀瓦10・土管3)。これらを器種と技法別に分類すると、次表のようになる(多数出土したものは1点しか報告していないため、出土量とは一致しない)。

	皿	小皿	深皿	鉢	平碗	丼	飯碗	茶碗	湯呑類	壺	薬物	急須類	銅・鉦皿	便器	他	小計
手描	6	3	2	0	0	1	8	4	1	2	0	3	0	0	1	31
型紙刷	5	8	0	0	0	0	12	1	1	0	3	0	0	0	0	30
銅版転写	11	4	0	1	0	4	27	10	2	1	3	0	0	1	0	64
吹絵	0	0	0	0	0	0	5	2	0	1	0	0	0	0	0	8
ゴム印	0	0	0	1	0	0	1	0	2	0	2	0	0	0	0	6
プリント	2	0	2	1	0	2	5	2	4	0	0	0	0	0	1	19
緑胎	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	3
統制番号	3	1	0	1	0	1	0	2	2	0	0	0	0	0	6	16
戦後プリント	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	4
青磁白磁他	1	0	1	3	0	0	0	1	1	1	1	0	0	6	4	19
陶器	0	0	0	2	5	0	0	2	5	1	0	6	4	0	5	30
土器等	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	3
小計	28	16	5	9	5	9	60	24	20	6	9	9	4	8	21	233

表2 器種・技法別の報告近現代陶磁器類(点数)

この分類で興味深いのは、いくつかの器種のものが特定の技法に集中する傾向にあることである。最大量を占める飯碗では銅版転写と型紙刷製品が3分の2近くで、茶碗も銅版転写が4割以上になっている。洋皿を含めた皿類も、型紙刷と銅版転写が大きな割合である。一方、何らかの副菜容器と推定される平碗(蓋付)は、全てが産地不明の軟質の陶器だった。他に湯呑・急須類そして鍋・鉦皿が、陶器中心である。

そのため湯呑を除く基本食器の碗皿は各時期の主要な技法で生産された磁器が使われたが、その他の急須類や調理具などの器種は陶器が占める割合が高かったことになる。1900年代頃までの型紙刷製品の時期には、調査地に寮はまだ存在せず社員宅群があった。また1930年代からの吹絵などの技法による基本食器が比較的少ないことは、食堂での食器の改変に伴う可能性が高い。実際に銅版転写の同一種類が大量廃棄されていたSU3・4以外で吹絵以降のものが同種多数確認されなかった事実は、それらが最終的に食堂で使われ続けていたことを想定させる。

### 第3節 女工寄宿舎の生活

若草寮寄宿舎用地での生活は、調査対象外の明治39(1906)年頃建設の葛蒲寮に始まった。そして鐘紡が昭和50(1975)年に新町工場での紡績業を停止した数年後に、最後に残っていた藤岡高校定時制に通う女工たちがいなくなった。寄宿舎群は、この約70年間の女工たちの生活の場であった。そのあり方を調査成果からまとめてみたい。

#### A 部屋の広さと建物の特徴

##### 共同生活空間と居住密度

明治末から昭和12年頃まで(昭和40年改築含む)各時期建築の寄宿舎建物規模や部屋数・便所形態は異なるが、女工が生活した居室は15畳の広さである。しかし昭和15～23年に製糸部で働いていた三木良の回想録『四季の糸』によれば、多くは草笥4棟と火鉢(p.96写真では炬燵)があるため実際の生活空間は12.5畳の広さだった。

基本的に南側に暖房要素でもあるテラス状空間、そして片側に奥行き半間の押し入れと床間を伴っていた。この共通する居室の住環境を考えるため、居住密度を検討してみよう。

		製糸部	紡績部	女工合計	寄宿女工	部屋数	総畳数	室人数	密度
1911	明治 44	0	228	228	158	14	175	11	1.1
1917	大正 6	0	477	477	334	25	313	13	0.9
1923	大正 12	230	687	917	460	40	500	12	1.1
1925	大正 14	484	751	1,235	853	98	1,225	9	1.4
1931	昭和 6	484	777	1,261	1,009	98	1,225	10	1.2
1937	昭和 12	605	777	1,382	1,106	120	1,505	9	1.4
1956	昭和 31	45	777	822	658	85	1,068	8	1.6
1959	昭和 34	0	790	790	632	85	1,068	7	1.7
1965	昭和 40	0	790	790	632	96	1,201	7	1.9

表3 鐘紡新町工場の推定女工数と居室密度(人数太字は確実度高い数値)

この地域の最初の寄宿舎葛蒲寮建設以後の寄宿女工数推定可能な年の実質居住面積は、『鐘紡新町工場90年史』とクラエーフーズ保存図面に『四季の糸』の記録での居住人数を考慮すると上記表3(1部屋12.5畳で計算、寄宿女工割合は明治44年のみ実数、密度は12.5畳を室人数で割った数値)となる。資料に誤記が多く寄宿舎に実際に住んだ女工数推定は難しいが、寄宿女工1人当たり畳数(密度)が大正12(1923)年の製糸部工場操業開始までのかなり狭い環境から、大正14(1925)年以降の寄宿舎増設で徐々に改善された傾向がみられる。そして製糸部が操業停止した昭和31(1956)年からは、1人当たりの空間が広がったことになる。ただし最終建設の菊・梅寮も20年近く経ち全体に老朽化が進み、実際の居住可能畳数は表3数値より少なかっただろう。

昭和40(1965)年、居住されていた最も古い董・撫子寮が取り壊されて改築された。この頃働いていた新鐘舎の元女工さんの証言では、1部屋最大で7人ほどとのことだった。それは上記表の推定と合う。だが新しい董・撫子寮の平形コンクリート基礎は、昭和12(1937)年頃の藤・菊寮の台形コンクリート基礎に比べ脆弱に感じられる。棧瓦からスレートなど建材の軽量化もあるが、居住密度減少と無関係ではないだろう。さらに彼女たちの体格の変化も考慮するなら、居住人数減は大きな要素と考えられる。なお調査対象地ではない桜寮も、紡績業廃止直前の昭和46-47(1971-72)年に全面改築された。建物老朽化の激しさは、事業の見直しとは無関係だったことになる。

##### 廊下の役割

各寄宿舎は、テラス状部分を南側として押し入れを両側に備えた居室が東西方向に並び、それらを繋ぐ幅1.8mの長い廊下がそれぞれの北側を貫いていた(改築前の董・撫子寮のみ南側)。そして竹寮の西端から葛蒲寮の南側まで50m以上直線で南北に伸びる大廊下(幅2.7m)など、南北廊下と繋がっていた。寄宿舎用地入り口に近いその南端からは、最終的に食堂の北側に沿って製糸部や紡績部の工場まで東西走向の廊下で結ばれた。



片倉製糸熊谷工場女工客宿舎の廊下  
(昭和40年代、片倉シルク記念館)



昭和初期製糸工場客宿舎の大廊下例 (『満蒙安昭和8年製録』)

結果的には居室という「私的」空間から、天候に関わらず直接工場という「公的」空間へ移動できたのである。『四季の糸』によれば、製糸部より勤務時間が短い紡績部の女工が、そこを分担して拭いていた。その結果、昭和40年代に勤務の元女工さんたち(新婦会会員)は、「黒光りしていた」と大廊下のことを語った。昭和32年に改正された3交替の勤務時間でさえ午前5時から午後10時まで、数多くの女工たちがこの大廊下を行き来していたのである。

休日の敷地外への外出や、昭和34年開始の県立藤岡高校定時制への集団通学など他への移動はあった。だが居室出入口は各寮の廊下のみのため、洗面等も含め廊下の往来が必要になる。そのため学校建物と同じように、共有空間としての廊下の役割はかなり重要だったと言える。

## B 遺物から見た女工の生活

出土遺物、特に陶磁器の多くは、女工の個人所有物ではない。だが最も直接的に1,000人近く(昭和12年前後)住んでいた女工たちを示す遺物が、名前線刻櫛と化粧品瓶類である。

### 名前線刻櫛

63点の調髪具は、櫛38点・各種髪留め24点・手鏡1点に分かれる。櫛では8割強の31点が針状の道具でなされた何らかの線刻が確認でき、うち29点は所有者名がその一部と考えられる情報が判読できた(p.66-68図・p.120-122写真)。それらは書き方から、次のように区分できる。

- 姓+名：10、番号+(姓)+(名)：4、地名+姓+名：4、寮名+部屋名+(姓)+(名)：2、
- 所属部所+姓+名：2、姓：4、名：3、判読不能：2

姓名を記すのが基本で、さらに番号・地名(出身地)・寮名・所属部所のような情報も入れたものも多く見られる。美原村(HT10)・高山村(HT15、表紙)は近隣の現藤岡市になり、それぞれ1954年まで存続した。番号は部屋番号と思われる、またセイレン(HT18・36)とは紡績の最初工程の精練だろう。姓のみなどの短いものも、本来長い表記の断片の可能性もある。また刻みが容易のためかカタカナが多く、さらに姓名全てをカタカナにしたものも3点ある。

大正5年頃には浴場に近い菫菴寮の1室が結髪室とされ、大正9年に浴場へ附設で同名の空間が確保されていた。このような櫛への所有者情報の線刻から、女工たちにとって結髪がかなり重要なプライベート行為だったと考えられる。なおより線刻が容易に思われる大型の髪留め6点には、全く線刻は確認できなかった。透彫等の装飾があるため、所有者の識別が簡単だったためかもしれない。また線刻のある櫛は鐘紡新町工場と直接関係のない小口組の高崎製糸工場跡である東町V遺跡でも出土しているので、女工たちの普遍的な行為だった可能性が想定できる。

#### 化粧品瓶・薬品瓶など

ガラス瓶の半分を占める化粧品瓶と飲料瓶・インク瓶のほとんどは女工たちが使ったものと考えられる。報告した化粧品瓶は、エンボスより次のように区分できる。

整髪料（ボマード・染粉・香油）：7点、洗顔クリーム：10点、洗顔水（コロン等）：10点

大部分の瓶はエンボスがないため、同種の内容物はさらに多かったことは間違いない。遺物廃棄場SU2・3・5から出土した香水瓶の可能性の大きいものは女工生活とは無関係だったと推定されるが、同型瓶が複数出土（報告は1点のみ）している化粧品関係瓶の多さは彼女たちの生活を彷彿とさせる。なお判明している化粧品製品の販売時期は大正4年から戦後直後ほどで、寄宿舎の存続時期と大きな差はない。

SU5大量出土の円筒形短頸瓶は、残存液体分析結果（p.97）より木酢液容器と考えられる。『四季の糸』も記すように木酢液は皮膚病治療に使われ、大正5年頃から温湯中での指作業の繰糸労働で皮膚疾患が訴えられていた。出土量の多さから、製糸部で働く女工に要治療者が少なくなかったことになる。SU5出土薬品瓶全体から、戦後に「若草クラブ」になった菫寮階下は、それ以前に1室が木酢液瓶など医薬品の保管用に使われていたことになる。

飲料瓶は牛乳が最も多く、それにサイダーそしてコーラまでがあった。年代的には昭和初期から1990年代初めまで、多くは女工が使ったものである。最新のもの（GL022）は食品工場へ転じた後も、寮建物が使われていた可能性を示している。またインク瓶の量も少なくない。そのうちのSX4出土の5点と他の遺物廃棄場以外出土の6点は、寄宿舎内で女工たちが使った可能性も十分にあるだろう。

## C 隔離室

隔離室という建物名は、『鐘紡新町工場90年史』には全く登場しない。寮寮建設で壊されて以降、完全に忘れられた存在だった。しかし今回確認した大正9年建設の3棟以前にも、最も古い菫菴寮の南側に規模の小さい同名建物がそれ以前の建物配置図に記されている。

#### 構成と機能

今回確認の隔離室はそれまでと異なって建物3棟で構成されただけでなく、北側の温井川端まで広い長方形用地がレングラで囲まれた。その結果、大正14年頃に萩・竹・松寮が東側に建設された時点でも、それらの寮の生活とは文字通り隔離された空間となった。

3棟の中で僅かな部分しか残っていなかった東棟の役割は明確ではないが、唯一地下深い位置に基礎を持つレングラ壁建物であるため何らかの倉庫的な機能が想定できる。一方、六畳間が3室ずつ中央廊下を挟んで東西に並ぶ北棟は、「隔離された」女工の病室であることは間違いない。中央廊下と接続する南北に長い西棟は南端に入り口状突出部を持ち、中央東側のやや広い空間と西側の細長い空間がそれぞれ診察室と厨房の補助室ではないかと推定される。

#### 収容能力と役割

北棟の収容能力は、1人一畳とした場合の最大数で36人となる。大正9年の女工数は約630人だが、製糸部工場操業開始の翌年には約820人になった。この女工数の増加の前提で建てられた可能性が高く、収容能力は総数の4%強となる。当時の一般的状況から結核罹患者の隔離が想定できるが、この予想最大罹患患者数の多寡は判断しにくい。ただ北棟から大正ロマン的な雰囲気を見せる大型装飾髪留め（HT40、表紙）が出土したことは、興味深い。

## D 小結

以上の調査成果から、大正以降に鐘紡新町工場寄宿舎で生活していた女工たちは、一般的なイメージの『女工哀史』的な姿とは異なっていたと思われる。居住密度は継続的な増築にも関わらず決して十分ではなかったが、要隔離女工の存在や製糸部工場の繰糸労働での皮膚病（『四季の糸』74・75頁、シャル 2020 の218-220頁）などの職業病罹患者が相当数いた可能性を告げたのは、それらへの対処の痕跡だった。

経営者が大企業鐘紡のためかとは判断できないものの、そのような状況から物質的環境が全て極端に劣悪だったとは考えにくい。そして大量の化粧品使用や櫛への名前の線刻に示されるように、昼夜を問わず会社環境の共同生活の中にあっても彼女たちが多少なりとも自らを主張しようとしていた事実を知ることができたのは大きな成果だった。似た遺物が高崎市東町V遺跡や茨城県石岡市国分遺跡でもあることは、企業を超えた女工生活の普遍性かもしれない。



昭和40年改築の重・櫛子寮（『鐘紡新町工場90年史』）



ある女工寄宿舎（櫛子寮か、同前）



女工食堂（昭和30年代か、『鐘紡新町工場90年史』）



寄宿舎内小学校（同前）



ある寮の2階外側（『鐘紡新町工場に誇りあり』）



ある寄宿舎居室での女工たち（同前）

# 付章 新町戸崎遺跡 2 出土ガラス瓶内液体の成分分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

## 1 はじめに

高崎市新町に所在する新町戸崎遺跡 2 より出土したガラス瓶内の液体について蛍光 X 線分析を行い、その成分を検討した。

## 2 試料と方法

分析対象は、女工寄宿舎萩寮の南東部分で出土したガラス瓶 (GL008) 内に残存していた液体である (図版 1-1)。ガラス瓶は、濃いコバルトブルーの大型円筒形短頸瓶 (高さ 20.8cm、底径 6.8cm) で、底部に五稜星のエンボス加工がされている。また、これと同形同色のガラス瓶約 50 本が、30m 西の遺物廃棄場 SU5 で出土している。時期は、大正 10 年から昭和 40 年までの間とみられている。

分析対象の液体の入ったガラス瓶は、摺合せのガラス栓がされ、容量の 20% 強ほどの液体が残存していた。なお、寄宿舎のはずれには薬局もあり、「薬局」と書かれた瓶や、目盛り入りの薬瓶なども出土している。そのため今回分析対象となった液体も同型の瓶が多量に出土している状況などから、薬局で多く消費されたであろう医療用消毒薬のヨードチンキである蓋然性が高いとみられたため、蛍光 X 線分析を実施して検討した。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1000  $\mu$  A のロジウム (Rh) ターゲット、X 線照射径が 8mm または 1mm、X 線検出器は SDD 検出器である。また複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することで S/N 比の改善が図れる。なお、検出可能元素はナトリウム (Na) ～ウラン (U) であり、有機物の主成分である炭素 (C) や酸素 (O) などの軽元素は検出できない。

ガラス瓶より液体を全量取り出し、その一部をマイラーフィルムを張った試料容器に入れ、大気環境下で測定を行った。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが 15kV (一次フィルタ無し・Cl 測定用)・50kV (一次フィルタ Pb 測定用・Cd 測定用) の 4 条件で、測定時間は各条件 100s、管電流自動設定、照射径 8mm に設定した。

## 3 結果

図版 1-2 に、ガラス瓶より取り出した液体全量を示す。約 180ml の褐色の液体で、時間を置くくと淡褐色の上澄みと濃褐色の沈殿物に分離した。図版 1-3 に、上澄みと沈殿物、比較試料として用意した希ヨードチンキ (健栄製薬株式会社製) を示す。

上澄みと沈殿物、希ヨードチンキの蛍光 X 線分析により得られた蛍光 X 線スペクトルを図 1 に示す。なお、アルゴン (Ar) は大気由来の元素である。

上澄みからは、リン (P)、塩素 (Cl)、アルゴン (Ar)、カルシウム (Ca)、鉄 (Fe) のピークが検出された (図 1-1)。沈殿物からは、リン (P)、アルゴン (Ar)、カルシウム (Ca)、鉄 (Fe)、臭素 (Br)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) のピークが検出された (図 1-2)。比較試料の希ヨードチンキからは、リン (P)、アルゴン (Ar)、カリウム (K)、臭素 (Br)、ヨウ素 (I) のピークが検出された (図 1-3)。特にヨウ素 (I) のピークは極めて明瞭であった。

## 4 考察

蛍光 X 線分析の結果、上澄み、沈殿物ともにヨウ素 (I) は検出されなかった。念のため、水で溶いた片栗粉に各試料をスポイトで滴下してみたところ、希ヨードチンキ試料は青紫色に染まり、ヨウ素デンプン反応が確認されたのに対し、ガラス瓶から取り出した液体は、上澄み、沈殿物ともに色の変化はなかった (図版 1-4)。以上の結果より、ガラス瓶内の液体は、予想とは異なり、ヨードチンキである可能性が極めて低い。

上澄みは、青色のシリカゲルを浸漬したところ、試料が淡褐色のためわかりにくかったが、青色が失われて色が変

化した。シリカゲル中の塩化コバルトの反応より、上澄みは水を含むと判断でき、おそらくは水を主とした液体と推定される。なお、上澄みの水素イオン濃度 (pH) を pH 試験紙で測定したところ、約 2 ~ 3 を示した (図版 1-5)。

一方、沈殿物は水に溶けづらい粘度の高い液体で、エタノールには容易に溶けた。また恒温乾燥機で 105℃ で一晚乾燥させたところ、濃褐色の残渣が得られた (図版 1-6)。この残渣は、常温では硬化しているが、105℃ 下では軟化した。以上、濃色の液体で水より比重が重くて溶けにくく、有機溶剤に可溶で乾燥させた残渣は高温で軟化し、蛍光 X 線分析では特徴的な元素は検出されないといった特徴より、タールやピッチの類などが推定される。

以上のような上澄みと沈殿物を持つ物質として、木酢液が考えられる。木酢液は、狭義には製炭など木材の乾留で得られる液体生成物の上澄み (粗木酢液) をさらに蒸留精製したものであるが、ここでは広義に上澄み (粗木酢液) と沈殿物 (木タール) の分離前の、木材の乾留で得られる液体生成物も含む。木酢液は、多いと約 200 種類もの化合物を含み、有機化合物の主成分は酢酸で pH は 2 ~ 3 程度を示す (炭やきの会編, 1991)。市販の木酢液 (中川屋製中川屋の木酢) の、外観と 105℃ 乾燥後の残渣を図版 1-7、1-8 に示す。入手した市販の木酢液と比較すると、今回の試料は赤みが弱く燻臭よりも腐敗臭が強いなど異なる点もあるが、これは原材料や抽出条件や経年変化による違いと考えられ、pH や残渣の特徴はよく似ていた。木酢液は、過去には医療用、食品添加用、工業原料、脱臭剤、農業原料など、様々な用途で利用されてきた。今回の新町戸崎遺跡 2 においては、皮膚への負担も大きかったであろう製糸工場の女工たちの皮膚治療薬として、木酢液が薬局で多く使用されていた可能性が考えられる。

## 5 おわりに

新町戸崎遺跡 2 より出土したガラス瓶内の液体について、成分を分析した結果、予想されていたヨードチンキではないと確認された。蛍光 X 線では特徴的な元素は検出されず、物理的な特徴から木酢液の類である可能性がある。

### 引用・参考文献

- 馬淵久夫編 1994 『元素の事典』 30p, 朝倉書店
- 中井 泉編 2005 『蛍光 X 線分析の実際』 242p, 朝倉書店
- 炭やきの会編 1991 『環境を守る炭と木酢液』 206p, 家の光協会

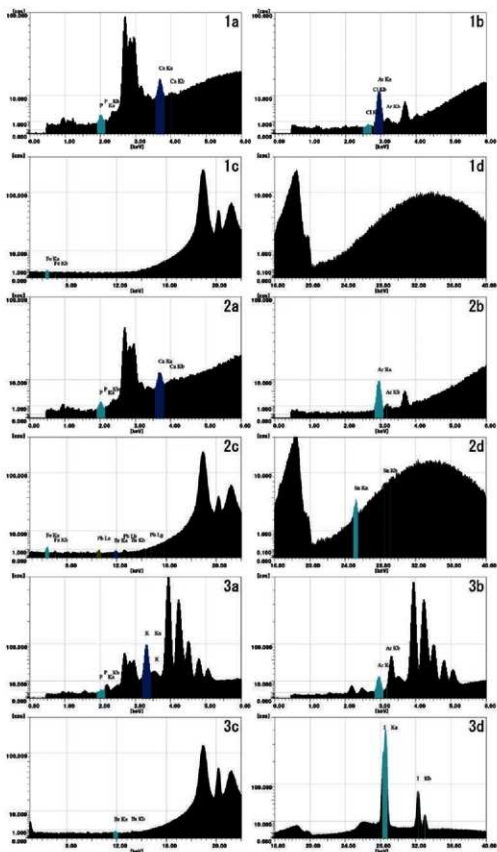
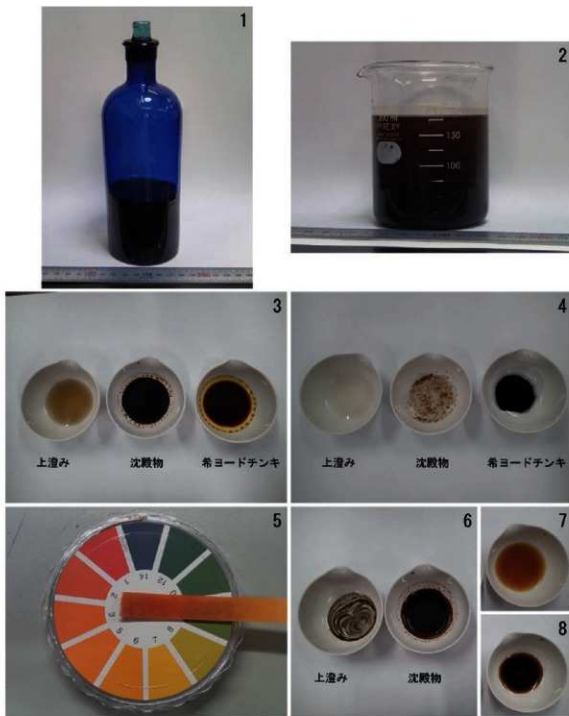


図1 蛍光 X 線スペクトル (1. 上澄み、2. 沈殿物、3. 希ヨードンキ)

a. 15kV・一次フィルタ無し b. 15kV・一次フィルタ Cl 用 c. 50kV・一次フィルタ Pb 用 d. 50kV・一次フィルタ Cd 用





図版 1 ガラス瓶内液体の成分分析

1 分析対象ガラス瓶内液体 2 取り出した液体 3 各試料の外観 4 水溶性片栗粉に滴下した試料  
 5 上澄みの pH 6 105℃乾燥後の残渣 7 市販木酢液の外観 8 市販木酢液 105℃乾燥後の残渣

## 空中撮影写真



萩寮跡（中央手前左）上空からの旧鐘紡新町工場域鳥瞰（2020年8月27日）



調査地点北側の旧中山道：右側が旧新町宿（2020年8月27日）



調査地点上空より南西の高山社方向遠望（2020年9月30日）



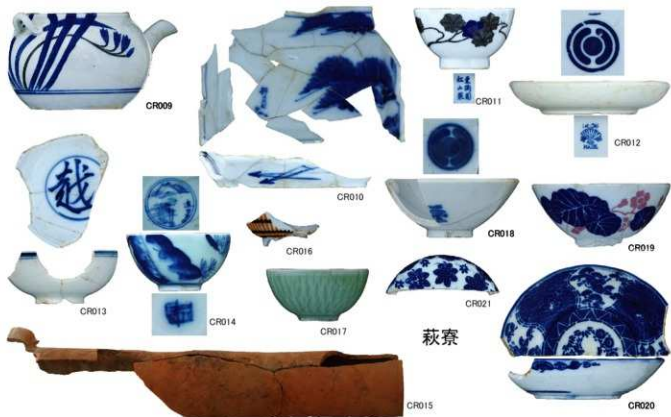
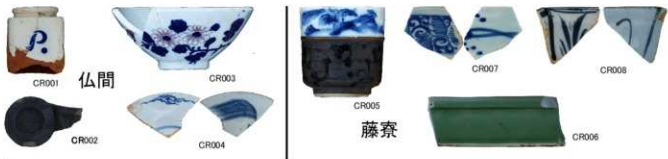
南東からの板倉跡・重撫子倉跡・梅倉跡・仏間跡・教室跡（2020年9月30日）



阿離堂北棟と菊寮北西端 (2020年12月3日)



竹寮跡上空から西側の富岡製糸場方向遠望 (2021年1月6日)



排水路 3





CR034



CR035



CR036



CR037



CR038



CR039



CR040



CR041

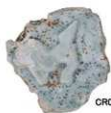


CR043

菊寮



CR042



CR044



CR045



CR046



CR047



CR049



CR048A



CR048B



CR050



CR051



CR053



CR054



CR056



CR057

隔離室



CR052



CR055



CR058



CR059



CR061



CR063

教室



CR060



CR062



CR064

松寮



CR065



CR066



CR069



CR067



CR068



CR070

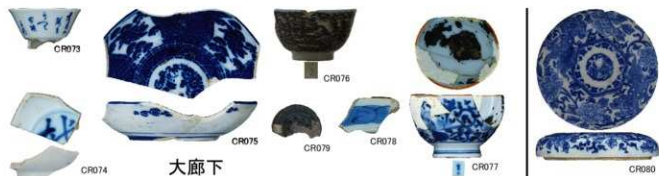


CR071



CR072

撫子寮



竹寮西



CR106

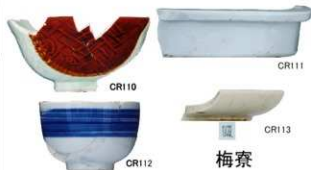
CR107A



CR107B

CR108

CR109



CR110

CR111

CR113

百合寮



CR114

CR115

CR116

梅寮



CR112

浴室廊下



CR117

CR118

CR119AB

CR120AB



CR121

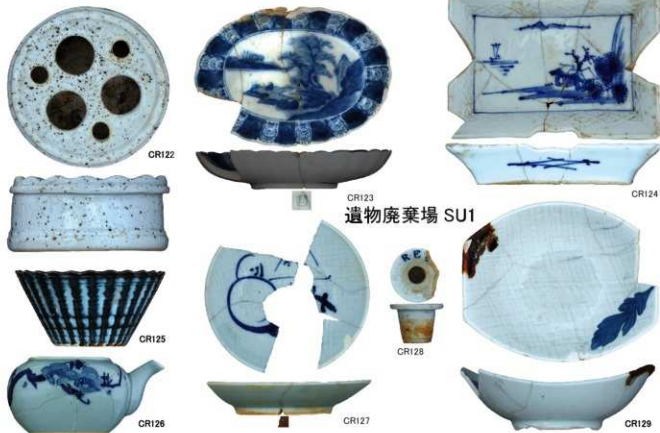
CR122



CR123

CR124

遺物廃棄場 SU1



CR125

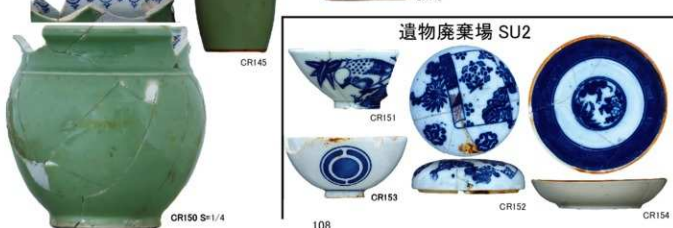
CR126

CR127

CR128

CR129

















GL045  
菊寮

GL046

GL047

GL048

GL062AB

GL052

GL051

GL059

GL060

GL050

GL053

GL055

GL057

GL058

GL061

GL049

GL070

GL054

GL053

GL055

GL056

GL072

GL069

GL071



GL063

隔離室



GL073

GL074

教室



GL076

松寮



GL077



GL078



GL079



GL080



GL082



GL083



GL092



GL084



GL087



GL081



GL088



GL090



GL091

撫子寮

S=1/3



GL093



GL094

大廊下



大廊下



菖蒲寮北外側



竹寮



堇寮



浴室廊下

梅寮

百合寮



出土位置不明



S=1/3

遺物廃棄場 SU1



遺物廃棄場 SU1



S=1/3

遺物廃棄場 SU2



遺物廃棄場 SU2



遺物廃棄場 SU3



遺物廃棄場 SU6





遺物廃棄場 SX4



遺物廃棄場 SX4





HT11



HT12



HT13



HT014



HT16



HT17



HT19



HT20



HT18



HT21



HT22



HT23



HT24



HT25



HT26



HT27



整髮具類



HT29



HT30A



HT30B



HT28



S=1/2  
HT31



HT32



HT33

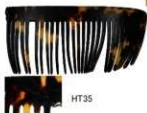


HT34

整髪具類



HT36



HT35



HT37

HT39

HT38

HT41

HT42



HT40



HT43

S=1/2



HT50

HT54

HT55



HT56

HT57

HT58



HT44

HT45

HT46

HT47

HT48

HT49



HT61



HT62



HT63



HT64



HT59

HT60

HT65



OT03

S=1/2

OT02 その他







MT26



MT28B



MT28A



MT29



MT31

S=1/6

金属製品



MT27



MT32



MT30



MT33

S=1/4



MT34



MT22



MT23

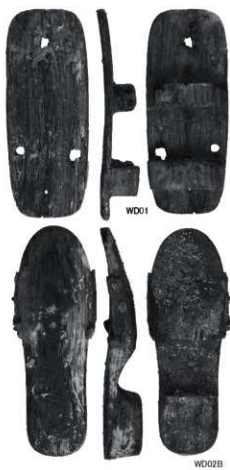
S=1/2



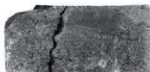
金属製品・銭貨



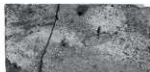
木製品 S=1/4



赤レンガ  
S=1/6, 1/2



RB044



RB134



RB136



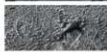
RB140



RB166



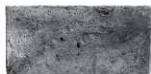
RB167



RB186



RB189



RB196



RB198



RB267

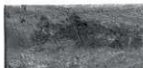
### 赤レンガ



RB270



RB293



RB295



RB296



RB304



RB342

S=1/6, 1/2



RB345



RB351



RB358



RB387



RB390

### 耐火レンガ



WB05



WB07



WB08



WB10

## 遺構写真

### A 萩寮



建物西側（南東から）



萩寮建物全景：北側壁基礎痕跡が黒く残る（北東から）



萩寮建物東端部分（北から）



萩寮：南辺排水溝 SD02（左）と壁基礎 SB008（東から）



同前（西から）



萩寮：壁基礎 SB08（北東から）



同前（南から）



萩寮：北辺排水溝 SD13と北側壁基礎跡（東から）



萩寮：土管列 SD10（西から）



萩寮：土管列 SD06（北から）



萩寮大型柱基礎 SB295.296（北東から）



萩寮：小型柱基礎 SB299（西から）



萩寮：栓付き円筒形短頭ガラス瓶出土状態（南から）

## B 隔離室



隔離室東様：入り口部分（東から）



隔離室西様：全景（南から）



隔離室北棟：全景（東から）



隔離室北西外側：不明遺構 SX1・2（北東から）





隔離室東棟：壁基礎 SB03 (北から)



同前 (北東から)



隔離室東棟：壁基礎 SB03 (南から)



隔離室東棟：壁基礎 SB80 (北西から)



隔離室東棟：壁基礎 SB80 (西から)



隔離室東棟：柱基礎 SB81 (東から)



隔離室西棟：壁基礎 SB91・排水溝 SD17 (東から)



同前 (南から)



隔離室西棟：壁基礎 SB02 中央・排水溝 SD16 (西から)



隔離室西棟：石列 SS1 と入り口部分 (南から)



隔離室西棟：大型柱基礎 SB64 (西から)



隔離室西棟：小型柱基礎 SB90 (南東から)



隔離室北棟：全景 (北西から)



隔離室北棟：北辺中央 (北から)



隔離室北棟：北辺排水溝 SD32 (北東から)



同前排水留め (HT40) 出土状態 (北から)



隔離室北棟：西辺排水溝 SD31 (北東から)



隔離室北棟：便所跡 SB226 と排水溝 SD33 (北東から)



隔離室北棟：壁基礎 SB259・便所跡 SB226 (北から)



同前：便所跡 SB226 中央部分 (東から)



隔離室北西外側：不明遺構 SX1・2 (北西から)



同前南西側部分 (東から)



隔離室北西外側：不明遺構 SX1・2 (南西から)



隔離室北西外側：壁基礎 SB283 (南から)



隔離室北西外側：壁基礎 SB283 (北から)



遺物廃棄場 SU3 下から検出した排水路 1 (北から)



排水路 1：SD51 (北東から)

C 菊寮



菊寮西側部分（北から、手前は隔離室北棟）



菊寮北西部分（北東から）



菊寮：南側排水溝 SD01 と土管列 SD38 (南東から)



菊寮：壁基礎 SB303 と柱基礎 SB305 (東から)



菊寮：壁基礎 SB303 と柱基礎 SB86 (南東から)



菊寮：壁基礎 SB292 (北から)



菊寮：壁基礎 SB83B (東から)



菊寮：壁基礎 SB83A と 83B (東から)



菊寮：壁基礎 SB83A・SB82 と北側排水溝 SD03 (東から)



菊寮：壁基礎 SB281 と北西側排水溝 SD36 (北から)

D 董・撫子寮



董寮：西側全景（東から）



撫子寮中央部全景（北東から）



董寮：北辺（東から）



董寮：北辺（西から）



董寮：北辺中央（北から）



董寮：壁基礎 SB116（西から）



董寮：壁基礎 SB103・104（北から）



董寮：南辺中央（東から）





撫子寮：東端（北から）



撫子寮：壁基礎 SB127・132AB（南から）



撫子寮：北辺中央（東から）



撫子寮：南側張り出し SB118（浴室廊下、北から）



撫子寮：南側張り出し SB118（浴室廊下、東から）



撫子寮：北側張り出し SB123・125（東から）



撫子寮：壁基礎 SB325・SB338（南から）



撫子寮：土管列 SD45（北から）

## E 教室



教室全景（北西から）



教室全景（南から）



教室：便所 SB151 (北から)



同前 (南西から)



教室：南側壁基礎 SB152 (南西から)



同前中央部分 (南から)



教室：東側柱基礎群 (北から)



同前 SB155 東側 (北から)



教室：西側柱基礎群 (北から)



教室：排水溝 SD21 集水マス (北東から)

F 仏間



仏間全景（北西から）



仏間全景（北東から）



仏間：柱基礎 SB176 と付加されたコンクリート基礎（西から）



仏間：柱基礎 SB182（西から）



仏間：柱基礎 SB188（手前）と壁基礎 SB186（奥）（南から）



仏間：壁基礎 SB187（北東から）



仏間：壁基礎 SB185（西から）



仏間：柱基礎 SB196（奥）とコンクリート基礎攪乱（南から）



仏間：柱基礎 SB204（西から）



仏間：埋葬 SJ2（南から）

G 梅寮



梅寮全景(東から)



梅寮東端部分(北から)



梅寮：便所 SB205 全景（西から）



同前（南から）



同上南側（南東から）



同前北西隅（北から）



梅寮：壁基礎 SB212（西から）



梅寮：壁基礎 SB215,214 と排水溝 SD22（西から）



梅寮：排水溝 SD22 西側（北から）



梅寮：円筒形モルタル SJ3（南東から）

H 竹寮他



竹寮西端：全景（東から）



竹寮西端：便所 SB347（北西から）





竹寮西端：南側（東から）



竹寮西端：北側（東から）



竹寮西端：北西隅（北から）



竹寮西端：南西隅（南西から）



竹寮西端：便所 SB347 アーチ構造（北西から）



同前全景（南東から）



竹寮西端：壁基礎 SB346（南西から）



竹寮西端：壁基礎 SB355（北東から）



竹寮西端：壁基礎 SB359 (南東から)



竹寮西端：壁基礎 SB348 (西から)



竹寮西端：大型柱基礎 SB357 (西から)



竹寮西端：大型柱基礎 SB352 (東から)



竹寮西端：中型柱基礎 SB342 (西から)



竹寮西端：中型柱基礎 SB343・344 (北から)



竹寮西端：壁基礎 SB356 と排水路 2 SD4 (北西から)



同前 (西から)



竹奈東端：全景（北から）



竹奈東端：便所 SB374 と排水路 4 (SD588 集水マス) 全景（北から）



竹寮東端：壁基礎 SB375 (南西から)



竹寮東端：壁基礎 SB377 (北から)



竹寮東端：排水路 SD59 と柱基礎 SB371 (西から)



竹寮東端：柱基礎 SB383・395・396 (北から)



中間地点：貯水遺構 SB363 (西から)



大廊下北：柱基礎 SB364 (北から)



松寮南辺 (南から)



松寮：排水溝 SD54 と柱基礎 SB370 (東から)

# I 大廊下



大廊下南側突出部 SB04-06 と柱基礎 SB92・93 (南から)



北側西柱基礎 SB339・286 (北から)



南端部水路群 SD42・43・46・48 と SB319・324・337 (南東から)



大廊下：北側西突出部 SB284 (北から)



大廊下：北側東突出部 SB285 (北から)



大廊下：南側突出部中央 SB06 と柱基礎 SB84・89 (南から)



大廊下：南側東突出部 SB05 (南から)



大廊下：北西側壁基礎：SB279・294 (東から)



同前：北側西突出部 SB284 との接合部分 (北西から)



排水路 2：SD04 南端集水マス (南から)



大廊下：中央東側突出部壁基礎 SB47 (北東から)

J 排水路 3



排水路 3 : SD37 全景 (北から)



同前 (南から)



同前土管部分 (北から)



同前北側集水マス (東から)



同前南側集水マス遠景 (北から)



排水路 3 : SD37 (南東から)



同前 : SD37 南側集水マス (北西から)



排水路 3 : SD37 土管列 (南西から)



同前 (東から)



排水路 3 : SD39 (西から)



同前 : SD39・47 (東から)



K 藤奈他



藤奈・百合奈全景 (南東から)



藤奈全景 (東から)



藤寮：中央部分（北から）



藤寮：北東隅（北東から）



藤寮：南辺西側（東から）



藤寮：南辺排水溝 SD61 西端（東から）



藤寮：南辺東側（西から）



藤寮：壁基礎 SB409 西側（北東から）



藤寮：北辺東端（東から）



藤寮：北辺中央（北西から）



藤寮：壁基礎 SB413 (東から)



藤寮：壁基礎 SB398と柱基礎 SB391 (北から)



藤寮：便所 SB408 (西から)



同前 (北から)



藤寮：北東隅張り出し部 (北から)



藤寮：東端部分 (北西から)



藤寮：壁基礎 SB379 (東から)



百合寮：南辺排水溝 SD55 西側 (南東から)

## L 遺物廃棄場



遺物廃棄場 SU1 全景 (北から)



遺物廃棄場 SU2 全景 (東から)



遺物廃棄場 SU2 中心部分 (南から)



遺物廃棄場 SX4 取り上げ後 (西から)



遺物廃棄場 SU3 全景 (東から)



遺物廃棄場 SU3 中心部分 (東から)



遺物廃棄場 SU4 (東から)



遺物廃棄場 SU5 : 中央奥の低い部分 (南から)



遺物廃棄場 SU6 : 中央部分 (東から)

## 発掘調査報告書抄録

ふりがな	しんまちとさきいせき2							
書名	新町戸崎遺跡 2							
副書名	新町防災アリーナ建設に伴う旧織紡新町工場若草草跡発掘調査							
巻次	なし							
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 488 集							
編著者名	坂井 隆 矢島 浩 滝沢 匡 竹原弘展							
編集機関	高崎市教育委員会							
所在地	370-8501 群馬県高崎市高松町 35 番地 1							
発行年月日	2023 (令和 5) 年 3 月 31 日							
(ふりがな) 所収遺跡名	(ふりがな) 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
しんまちとさきいせき 新町戸崎遺跡 2	しんまちとさきいせき 群馬県高崎市新町 2330-40 番地	1012020	801	36° 16' 41"	139° 06' 16"	2020.4.20- 2021.3.31	6,242	体育館建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新町戸崎遺跡 2	工場寄宿舎跡	近現代	織紡新町工場寄宿舎跡 14 棟基礎	陶磁器・ガラス瓶・ 整髪具・洗面具・ 製糸器具部品・金 属製品・刻印レン ガ		旧新町紡績所（国重文および史跡）を引き継いだ工場の明治末から昭和 13 年頃に建設された女工寄宿舎群。隣接の製糸工場からも含む工場内の遺物一括廃棄場も複数検出。		
	中山道新町宿	近世	なし	陶磁器・棧瓦		北東 100m ほどで宿場西端のため、個別廃棄された遺物が混在。		
	遺物散布	中世	なし	内耳土鍋		1点のみ。		

高崎市文化財調査報告書 第 488 集

## 新町戸崎遺跡 2

新町防災アリーナ建設に伴う旧織紡新町工場若草寮跡発掘調査

発行日 令和 5 年 3 月 31 日

編集 高崎市教育委員会文化財保護課

発行 高崎市教育委員会

370-8501 群馬県高崎市高松町 35 番地 1

電話 027-321-1292

印刷：荒瀬印刷株式会社